

ホームレス自立支援活動海外事例報告書
ーアメリカ東海岸の支援団体4事例ー

2001年4月

ヒューライツ教育財団

慎 和枝

はじめに・・・

現在アメリカには無数のホームレス団体が存在する。この事例調査にあたり私は、星の数ほどあるホームレスの中からまず、日本のホームレス活動に役に立ちそうな活動をしている団体を探すことにした。そしてその中から活動規模がある程度あり、其れなりの功績をおさめている団体を選んでいった。事例調査は、私が住むNY周辺およびその他東海岸の都市を中心に行われた。これは、私の本業である大学院での研究活動と大学での講義のスケジュール上、その他の地域にでむいて見学をする時間の余裕が無かったためと、そしてNYはホームレスの支援活動が大変活発でその歴史が長い為、自立支援の事例調査をするのには理想的な場所であったためである。

しかし、日本のホームレス活動に役に立ちそうな活動をしているところ（高齢の男性を対象にしているプログラム）となると団体の数はかなり絞られてきた。というのも現在のアメリカのホームレスは女性や子供が増えており、殆どが麻薬中毒者で、日本のホームレス人口と基本的な属性が異なるからである。また突然の日本の団体からの事例研究への協力に応じてくれる団体となるとさらに数は限られ、結局3月までに4件の団体とアポイントがとれ調査の協力に応じてくれることになった。この報告書ではその4団体の活動内容を紹介することにする。依頼の調査項目は、①支援住宅、通勤寮などのサービス、②カウンセリング、そして③就労支援活動（新しい産業の開発を含む）の3点であったため、今回の調査はその3項目に焦点を当てて行った。

初めに紹介する団体はNYのマッドisonにあるコーリーションフォーザホームレス（CFTH）と言う団体で、NY市内で最も有名なホームレス支援団体である。CFTHは「NYの全ての人々がベッドで寝る権利を保障する」ベッドロック法をNY州に制定させるよう働きかけた団体で、ホームレスのシェルターの確保と無料食料配給に力を入れており、自立支援活動としては女性の就労活動の支援を行っている。彼ら就労トレーニングは女性を対象にしているが基本的なものの考え方は役に立つと思われたので報告書に含む事にした。

その次に報告するのはワシントンDCにある、DCセントラルキッチンと言われる団体で、食はホームレスを救う」をモットーに斬新な調理技術の就労トレーニングを行っている。この団体は政府に食材寄付保護法を制定するように働きかけた団体でもある。使いきれずに捨てられていく食材をレストランや食料品店から「救済」し、ホームレスの人々の食事に変えていくと同時に彼らの就労トレーニングをおこなって、飢餓とホームレス問題を解決していこうというユニークな団体である。その活動内容は現在全米の様々なところで模倣されており、活動内容をアメリカのマスコミが取材したビデオをこの報告書と一緒に送るのでそれを参照していただきたい。

3番目に紹介する団体はドゥ・ファンドと言われるNYの団体で、ここはホームレスシェルターを自ら運営し、ホームレスを雇って地域の清掃活動をし、最も援助しにくいと呼ばれる依存症のホームレス男性の自立支援活動を行っている。この団体のモットーは「Work Works（仕事でホームレスを自立させる）」で、カウンセリングやリハビリといった基礎支援活動を飛び越して、いきなりホームレスに仕事を与え自立に向けての支援活動をおこなうという大胆な発想をもった団体である。NHKが取材したビデオをいただいたので参考資料として送るが、NHKが報告す

る活動に内容やアメリカのホームレス事情に関する取材内容には若干間違いがあると思うので、それらについてはこの報告書を参考にしていただきたい。ただし、NHKが取材したスタッフの話などは興味深いので是非見てもらいたいと思う。

最後に紹介するのはコモングラウンドという団体で、NYで1番大きな規模の支援住宅を運営している団体である。他の団体と違いコモングラウンドの住宅は通勤寮のような通過的住宅ではなく(半)永久・終身制住宅で、その住宅の中に就労トレーニングや心療・職業カウンセリングと言った様々なサービスが設置されており、支援住宅が単なる住宅として機能するのではなく一つのコミュニティとして機能する事を目指しているユニークな団体である。

こうして団体の概要を紹介しただけでも、多種多様な活動がアメリカのホームレス自立支援活動のなかで行われていることが分かると思う。また今回は日本の活動に役に立つコンセプトやアイデアを探す事が目的のひとつであったこともあり、あえて多様な内容の活動をしている団体を選んで取材することにした。この報告書では、先に述べた3項目に焦点を当て其々の団体がどのような基本理念(コンセプト)に基づいてホームレスの自立支援活動をしているのかを説明していこうと思う。出来るだけ詳しく活動内容を調べ、バランス良く報告書としてまとめたつもりだが、向こうの多忙なスケジュールのせいでインタビューの時間が限られたり、きちんとした資料がなかったりしたため、報告の内容は各団体ごと多少ばらつきがあるが御了承願いたい。また、報告書の中には日本語表現が不自然なところがあり失礼も多々あると思うが、長引く海外生活のせいと免じ、ご容赦いただきたい。

ケース① コーリションフォーザホームレス (マンハッタン、NYC)

【団体の歴史】

約 20 年前、NY 市内の路上で眠っていた一人のホームレス男性と一人の弁護士との出会いがこの団体の生まれたきっかけとなった。路上で野宿していたホームレス、ロバート・カラハンと通勤途中出会った弁護士ロバート・ヘイズが、「NY の全ての人間がベッドで寝る権利が法律で保護されるべきである」と共に訴え、同士を集い NY 市と州を相手取り裁判を起こしたことが、この団体が生まれる基盤を作り上げた。この裁判で勝訴した後も、この訴訟の為に立ちあがった人々が引き続きホームレスのための運動を続け、その活動がその後団体としての形を持つようになり現在の CFTH に至ったのである。

【CFTH の団体宣言—Mission Statement】

「CFTH は全てのホームレス（男性、女性、子供を含む）を援助するアメリカにおいて最も古く最も進歩的な非営利団体である。我々は“市民社会において、全ての個人は適切な住居、十分な食事、そして生活を営めるような仕事に就労する機会を持つという基本的権利を持っている”という理念に基づいてホームレスの救済活動に全身全霊をささげている。1981 年のカラハン-キャリー裁判における我々の初の勝訴は、全ての NY 市民がシェルター（避難所）で眠る確固たる権利を保障した。その勝利は、困難の度合いに関わらず全てのホームレスが尊厳と威厳をもって生きる価値のある人間であるという我々の信念を世の中に広めてくれた。以後、CFTH は様々な訴訟、草の根運動、教育、そして直接支援活動をつづけ、多くの野宿者たちから貧困の永遠の解決を目指し闘いつづけている。ホームレスと貧困問題の唱道に努めると同時に、我々は直接支援活動によって、毎日 NY の 3,500 人以上のホームレスたちの窮乏に援助と支援を行っている。CFTH はホームレスの男性、女性そして子供達の目の前のニーズに対応する傍ら、彼らの窮地に対し長期にわたる問題解決の支援を行っている。このホームレス救援活動の経験と知識をもって、人間が人間らしく生きていけるように、効率のよい抜本的なホームレス問題解決策を提唱することに我々は日夜、努力を惜しまない。

原文 (Original)

“The Coalition for the Homeless, the nation’s oldest and most progressive organization helping homeless men, women, and children, is dedicated to the principle that in a civilized society every individual has a fundamental right to decent shelter, sufficient food, and the chance to work for living wage.

Challahan v. Cary, our first legal victory over the City of New York in 1981, guaranteed the bedrock right to shelter for all New Yorkers. The triumph helped

broadcast our conviction that every homeless person – regardless of his or her level of turmoil—deserves to live with dignity and respect. Since then, the Coalition for the Homeless has fought for lasting solutions to the crisis of mass homelessness through litigation, advocacy, grassroots organizing, public education, and direct services.

While the Coalition’s advocacy efforts address the large-scale issues of homelessness and poverty, our direct service programs provide immediate, critical relief to more than 3,500 homeless New Yorkers everyday. The Coalition meets the immediate needs of homeless, men, women and children while we work for long-term solutions to the crisis of mass homelessness. We provide a continuum of care from emergency assistance, to transitional services, to programs that enable permanent self-sufficiency. We use this frontline experience in serving the homeless to advocate for fundamental solutions that are humane and more cost-effective than current government programs.”

インタビューから・・・

(コミュニケーションディレクター、ジェン・ナッセルさんとの会談をもとに)

【自立へのハードル】

—CFTHが指摘するホームレスが職につくための困難な点

ホームレスの自立にあたって困難な点は、日本におけるホームレスのそれとほぼ差異は無いと考えてよいと思う。インタビューから聞き取ったホームレスが直面する困難な点は、1) 連絡先の無い事、2) 安定した職業につくだけの教育レベル、技術、知識の欠落、3) 自尊心の低さ、4) 就職情報の届きにくさ (ネットワークが無い、紹介してくれる人がいてない、新聞などの広告を見る機会が無い)、5) 薬物、アルコールなどの依存症、6) 就職活動をするために安定した生活基盤を気付くだけの経済力がない、ことなどである。

日本と同様に、NY 市内でも住宅は慢性的に不足しており、マンハッタン市内において空き部屋のテナントが48時間以内に決まらない事はないと言われるほど、賃貸住宅の競争率は高い。また、NY で仕事をみつける事はとても難しく、どのような職種でも、空けば直ぐ埋まるというのが現状である。また、アメリカは学歴だけではなく、経験と能力を重視する実力社会であるため、技術や経験が乏しいホームレスの人々が安定した一般職業に就職することはきわめて難しい。工場などの単純作業の仕事は市内を離れ、郊外に渡ってしまったことも、技術経験の少ないホームレスを含む下層階級が就職できたとしても不安定なサービス業にしか就けないという現状を生んでおり、結局またホームレスに逆戻りと言うケースが少なくない。このような背景から、特別な職種の開発をしている団体がアメリカでは増えているが、CFTH はあくまでも一般的な社会生活への帰還と自立を目指し、特別な職種の開発ではなく、一般職種への再編入を目指したプログラムの開発をしている。そのプログラムの一部の内容を以下に報告しようとおもう。

【CFTHの自立支援プログラム：COALITION PROGRAMS】

【CFTHの自立支援プログラム概要とコンセプト】

CFTHの自立支援プログラムの成功の秘訣は、ホームレスの目の前の必要に応じるだけでなく、一人一人の個人の個性とニーズにそってその人に合った長期的な自立支援プランを立てて支援するところにある。ホームレス状態から脱出し持続した自立を獲得するためには、ホームレスの一人一人が確実に経済・社会的自立および精神的安定を再得できるように援助する事が重要である。そのために、CFTHは住宅確保、就労訓練を助けるさまざまな直接支援プログラムを提供している。

[I]危機仲裁プログラム－Crisis-Intervention

これはホームレスの緊急のニーズに対し事務的遅延のない、早急な対応と支援を行うプログラムである。CFTHのオフィスには相談窓口が設置され、常時約30名からなるカウンセラーが彼らの要求の対応に努めている。長期的なホームレス状態からの脱出より、ホームレスになりかけている人をホームレス状態に陥る前に助けるほうがより効率的で、簡易であるという経験的見地から、このプログラムは設けられている。相談窓口には、日々50人から75人のホームレス状態の人、あるいはホームレス状態に陥りかけている人達（家賃を滞納して追い出されそうになっている人々）が、団体のスタッフに相談に来ており、スタッフ・カウンセラーは公的機関と比較にならないほど迅速にホームレスに陥る危機的状态にある人々の要求と問題の相談に応じている。

私がインタビューに訪れたとき、この危機仲裁プログラムを訪ねた人々のための待合室で、私もネッセルさんを待っていたが、待合室にはケースワーカー達との面談を待っている老若男女のホームレスの人々が30人ほどいた。待合室のすみには食事が出来ない人々の為に無料のマフィンとミネラルウォーターが置かれており、それを無心に食べている男性たちの姿が印象的であった。見るからにホームレスと言う人もいれば、最近ホームレスになったとしか思えないほどきちんとした身なりの人まで様々で、NYの住宅事情の悪さを物語っていた。

例－1）アンドレアは緊急の家賃の援助を求めて当センターに来る。彼女と彼女の小さな娘は立ち退きまであと1日と言う切羽詰った状況だった。アンドレアは夜勤をしており、幼い娘の面倒を見てくれる託児所やベビーシッターを見つけられなかったため、子供の面倒を見てくれる親戚が見つかるまでの間、彼女の勤務時間は減ってしまい、収入がどんどん減っていき家賃を滞納してしまった。子守りがみつきり勤務時間が増えてた後、なんとか家賃の滞納金のうち2000ドル（約20万円）を工面できたものの、残りの1,050ドルが工面出来ず、ついに立ち退きを迫られる事になった。公的援助の窓口で援助を断られた後、ついにCFTHに最後の望みを託してやって来た。CFTHの危機仲介のカウンセラーはアンドレアに家賃援助金をその日のうちに受給し、アンドレアと彼女の娘はホームレスにならずにすんだ。（CFTHのプログラムサマリーより引用・翻訳）

[II]リハビリテーション (Rehabilitation)

これは経済社会自立の基盤となる心身の自立への一步を踏み出す手助けをするプログラムで、医療知識のあるカウンセラーたち（医師免許ならびに看護免許があると思われる）が常勤しており、アルコール、麻薬等の依存症、精神病、およびエイズなどのホームレスの人々の身体的問題に対応している。カウンセラーはあくまでもクライアント（CFTHに援助を求めてきた人々）が病院や施設に入る必要があるかどうかをチェックし、その必要がある場合はその施設との仲介、紹介を行う。カウンセラーは紹介作業だけでなく、その施設にクライアントを移した後も、モニ

ター活動をつづけ、リハビリがちゃんと行われており、本人がきちんとリハビリを受けているかなどを定期的にチェックもしている。

【Ⅲ】就労支援プログラム First Step Job Readiness Program

CFTH の就労支援プログラムは女性のためのトレーニングで、男性のためのトレーニングはやっていない。なぜ彼らが女性のためだけにトレーニングを行っているのかという理由は、このプログラムがもともとホームレスの女性たちとのカウンセリングから生まれたという背景が一つにある。ホームレスとなった女性の多くは家庭内暴力の被害者で、自分で生活をしていく能力が欠落している人が多い。CFTH ではもともと就労トレーニングのプログラムはなかったが、これらホームレスの女性たちのカウンセリングをしているうちに、彼らが自立をするためには就労意欲を促進させるカウンセリングだけではなく、実際に就労するための技術、能力を身につける手助けをする必要があるという、経験的発見からこのプログラムは生まれた。

男性のトレーニングをやっていないのは、トレーニングが男性には必要無いというのではなく、たまたまこの団体ではやっていないだけだと言う事らしい。時間と予算と、十分な人材でさえあれば、男性のトレーニングのプログラムも始めたいと CFTH 関係者は述べている。

このプログラムは正式には、1991 年に「ファーストステップ・ジョブ・レディネス・プログラム」という名前がつけられ、ホームレスの中でも特に弱い立場に置かれている女性、シングル・マザー（独身の母親達）のために設置された。このプログラムは、毎年約 150 人の低収入でホームレスの女性たちに対し、就労トレーニングおよび自尊心の再構築といった彼女たちが労働現場に再参入し、経済的自立を獲得するために必要な価値観や姿勢などの習得を支援している。

新しい福祉制度下において福祉を受けてから労働現場への再参入をするまでの期間が定められるようになり、福祉受給中労働現場へ参入するための就労トレーニングを受けなくてはならない事が義務付けられている。しかし、殆どの者がまともな職業を得るだけの技能や能力を持っておらず、また NY 市の就労訓練は不適切な内容（ファイルの整理や公園の清掃など）で福祉受給者の根本的自立支援にはなっていない。そこで CFTH は、彼女たちがまともな職業、つまり保険や休暇などの手当がついてこない不安定なサービス業ではなく、高給で手当のついたオフィスなどの事務職につけるような技能を身につける手助けをしている。

【就労トレーニングのカリキュラム】

このプログラムは 16 週間にわたって行われ、初めの 4 週は授業、そして残りの期間は一般企業（一流企業である事が多い）での実務研修からなっている。初めの 4 週間は毎日（月曜から金曜）CFTH で授業がある。授業時間は合計 40 時間で、授業では、まずコンピュータの使い方（ワード、エクセル、インターネット、電子メールの使い方など一般事務で必要とされる知識）、事務経理などの知識などの実用的技能などが指導される。

これらの授業は、The Fund of the City of New York (CFTH のパートナー機関)によって行われる。クラスのサイズは小さくするよう心がけられ、1人の教師に対し7人の生徒というのが一般的である。また、これらの授業と平行して医療・診療カウンセリングの専門家が家庭内暴力、子供や家族とのトラブルなどの問題を抱える女性のためのカウンセリングも必要に応じて行われ、プログラムの参加者がプログラムをきちんと続けて就職し、自立していくための精神的安定を保てるよう支援している。

実務的授業のほか、一般企業の研修がはじまる直前に、特別授業としてビジネスマナーとコミュニケーション（挨拶の仕方、話方、電話の応対、ビジネスランチ、ディナー、パーティーでの作法、服装、髪型、化粧の仕方など）が指導される。これは、CFTH のスタッフではなく、一般の企業からのボランティアが、CFTH の就労プログラムに参加している女性の為に行っている特別授業である。参加している企業は、世界的に有名な化粧品会社のエスティーローダー (Estee Lauder) やスタイルワーク (Style Work) など、これらの会社のビューティーコンサルタントによって、就労トレーニングの参加者は専門的な化粧法、身だしなみの指導を受ける。生活に追われ、お洒落をして自分を磨くなどという精神的及び経済的余裕の無い女性達の自尊心を向上させるために、これらの活動が行われている。また、仕事場に来ていく服が無いという人の為に、ドレス・フォー・サクセス (Dress for Success) や ザ・ボトムレス・クロセット (the Bottomless Closet) というブティックが仕事場で着るスーツなどを無料で提供している。

これらの授業のあとはインターンシップ（実務研修）がある。インターンシップ（研修）は12週間にわたり一般企業でおこなわれ、主に事務職員の研修生として実務研修をすることになっている。詳しい研修内容は研修が行われる企業と職場によって少しずつ異なるが、殆どの場合が一般事務（ワープロ、表計算、伝票整理など）である事が多い。研修期間中は、CFTH のケースワーカーに週2~3回、研修内容などを報告することが義務付けられており、研修生として本当に研修をきちんと問題無く行っているか、定期的にチェックされる。研修生が直面する問題としてセクシュアルハラスメント、同僚からのいじめ、上司からの冷遇などがあるが、このような問題があった場合は、ケースワーカーが仲介者となり問題解決に向けて支援する（研修現場を変えるなど）。基本的には研修職場では、上司以外の人にはあえて研修生がもともとホームレスであったと言う事実は知らさない事になっている。それはあえて個人のプライバシーに関わる事をわざわざ職場の人間に伝える必要が無いと言う考えによるものであって、あえて隠しとおすべきであると言うのではない。

このプログラムをきちんと卒業できた女性の数は年間全受講生の70%で、卒業生の90%以上は研修したところより良い職場に就けている。この高い就職率は、まずハードな就労プログラムを卒業して就職するだけのやる気が本人にあるかどうかを、事前のカウンセリングで確かめてからプログラムに参加させているということ、そして研修をすると言う事によって、一流・一般企業での実務経験を積むことができたということのお陰であると思われる。

アメリカでは、実力と経験が就職の鍵を握っているため、職歴がまったく無いというのでは、まともな仕事を持つことは大変難しい。それゆえに就職活動前に就労プログラムに参加し、一流

企業での研修を終えたという事を履歴書に書ける事は就職するのに大きなプラスになっている。また、研修現場が中小企業ではなく、大手の一般企業（ChaseBank, Citibank, TimesWarners等）であり、研修する事によって紹介状をこれらの一流企業の上司から書いてもらえると言う事も、ネットワークのない彼女らがマイナス点を乗り越えていく上で大変役立っているようだ。

【就職活動支援】

NY のホームレスが就職しにくい点として、ネットワークの無さ(紹介する人がいない)、情報の届きにくさ、そして競争率の高い就職市場で勝ち残るだけの経験、技術が無いと言う事があることは既に述べた。技術と経験に関しての支援としては、先に述べた就労トレーニングがあり、このトレーニングの一環である研修が就職活動の情報を得るのにも役に立っている。さらに、企業での研修活動は実務経験を積むとだけでなく、研修中の仕事振りさえ認められれば研修先の上司から新しい職場の紹介、あるいはそのまま職場に残ることも可能であるため彼らの就職先にもなっている。それ以外の就職先に関してはCFTH 自体に寄せられる求人情報、あるいは求人雑誌、一般求人広告に目を通し本人に合った仕事先を見つける手助けをケースワーカーがしている。

ホームレスのための特別な産業の開発にはCFTH は取り組んでいない。特別産業や職種の開発にあたっていないのは、「ホームレスの自立とは、彼等を普通の社会で自分の力で生きていくことをであり、社会から隔離したかたちで支援しても彼らの自立を実現する事は出来ない」というCFTH の基本理念からきている。特別職種を開発する事によって、そこでしか働けなくなったり、そこでの人間関係でしか生きていけないというのでは、本当の自立の支援にはならないというポリシーに基づき、あくまでも一般社会の中へ還元していける自立の支援のあり方を彼らは模索している。この考えは彼らの就労トレーニングのあり方にも反映されている。

【IV】教育支援

日本も同じであると思うが、学歴社会のアメリカにおいて安定した職業に就くには、まず最低でも高校の卒業資格、あるいは其れに相当するGED(通信教育による高卒の資格)が必要である。しかし、多くのホームレスはその資格を持たないことがある。CFTH では、その資格が無い人々のために通信教育で資格が取れる手助けをしている。スタッフ、あるいはボランティアの手助けによって、マンツーマンで卒業資格が得られるように教育指導をしている。

【V】カウンセリング

カウンセリングは、CFTH のホームレス自立支援の中で必要不可欠なものである。しかし、CFTH ではカウンセリングプログラムという独立したプログラムをもたず、カウンセリングは、その他のプログラム(医療、リハビリ、就労、住宅 など)と併用して必要に応じて行われている。また、

プログラム別にケースワーカーを振り分けるのではなく、一人のクライアントにつき一人のケースワーカーがつくというのが一般的で、殆どのケースワーカーが危機救済から、就労、住宅確保までのカウンセリングとモニターリングを継続的に行っている。(ただし、医療カウンセリングに関しては例外で、医療カウンセリングは専門の職員がカウンセリングにあたっている。)

CFTH で働く職員の殆どがケースワーカー、ソーシャルワーカー、カウンセラーとしての役割を果たしており、危機救済援助のカウンセリングにあたっているのが約 30 名、其のうちの半分以上がカウンセラーとしての資格を持っている。全てのプログラムはこれらのスタッフの献身、厳格そして誠実なカウンセリングが潤滑油的役割を果たす事によって、成功していると言って良いだろう。ホームレスとして孤独と挫折、絶望を味わった人々にとって、ケースワーカーたちの持続的な激励、支援は彼らが求めている最も大切な心のケアであり、CFTH は時間が許す限りクライアントのニーズ、問題に対応するよう努めている。また、一対一のカウンセリングが苦手な人には、立場の似た人達と合同のグループカウンセリングなどが用意されている。

[VI]住宅支援

【住宅支援の基本的コンセプト】

CFTH の住宅支援の基本的なポリシーは、「家と呼べる場所を探す」ということである。つまり、寮やシェルターと言うのではなく、心身ともに安らぐ事が出来る「家」探しが彼らの住宅支援のモットーである。といっても、NYC の住宅状況の悪さは世界的に有名で、本当に「家」と呼べるまともな住宅を確保するのは中産階級の人々でさえも極めて難しい。安定した住宅を確保できれば、いくら安定した仕事を持っていてもそれを継続できず、ホームレス状態に逆戻りという悪循環が起こる。こうした事実を背景に、CFTH ではとにかく何でも良いから住居を与えるというやり方ではなく、あくまでも「その住宅を彼らの心身の安らぎと安定を与える家になるかどうか」ということを念頭において彼らの住宅確保の支援にあたっている。

この考え方から、CFTH の住宅支援プログラムは、ホームレスであれば誰でも参加できるという風にはなっていない。参加するには、確保した住宅を手放すことなく継続的に住みつづけることが出来るだけの経済力があるか、あるいはその能力を獲得しようとするやる気があるかがまず問われる。つまり彼らの住宅支援プログラムは、ホームレスの誰もが受けられると言うのではなく、一定の自立能力(あるいは潜在能力)が備わってきたクライアントだけが受けられるシステムになっている。プログラムの参加条件として、1) 薬物アルコールなどの依存症が無いか、あるいは克服できているか、2) 高校卒業資格あるいは GED (高校卒業資格に相当する資格)があるか(あるいはその資格獲得に向けて努力をしているか)、3) 2) に関連して、あるいはそのような職業につくだけの能力と動機があるかなどがある。

こうしてみると参加条件はとても厳しいように見うけられるが、実際ホームレスに逆戻りしないためには、これぐらいしっかりと基盤を築いてなければいけないと関係者は述べている。またホームレスから住宅を確保するまでにいたる全ての段階でしっかりと必要な時間をじっくりか

けて彼らをサポートするシステムを持っているので、この条件を満たすのは決して無理ではないというのが CFTH の意見である。実際、世間一般のステレオタイプとは裏腹にホームレスの人達の多くが、これらすべての条件に合うようになって、まっとうな社会生活を送りたいが、そこにいたるまでにある全ての段階のハードルを自分一人で乗り越えていくのは難しいというのが現実である。CFTH はそのハードルを一つ一つ越えていく支援を提供している。そして CFTH の支援の手をかりて、この参加条件を満たすまでの努力を続けるホームレスの人は決して少なくない。実際、この条件を満たすまで努力をしたホームレスの人のほうが、CFTH の住宅プログラムで確保できる住宅件数よりはるかに多い。この事実からも、いかに住宅状況がホームレスの増加に深刻な影響を与えているかが分かるだろう。

【レンタル・アシスタント・プログラム : Rental Assistant Program (RAP)】

このプログラムは、心身、経済的自立をするまで後一息と言うところまで来ているホームレスの人々に、200 ドルから 400 ドルまで（平均 300 ドル＝約 3 万～3 万 2000 円）の家賃の援助を行うと言うものである。この援助は 2 年まで（延長される事もある）続き、個人の場合の平均援助額は 200 ドルから 300 ドル、家族の場合は 300 ドルから 400 ドルである。

このシステムはホームレスの人々が自立していく過程での給与と NY 市内の平均家賃のギャップを少しでも埋めて、彼らの継続した自立を支援しようと言うものである。このプログラムの利用者の属性は老若男女、実に様々な人が利用している。

日本も同じような考え方があるが、個人主義が主要な文化的価値観であるアメリカでも、「福祉に頼って生活する」というのは恥ずかしい事だと考えられている。また、福祉に頼る人間は怠けていると一般的に強く信じられている。このレンタルプログラムの内容を私の大学の教え子に話したときも、「援助に頼って自分で稼がない人が逆に増えるのではないか？」という声が圧倒的に多かった事実は、このアメリカ社会に浸透する一般的な誤解を裏付けていると思う。しかし、実際はこのレンタルプログラムの支援を受けた 3 分の 1 の人が 2 年の期限を待たず、この支援から自立し、さらに安定した住宅や仕事へと就いていっている。全体の 85% の RAP の卒業生が最終的に社会、経済、精神的自立を果たしている。現在 CFTH ではこの卒業生がその後も継続的に自立しているかのフォローアップ調査・カウンセリングを計画している。

このプログラムはその成功から、現在 NY 市及び州からホームレス支援のモデルプログラムとして奨励され、このプログラムの補助金の支給が市と州から出されるようになった。その結果、他の支援グループも同じプログラムを始めている。

【分散型住宅プログラム : Scattered Site Housing Program】

分散型住宅プログラム (SSHP) は 1989 年にはじめられ、ホームレス状態およびエイズ（ならびに不治の病：精神病、癌など）に苦しむ個人と家族に対して設けられたプログラムである。病気のため入居拒否にあっているホームレスの人々を救済するために、カウンセリングと医療サー

ビス、そして住宅確保といった心身と経済的ケアのサービスの提供もこの住宅プログラムはおこなっている。また病気とホームレスと言う事情のため、家族と連絡が取れないで死期を待つ人々の為に、家族との連絡を取り人間が人間としての尊厳を保ち死を迎えるための手助けをすることもしている。

クライアントたちが、より心地よい生活が出来るようにカウンセリングだけでなく、食事配達やより良い家具等の設備の設置、そして必要に応じてクライアントの為に買い物を代行、車での送迎、服の提供、彼らの病気の治療に必要な医療品及び器具の提供なども行っている。また、彼らの病気と精神状態によっては、彼らがもう一度働けるようになるための就労トレーニングも行っている。また、彼らが孤独に苦しまないように、地域のイベントへの参加（詩の朗読会、博物館・美術館ツアーなど）が出来るよう協力している。現在 SSHP は、このプログラムに参加しているもの同士が助け、励まし合えるように、クライアント同士の交流の場を増やす努力をしている。また、クライアントへのサービス向上のため、現在勤務にあたっている全てのケースワーカーは福祉介護トレーニングを受け、専門知識を増やすことに努めている。さらに、このプログラムの参加者を増やすために、クライアントによる昼食会、ニュースレターの作成を行っている。さらに、死期を迎えているクライアントたちが、後世に彼らが生きてきた証と意味を残せるように、そして彼らの病気との闘いの記録を同じように苦しんでいる人々と分かち合えるようにするため、彼らの自伝をビデオで作成をするプロジェクトも行っている。

【ブリッジ（橋渡し）住居：Bridge Building】

ブリッジ住居は、最大定員 17 名の家族（特に子供達）と離散してしまったホームレスの女性たちにアパートを提供する事によって、彼女たちが自立し自分の子供達ともう一度共に暮らせるように支援するプログラムである。このプログラムでは、自分の住居を持つということによって、彼女たちが GED の獲得、ならびに安定した就職先を持つ為の就労トレーニングを受ける前向きな姿勢と意欲を促進できるようにと、はじめられた。ケースワーカーは、この住宅を提供された女性たちに、カウンセリング、就労トレーニング、学習トレーニング、医療リハビリなどの様々なサポートサービスが行き届くよう世話をしている。また、ケースワーカーは彼女たちの離散した家族、子供達を見つけ、彼らが一緒に暮らせるように、必要な法的手続きからカウンセリングまでの支援を行っている。現在 CFTH では、ブリッジ住宅の住居者同士が交流を深められるよう、読書会やニュースレターといった共同活動が出来るようなプランを製作中である。

例－2）フローラと彼女の娘は、住んでいたアパートの大家が夜逃げをしたため、彼女のアパートは市が没収する事になり立ち退きを命じられた。立ち退かざるを得なくなった彼女は、ホームレスのための緊急センターに娘と共に移ってきた。しかし、緊急シェルターでの生活は彼女と彼女の娘にとっては大変困難なもので、彼女はとうとう娘を他の町の親戚の家に送らざるを得なくなった。フローラは懸命に生活を改善しようと試みるがどうして

も NY 近辺でアパートを見つける事が出来なかった。フローラは仕事がみつかったと言う理由で、その月給ではとても家賃がはらっていけないにも関わらず、公的福祉援助が止められてしまい、結局仕事が見つかる前以上に悲惨な状態に陥ってしまった。ブリッジ住居のスタッフは、フローラはこの住居プログラムの条件を満たすと見なし、彼女にブリッジ住居の入居許可を与えた。その直後、彼女は娘と再び暮らす事ができ、彼女の娘は以前の学校に通い出す事が出来た。彼らは現在、元気に暮らしている。

【コアリション住宅 : Coalition Houses】

コーリション住宅とは、38 軒の終身制の独身専用アパート (Single Room Occupancy Housing : SRO) で、殆どの住居者が特別な介護が必要な人 (長年にわたる麻薬・アルコール中毒を持っていた人、精神病患者、特別な身体障害をもつ人、老人あるいは 10 年以上路上で暮らしていた人々) である。コーリション住宅は他の支援住宅と異なり、終身的に居住することができ、家賃は殆どの場合無料で、払ったとしても 100 ドル (一万円) 前後である。このプログラムの目的は、経済的自立がきわめて困難な人々が路上で一生を終わらせるのではなく、人間らしくもう一度家で暮らす事が出来るよう支援することである。コーリション住宅となっているビルは、市の住宅法改正¹に伴い廃墟となったビルを市から受け渡してもらい、CFTH のスタッフが寄付と市からの援助で、特別なケアが必要なホームレスの人達の為に改築し支援住宅に改造した。残念ながら中の見学をする事は出来なかったが、一人の住居者の部屋の写真を見せてもらった。写真の部屋の住居者は元ホームレスの初老の男性で、彼の唯一の家族であるペットの 3 匹の犬達と彼の趣味で植木と花で飾られたその彼の部屋は「支援住宅」と言うよりは、まさにアットホームな雰囲気の家と呼ぶほうがふさわしいものだった。

この支援住宅では、経済的自立が出来ない彼らがそのために社会的に孤立してしまわないように、映画会、コンサートや美術館、ブロードウェイミュージカルの鑑賞会、誕生日パーティー、ドミノ倒し大会、など様々なイベントを計画している。この住宅のディレクターはこのほかにも様々な面において、住居人たちを支援しており、昨年春など、ディレクターは住居者の一人のために 40 年ぶりに彼の母親と彼との再会を実現させ、彼が彼女のもとに会いに行けるようバスのチケットをプレゼントしたなどのエピソードがこの支援住宅には沢山ある。

例-4) ロジャーは 1987 年にノース・カロライナから仕事を探すために NY に移り住んできた。彼は様々なドロップインセンター (一時宿泊所) や教会に泊まり、仕事を探そうとしたが、家が無い状態では仕事を見つけるのは難しかった。公的福祉援助を受けても、住居を見つける事は大変困難だった。1988 年 8 月、彼は我々のセンターを訪れ、コーリション住宅に受け入れられた。ロジャーは我々のスタッフの援助で、季節的な仕事を得る

¹ 住宅問題—極端な住宅不足、老朽住居を改善するために、老朽化して居住者に危険が及ぶ可能性のある住宅の賃貸をいっさい禁止し、老朽化した賃貸住宅の所有者に新築を命じる条例を NY 市は出したが、NY 市内で新築するには莫大な費用がかかるため、多くの所有者はそのまま住宅を市に明渡してしまい、結果的にはさらに住宅不足を生み低所得者のホームレス化を進行させると言う悪循環を生んだ

ことが出来たが、この仕事を得ることで、彼の公的福祉援助ならびにメディエイド（公的医療補助金）までも差し止められる事になった。それからロジャーは仕事をクビになり、公的福祉援助を再度申し込む事になったが、彼の申請は拒否された。我々の団体のソーシャル・ワーカーは NY 市の公園局の常勤の仕事に就けるようロジャーをサポートし、結局彼はこの仕事を得ることができ、ついに自立する事が出来た。（注：ロジャーのように経済的自立ができる人の場合は、住居費として 100 ドル前後の家賃を回収する事があるが、基本的にはこの住宅は無料である。）

現在、2年にわたる改築作業の末、ついにコーリション住宅の全ての部屋に住居者個人専用の台所とお風呂がつけられた。このほかに、リクリエーションルームがもう直ぐ出来る予定がある。また、CFTH はこの住宅に住居者同士が仲良く生活できるようにするための話し合いが出来る集会を今後も継続していく予定をしている。

【Ⅶ】ボイスメール・プログラム (Community Voicemail)

ボイスメール・プログラム (CVM) はホームレスである為、連絡先となる電話番号が無いという彼らの共通した問題の克服のため設置されたプログラムである。連絡先となる家の電話番号が無いということは、ホームレスの人々の仕事や部屋探しの障害となっているだけでなく、何らかの事情があつて（借金取りに追われている、暴力を振るう夫に追われているなど）連絡先を持ってない為、連絡を取りつづけたい思っている家族との絆も壊してしまうという問題も生んでいる。こうした様々な問題を抱えるホームレスの為に、このプログラムは現在 2 万 6000 人の電話を持たない NY 市民の為に、一般家庭用の留守番電話と同様の留守番電話システムを提供している。1995 年にはじめられたこのプログラムはこれまでに 9 千 142 人の連絡先の無い人々に連絡先となる電話番号を与え、家族との絆を失うこと、仕事や部屋を得る機会を失う事などからホームレスの人々救っている。このサービスを利用した 76%の人が安定した仕事を見つけ、42%の人が長期的に住む事が出来る住宅を見つける事ができた。

【ボイスメールの仕組み】

このサービスの申し込みは無料で、必要であれば誰でも申し込む事が出来る。ボイスメールの利用を申し込んだ人は、直ぐにその場でその人専用の電話番号が与えられ、もらったその日から使用できるようになっている。この電話番号は、直接留守番電話サービスに（一般家庭用や携帯などで流れる自動録音メッセージが応答する）つながるようになっており、ボイスメール利用者本人が、自分と連絡を取る必要がある人々（不動産屋、就職しようと思っている職場の雇用者、家族など）に自分の連絡先として渡す事が出来る。留守番電話の録音音声は、一般家庭のものと変わらないので、これが自宅の留守電なのか CFTH のボイスメールなのかは分からないようになっている。留守番電話に残されたメッセージの確認は、ボイスメールボックスの番号をかければ

できるので、何処からでも留守番電話のメッセージを確認する事が出来る。メッセージをチェックするためにボイスメールの番号に電話をかけるだけのお金が無い人の為に、現在 CFTH ではボイスメールの番号のトールフリー化（電話受信者払い：日本で言うフリーダイヤル）に努めている段階で、今のところまだ現実化はしていないが、ただでボイスメールにつなげてくれるオペレーターの数を増やしている（アメリカではダイヤル0版で、全国の公衆電話からオペレーターに無料でかけることが出来る）。

CFTH では留守番電話サービス専用のコンピュータを設置して、各種の問題に対応できるオペレーター（1～2名）を常勤させている。このオペレーターはボイスメールの登録者の番号に残されたメッセージをチェックすることが出来るため、登録者が使用しなくなったり、当初の目的以外（売春や麻薬の売買など）で使われたりした場合はサービスが停止することが出来る。あくまでも自立支援の目的に使われるようにボイスメールを管理できるようになっている。オペレーターは登録者のプライバシーを護るため、頻繁にはチェックする事は無いが、ボイスメールの登録者には事前に悪用出来ないようなシステムになっていることは利用者に告げられ、あそのサービスが悪用されないようにしている。

【CFTH 取材後の一言】

この団体の活動で1番気に入ったのはボイスメールシステムである。なんとも単純な発想だが、誰かが言い出すまではなかなか考え付かない支援サービスの一つであると思う。CFTH は細かい事に良く気がつく団体だと思った。小さいことだが大切なことに気を配っている団体であるというのが、彼らの支援活動の一つ一つににじみ出ている。私のインタビューに直ぐに対応してくれたのはこの団体だったことも、そんな彼等の活動理念から来ているのではないかと思った。

彼らの就労支援活動は女性を対象にしたものだったが、基本的な考え方は日本の活動にも役に立つのではないかと思った。彼らの自立支援の成功の秘訣は大手の企業との提携関係ということもあるが、カウンセリングを通してクライアントのニーズをしっかりと把握している事であるとも思った。ただ、ホームレス人口の多様性を考えると、彼らの就労トレーニングはやや多くのホームレスの人にとっては敷居が高い気がした。就労トレーニングを中心に行っている団体ではないので仕方ないかもしれないが、ホームレスの根本的な自立の支援をすることを目的にしているのであればもう少し多様なプログラムが無くてはならないのではないかという気がした。

ケース② D.C. セントラル・キッチン (ワシントン D.C.)

次に報告する団体は、「DCセントラルキッチン」といわれる職業訓練でも特に調理技術の訓練を行っているワシントンDCの非営利団体である。「食料の救出と貧困との闘い」をテーマとし、ホームレス問題を食べ物で解決しようとしているユニークな団体で、他の地域で同じようなプログラムの開発に対しても協力を惜しまない積極的な団体である。現在アメリカでは調理の就労トレーニングを行っているプログラムはアメリカでも数多くあるが、この団体の就労トレーニングはその中でも1番古く、その経験を手本として全米各地の様々な団体に模倣されている。

この報告書で紹介するほかの2団体(ドゥ・ファンド、コモングラウンド)もDCセントラルキッチンのアイデアを模倣している。DCセントラルキッチンはアメリカでは最も進化した「スープアンドキッチン」²としてマスコミや政治家、そして様々な活動からから注目を浴びている。以下に、団体の歴史及び活動主旨内容を報告しようと思う。

【団体の歴史】

DC セントラルキッチンは、団体の代表者であるロバート・エガー氏によって 1986 年に貧困と飢餓と闘う NPO としてアメリカ合衆国首都ワシントン DC に生まれた。ロバート・エガー氏は当時高級レストランのマネージャーとして働く傍ら、余暇を使って教会が行っているホームレスの為のスープアンドキッチンでボランティア活動をしていた。ボランティア活動を通し多くの空腹に苦しむ人々と出会い、自分が努めているレストランで使いきれずに捨てられていく大量の食料とホームレスの貧困との間に大きな矛盾を感じ始める。そして、その矛盾は「使い切れずに捨てられていく食料で、空腹に苦しむホームレスの問題をなんとか克服できないか？」という発想へと結びついていった。この発想をもとにエガー氏は、廃棄されていく(しかし、十分食料として使用可能な)食材を集めホームレスの人々のために食事を作る小規模な非営利団体を、政府からのわずかの援助に頼って発足した。その後うわさがうわさを呼び、様々な地域のホテルやレストランからの寄付が集まり、エガー氏の団体の規模はどんどん大きくなり、ついに現在の DC セントラルキッチンとなっていた。

ホームレスの人々の食料を作り、彼らの飢えの問題に貢献しつづけていく過程の中で、エガー氏は食糧を配給するだけではホームレスの貧困と飢えの問題の根本的解決にはならないということにも気づきはじめる。そこで、エガー氏が率いる DC セントラルキッチンは、それまでのホームレスのための食料配給を続けながら尚且つより抜本的なホームレス問題の克服に貢献する対策として、食品サービス業(ホテルのレストラン、レストランチェーン、ケータリングサービス)の就労トレーニングプログラムをはじめることになる。こうしてはじめられた就労トレーニングプログラム、そして彼らの就職先の確保と団体の活動資金調達を目的としたケータリングサ

² 日本にもボランティアの炊き出しと言うのが釜が崎にあるが、スープアンドキッチンは其れと同じようなものである。NPOや協会などのボランティアによって無料の食事を提供するところをアメリカではスープアンドキッチンと呼ばれている。

ービス業（Fresh Start Catering:フレッシュスタートケータリング）を総括したのが現在の DC セントラルキッチンである。

【DCセントラルキッチンの団体宣言】

DC セントラルキッチンは以下の任務を遂行するために発足した非営利団体である。

DC セントラルキッチンの目標任務とは…

- 1) ワシントン DC、バージニア、メリーランド州にある食料サービス業界から廃棄されていく超過食材を衛生的かつ安全な方法で「救済」し、その食料をもって社会福祉団体の子供と大人たちに食事を提供する
- 2) 寄付された食材を栄養バランスの取れた食事に還元すると同時に不就労・失業者達の就労トレーニングをおこなう
- 3) 全国各地域で、我々と同じような活動を行おうとしている団体との交流をし、情報提供、活動開発の支援を行う
- 4) 毎日、市内のレストラン、ホテル、団体・学校の食堂、仕出業者、などの食品サービス業界から保冷車で使いきれず廃棄される食料の「救済」活動を行う。そして、救済された食材を調理場で日々3,000食の食事へと調理し、市内の130件以上にわたる諸団体へと提供されていく。我々は、空腹に苦しむホームレスとその子供達だけに限らず、地域の子供会の活動に参加している子供や老人ホームのお年寄り、そして地域の各種活動団体の人々にも食事を提供している。

(原文)

The D.C. Central Kitchen is a non-profit organization dedicated to the following missions:

- 1) To safely recover unserved food from area food service businesses to feed children and adults at social service agencies throughout D.C., Maryland, and Virginia.
- 2) To convert donated foods into balanced meals while at the same time training unemployed individuals in basic culinary skills
- 3) To freely provide information and assistance to programs seeking to develop, open, and operate similar community-based kitchens nationwide
- 4) Every day, the D.C. Central Kitchen uses refrigerated vehicles to safely and efficiently “rescue surplus food” from restaurants, caterers, hotels, cafeterias and other food service businesses. Once picked up, this donated food is brought to the kitchen and used to prepare 3,000 meals every Agencies receiving the meals include homeless shelters, community and your centers, children’s after-school programs, and senior-citizen lunch programs. (DC セントラルキッチン提供資料より引用・翻訳)

インタビューをもとに・・・

(ロバート・エガーさんとスーザン・キャラハンさんとの会談から)

【自立へのハードル】

—DCセントラルキッチンが指摘するホームレスが職につくための困難な点

DC のホームレスの問題に取り組んでいるこの団体に、ホームレスが職について安定な職業につくのに困難な点は何かと聞いてみたところ、他の団体と共通した問題が沢山取り上げられた。ただし、この団体はCFTHのそれと違い男性のホームレスも就労トレーニングの対象であるのと、またワシントンDCと言う特殊な土地柄からNYの団体が言及しなかった問題なども取り上げられた。次にDCセントラルキッチンの関係者が述べたホームレスが自立するにあたって困難な点を列挙する。これらの点は次に紹介する他の団体が述べた点とも共通するので、他の団体の報告を読むときにも参照してもらいたい。

- 1) 安定した住宅がない
- 2) 安定した職業につくための技術、学歴、職歴がない
- 3) アルコール・麻薬依存症
- 4) 仕事を探すために必要なネットワークが無い
- 5) 紹介人がいない
- 6) 身元保証人がいない（以前アルコールや薬物の中毒があったこと、また前科がある人こそ保証人が必要）
- 7) 履歴のかき方を知らない、面接も受け方がわからない
- 8) 自尊心が低い
- 9) 相談をする人がいない（信頼できる友達がない）
- 10) 単純作業をして働く事になれていない
- 11) 規則正しく働く事に対して価値を見出せない
- 12) 過去の履歴に対して差別がある

NY市内と同様にDC市内でも住宅は慢性的に不足しており、住宅の確保はここでも大きな問題になっている。DCはNY州とちがいのBedrock Right（全ての人がきちんとした寝具（ベット）で睡眠をとる権利）が保障されていない。すなわち、誰もがシェルターで寝る権利が保護されていない。故に、シェルターに入るにあたって、行政に申し込まないといけないため、何らかの事情³で行政への申し込みができない、あるいはしたくない人はそのまま路上に残ってしまう。DCのシェルターは、NYのシェルターに比べホームレス達にとっては敷居が高いのである。しかし、その一方で、全米で最大のホームレスシェルターをもっているCCNV（Community For Creating

³ ホームレスの人々の中で精神病を持つは多い。以前精神病院あるいは施設の虐待から逃げ出してホームレスになったケースが少なくない。そう言ったひとなかで、シェルターの居住を申し込む事により身元が分かり逃げてきた施設に送還される事を恐れ、シェルターではなく路上生活を好む事になるということが多くある。

Non-Violence) が DC に存在しているという一見矛盾した事実がある。ディレクターのエガー氏は、「CCNV は『ホームレス対策は無料のベッドと食事の確保が優先』という考え方に固執しているため、それ以上のプログラムがなかなか生まれてこない」と語る。シェルターとベットはあるのに、なかなか入れない、シェルターに入ってもそこから先の生活への道が無い等の問題がワシントン DC のホームレス救済活動において乗り越えていかねばならない課題としてあるようだ。

また、DC は他の州や市と違い「首都」という特殊な地域がらから、ホームレスの救済支援活動に対して様々な利点及び障害があるようだ。利点は、大統領を含むその他の政治家が多くいるということから政治家たちとの直接のネットワーク作りが可能であるということ。DC セントラルキッチンにはクリントン元大統領夫妻が訪れたこともある。しかし、その一方で障害も沢山ある。活動相手である役所が州や市という地方行政レベルではなく、直接国レベルであるためなかなか意見が通りにくい。通れば強いバックアップが得られる反面、通るまでの道のりが長いという困難が DC の非営利団体の活動にはあるようである。

また、DC は役所で成り立っている街であるため、産業拠点が殆ど無いのもこの地域の特徴である。つまり公的な職種以外には殆ど仕事がホームレスや失業者が密集する DC 市内には無いのである。ただ、観光名所であるため、ホテル産業、レストラン産業などのサービス産業は沢山ある。DC セントラルキッチンの調理就労トレーニングが成功している理由の一つは、ホテル産業からのバックアップ(寄付、就職口)がある事が考えられる。しかし、職種が限られているという根本的な問題は以前として残っている。

【DC セントラルキッチンのプログラム】

【活動内容の概要と目的】

DC セントラルキッチンはその活動開始以来、寄付された 350 万ポンド(約 160 万キロ)以上に及ぶ多種多様の食材を安全かつ衛生的に調理し、これまで 800 万食以上の食事をつくり地域の人々に提供してきた。無料の食事配給だけで飢餓と貧困は解決する事は出来ないという基本理念、そして貧困と空腹の悪循環を根絶するには、現在貧困に苦しむ男女の生活改善ができるようにする中身のある就労トレーニングが必要だと DC セントラルキッチンは考える。故に、DC セントラルキッチンの調理就労トレーニング(Culinary Art Job Training: キュウリナリーアート・ジョブトレーニング)はホームレス、あるいはアルコールや麻薬中毒などの様々な事由によって、ホームレスあるいは不就労・失業状態にある人々が食品サービス業界で立派に就労できるようになるための実用的な知識と技術、そして社会生活能力を得る機会を与えることを目的としている。ホームレス、失業・不就労者、そして社会福祉受給者といった様々な人々が DC セントラルキッチンのプログラムに参加し、自立した生活を築かんと日々努力している。

また、トレーニング、支援、そして共生というポジティブなサイクルを生産かつ再生産させるために、DC セントラルキッチンではフレッシュスタート(Fresh Start)というケータリングサ

ービス業を行い、活動資金源の確保と卒業生の就職先の確保、そして卒業生のさらに高度な就労トレーニングの機会の拡大に努めている。さらに、まだまだ続く路上のホームレスやシェルターで空腹に苦しむ人々の為に、ファーストヘルピング（First Helping）という食事の無料宅配サービス、も行っている。以下に各プログラムの詳しい内容を記すことにする。

【I】調理就労トレーニング（Culinary Art Job Training）

DC セントラルキッチンでは、貧困飢餓の問題を解決は根本的な問題に対する闘いの半分ではないと考えている。つまり、空腹に苦しむ人々の食事やベッドの確保だけでは、この問題は根本的には解決できないと彼らは断言する。この問題を抜本的に解決するには、彼らの空腹と貧困の原因であるに不就労・失業の状態の改善、つまり経済的社会的自立を促進しなくてはならないと主張するのだ。そこで、使用可能な食料の「救済」と「リサイクリング」活動と無料の食事の配給活動のほかに、DC セントラルキッチンはこの貧困問題の根本的原因の克服のために調理就労トレーニングを1990年以來行っており、様々な理由で仕事を得ることができない人の為の支援活動をしている。このプログラムは失業、不就労あるいはホームレス状態の人々が将来食品サービス業界の安定した職種で就職できるようになる手助けをすることを第1の目標としている。

【参加資格】

人種、年齢、性別に関わらずやる気があって訓練についてこれると基本的に誰でも参加してもよい。しかし、プログラムのカリキュラムをこなせ、継続できる可能性がなければならないので、精神・身体的に健全であることは必須である。また、中学校1年生レベルの読み書きができないとカリキュラムをこなせないのも、もし申込者が非識字者の場合は、その教育を他の団体で受けさせてから参加させるようにしている。また、訓練時間に必ず出勤できる人でなくてはならない。訓練時間中に他の活動に参加しなくてはならない人はこの就労トレーニングには参加できない。

また、薬物アルコールなどの使用を続けている人はもちろん参加できない。就労トレーニング参加者は参加時だけでなく、参加期間中常に薬物及びアルコールを使用してはいけない。また重度の身体・精神障害がある人もそれらの障害の専門的なカウンセラーやケースワーカーがいないため参加するのは難しいが、過去の参加者の中には病気のため足が不自由（義足）な訓練生がいたが立派に卒業して就職したという例もあるので、基本的には本人のやる気さえしっかりしていて、カリキュラムさえこなせるというのであれば身体、精神障害の度合いに関わらず誰でも参加できるようになっている。

ただ、DCセントラルキッチンは通勤寮や補助住宅などのプログラムを持っていないため、市や他の団体が運営する支援住宅あるいはシェルターに住んでいる人、つまり住居がプログラム参加期間中安定している人でなくては参加できないことになっている。このプログラムは、ホームレス状態や依存症状態といった自立するにあたって努力するための基盤がまったくない人の為

にあるのではない。最悪の状態から這い上がろうとしている人の為にあるためにプログラムのカリキュラムは設定されているので、住宅や心身の安定がある程度整っていることがプログラム参加の前提条件となっている。

参加者の構成は、大半がアフリカン・アメリカン(いわゆる黒人)の人々で、年齢は18歳から55歳ぐらいまで様々だが、参加者の平均年齢はおそらく40歳前後と考えて良いと思う。過半数以上が男性である。ほぼ全員が薬物あるいはアルコール依存症の経験を持ち、現在も皆その治療⁴を続けているが、参加時点で少なくとも3ヶ月以上アルコールや薬物を断ち切っている。学歴は殆どが中卒、また違法薬物所持の前科を持っている人が多い。女性の参加者の場合、小さな子供がいる未婚あるいは離婚したシングルマザーが多い。

参加の仕方は、他のエージェンシー(諸団体)からDCセントラルキッチンに紹介されて来ると言うのが一般的なケースで、しかし、路上のホームレス達のためのアウトリーチプロジェクト⁵から直接参加して来ると言うケースも少ないが中にはある。この場合、わざわざ行政の手続き⁶通さず本人のやる気次第で直ぐ参加できるようになるという利点がある。しかし、ホームレスの殆どの人が薬物、アルコールの依存症を持っている事が多いため、いったん更生施設に入ってからDCセントラルキッチンの職業訓練プログラムに参加すると言うのが一般的なパターンだと理解して良いと思う。

【給与手当】

働いてある程度の給与を受け取ると福祉を受けられなくなるのは日本もアメリカも同じだと思うが、現在のアメリカの福祉制度は、精神身体障害者以外の福祉受給者の場合、福祉援助受給期間中は就労能力を養成するプログラムに参加する事が義務付けられている。つまり仕事を見つけるための努力をしないものは福祉を受けることはできないのだ。しかし、行政が行っている就労トレーニングは安定した職業に結びつくトレーニングではないため、結局悪循環となってしまうケースが多い。DCセントラルキッチンの就労トレーニングは、参加者に給与を与えているが、行政から福祉受給中の就労能力養成トレーニング活動として認められているので、このプログラムの参加者は行政が行っている就労トレーニングに参加しなくても良い上、DCセントラルキッチンからの給与をもらいながら福祉受給を続けていく事が出来る。

DCセントラルキッチンからの給与は週50ドルで、トレーニングの参加者の殆どが福祉手当

⁴ アルコール依存症、薬物依存症の更生治療は様々なものがあるが、一般的には何年間にもわたって治療が続けられるものが殆どである(アルコール依存症の場合最低でも3年から5年、薬物、特にヘロインやコカインなどの依存の高いものも大体同じぐらいの期間続けられる)。依存症更生用の専門施設に入居して治療すると言うやり方が一般的だが、その場合まず自分の問題に直視するトレーニング(約3~6ヶ月間続けられる)、そしてその後はその問題をどうやって克服するかというトレーニング(3~6ヶ月程度)、そして其れから自立のためのトレーニングが始まるというのが一般的な更生プログラムの内容。更生施設は無料で、誰でも受けれるようになっている。

⁵ アウトリーチプロジェクト(Outreach Project)とは施設に入る事が出来ない路上のホームレスの人々たちへ毎日食料の運搬と同時に、食事の配給時に路上のホームレスの人々の問題に耳を傾け、彼らの状況を改善できるよう手助けをするというDCセントラルがやっている活動の一つ。

⁶ たとえば麻薬の種類によって依存性が低いものは、やめようと思えば直ぐにやめる事も出来るので、わざわざ役所を通して参加して、薬物を使っていたと言う前科を書かれるよりは直接自分で参加したほうが履歴に良いと言う事がある。

(TANF、メディケア、フードスタンプなど⁷⁾を受けており、公共のシェルターや支援住宅に住んでいる。トレーニング参加中、食事はDCセントラルキッチンが出してくれる上に、政府からのフードスタンプ(食料配給券)で基礎的な食料(牛乳、肉、野菜など)は買えるので、贅沢は出来ないが3度の食事に困る事は殆どない。また、家賃は支援住宅に入っている場合は1万円程度を払えば良いだけなので、福祉手当で十分まかなえる。

また、子供がいる参加者に対しては、持ち帰り用の夕食をDCセントラルキッチン側が用意してくれる。これは訓練生が訓練を受けて、帰ってからする家事を少しでも楽にするために行われている支援サービスの一つである。

【カリキュラムと規則】

DCセントラルキッチンでの就労トレーニングは12週間続く(13週目は試験)。月曜から金曜日まで、朝8時30分から昼の3時30分までの7時間で、休憩は昼休みの約30分以外は基本的には無い。もちろんトイレは自由にいけるが、タバコを吸うための休憩などは取れない。つまり、6時間ずっと就労トレーニングが続く。7時45分から8時15分までの間にすれば朝食を無料でとることが出来る。

初めの2週間は入門期間で、この間にDCセントラルキッチンのスタッフによって訓練生は一人一人この就労トレーニングを続けていけるかどうか判断される。もし、この入門期間の終わりに、残りの訓練期間を続けても訓練生にとって有意義ではないとDCセントラルキッチンのスタッフが判断した場合(精神的な問題、依存症を克服できていない、指導に従えないなど)、訓練生はプログラムを去らなくてはならない。以下にこのプログラムの規則とカリキュラムの内容を紹介する。

① 規則

[出席に関する規則]

(ルール1)

授業は8時30分から直ぐに始まるため、授業開始までにユニフォームに着替えて準備するため、訓練生は少なくとも10分前に現場についていなくてはならない。遅刻は厳禁。朝食を7時45分から8時15分までに与えられるので、朝食を取りたいものは其れまでに来る事。

(ルール2)

8時30分より後についたものはやる気がないと見なされる。遅刻でロスした時間は遅刻

⁷ TANFとはTemporary Assistance for Needy Familyの略で、支援が必要な家族のための一時的公的援助の事。メディケアは収入の少ない人のための公的保険制度。しかし日本の保険と違い、この保険は何処の病院でもつかえるということではない上に、受けられる治療も限られている。フードスタンプは食料配給券のことで、普通のレストランやファーストフードの店などでは使えないが、極一部のレストランや普通のスーパーなどで限られた食品に対して使う事が出来る。使い方は、小切手のようにして、レジで渡すだけでよいが、貧困の象徴のようなものなので、冷たい反応をされる事が多い。

した週の間に取り戻さなくてはならない（つまり、休憩時間を減らすか居残って作業をする）。違反者は減点対象になる。

(ルール 3)

遅刻するあるいは欠席しなければならない場合は、必ず DC セントラルキッチンに電話をかけ連絡をする事。丸 1 日の病欠は医者からの診断書・メモ書きを提出しなくてはならない。もし、病院との予約があることが前もって分かっている場合は、DC セントラルキッチンのスタッフに必ず 1 日前までに知らせる事。また、病院あるいは医師からの診断書を提出する事。

(ルール 4)

個人的な予定は就労トレーニングが行われる時間帯以外に設定されなくてはならない。例外はケースワーカーによって許可が下りた場合だけ認められる。

(ルール 5)

就労トレーニングのスタッフ、教官の許可なしにキッチン現場から離れてはいけない。違反者は減点対象になる。

(ルール 6)

このコースを卒業するには一定の授業単位を修了しなくてはならない。もし欠席が 10 回以上を超えた場合は、たとえその欠席理由が正当なものであってもプログラムを卒業する事は出来ない。

(ルール 7)

1 週間の修業科目をこなせた場合、訓練生は毎週 50 ドルの給与を支給される。この給与は訓練生の交通費、お小遣いとして渡される。

(ルール 8)

給与は毎週月曜日に、その前の週の科目を全てこなした場合にのみ支払われる。前払いされる事は無い。また、違反が改善されなかった場合は給与を受ける事が出来ない。給与小切手を現金に換えるために早退する事は出来ない。

(ルール 9)

もし訓練生が 1 週間の授業科目をこなすことなく就労トレーニングプログラムを中退する場合、その週の給与は支払われない。給与は 1 週間(月曜日から金曜日)までの科目を違反無くこなされた場合にのみ支払われる。

(ルール 10)

もし訓練生が何らかの理由で就労トレーニングプログラムを去らなくてはならない場合、全ての備品（ユニフォーム、鍵、本、トレーニングマニュアル、など）を DC セントラルキッチンに返却しなくてはならない。

[食事に関する規則]

(ルール1)

トレーニング現場(キッチン)から食料を私用で持ち出さない事。この規則を破ったものは直ちにトレーニングを辞めないといけない。

(ルール2)

トレーニング現場で味見以外の飲食をしてはいけない。

(ルール3)

スタッフ専用冷蔵庫はスタッフだけが使う事が出来る。この冷蔵庫から食料品を無断で取り出さない事。

[麻薬とアルコールに関する規則]

(ルール1)

トレーニング現場におけるアルコール、麻薬の所持は禁止されている。この規則を破った者は即時プログラムから除名される。抜き打ちの麻薬検査がトレーニング期間中に行われことになっている。この検査で違法の薬物使用の陽性結果が出た訓練生は即除名される。

(ルール2)

酒気を帯びていたりあるいは薬をつかった気配のある訓練生は、尿検査を受けなくてはならない。尿検査が陰性と出た場合でも、訓練生は直ちに帰宅をさせられ警告を出される。問題が解決されるまでプログラムに参加出来ない。問題が解決されない場合は、プログラムから除名される。

(ルール3)

抜き打ちの麻薬検査を正確に行うために、訓練生はプログラム参加期間中服用している医薬品名を提出しないと行けない。このリストは密封した封筒に収められ、検査の結果が陽性と出た場合、あるいはトレーニング中事故があった場合、開封される。

(ルール4)

動作や判断力に影響を及ぼす医薬品を服用している場合はDCセントラルキッチンのスタッフに、その薬を服用していても安全にプログラムに参加できるということを記した医師からの手紙を提出しなければならない。医師からの診断書および一筆は必ずトレーニングが始まった初めの週の終わり、あるいはトレーニング中にそのような薬を処方された場合は、処方された直後に提出しなくてはならない。

(ルール5)

DCセントラルキッチンの敷地内での喫煙は禁止。

(ルール6)

訓練生はタバコを吸うための休憩はとれない。昼食時の休憩時間だけ喫煙(敷地外)でできる。

[制服に関する規則]

(ルール1)

規定の制服は、1) 黒の業務用ズボン (ルーズフィットの綿ぱん) または調理師用パンツ、2) 黒のゴム底靴(作業するのに適しているもの)、3) 靴下、4) カッターシャツ、5) エプロン、6) ジャケット、7) DC セントラルキッチン帽子 (帽子とTシャツは訓練の一週目が終わったら支給される)。制服の規定は訓練2週目から適用される。タンクトップ、単パン、サンダル、ノースリーブのシャツを着用している場合は訓練を受ける事は出来ない。制服の規則を破った場合は着替えて出直してこなくてはならないが、そのためにロスした時間はその週の間に残業をして補わなくてはならない。

(ルール2)

制服を失った場合は、新しい帽子やTシャツを自費で買わなくてはならない(帽子 10ドル、Tシャツ 15ドル)。

(ルール3)

9月から3月までのトレーニングを受ける訓練生はエプロンとジャケットを支給され、それを常時着用してはならない。ユニフォームを返さなかった場合は、給与からユニフォーム代は差し引かれる。

(ルール4)

4月から8月までのトレーニングを受ける訓練生は、Tシャツとエプロンを着用しなくてはならない。ジャケットは着なくて良い。各訓練生には3枚Tシャツを支給する。

(ルール5)

貴重品をトレーニング現場に持ち込まない。現場でなくなったものに関して、DC セントラルキッチンは責任をいっさい負わない。

(ルール6)

携帯電話、ポケベル、ラジオ、ヘッドフォンは現場では使用禁止。

(ルール7)

訓練現場に来たら作業の前には必ず手を洗う事。トイレの後には必ず手を洗う事。味見をした後は必ず手を洗う事。作業が変わるときは必ず手を洗う事。

(ルール8)

毎日入浴、歯磨きしデオドラント(制汗剤)用い、常に清潔にすること。つめは必ず短く切り清潔に保つ事。マネキュアはいっさい禁止。

(ルール9)

ネックレスや指輪の着用禁止。簡素な結婚指輪のみ着用可。

[訓練態度]

(ルール1)

プロとしての態度と姿勢を常に保つ事。

(ルール2)

現場のトレーニングに関する指導は全てシェフに託されている。彼らの指導に必ず従い、彼らの経験から学ぶ事。

(ルール3)

指導教官から割り当てられた活動全てに出席、参加する事は訓練生の義務である。

(ルール4)

いかなる理由でも暴力を振るった者は即プログラムから除名される。

(ルール5)

卑猥かつ暴力的な言葉の使用は現場ではいっさい許されない。

[電話に関するルール]

(ルール1)

緊急以外で電話をかけた受けたりする事はいっさい許されない。

[ハラスメント]

(ルール1)

全ての訓練生は現場において品行方正でなくてはならない。DC セントラルキッチンには人種、性別、宗教、国籍、年齢、同・異性愛者、身体あるいは精神的障害、その他法的に保護されている個人の性質による差別をいっさい行っていない。雇用主、従業員、訓練生が差別行為をそしたり、他人に嫌がらせを行う事は固く禁止されている。DC セントラルキッチンは役員、雇用主、従業員、訓練生、ボランティアが当事者の意思に反して性的行為をする、あるいは要求する事を固く禁止している。さらに、雇用、プログラム参加等を交換条件とし身体及び言語による性的行為を他者にさせること、またそのような申し出に従う事を固く禁止している。また、脅迫的、攻撃的、無礼な行為ならびに就労空気を乱す行為をすべて固く禁じている。もし訓練生が、差別あるいはハラスメントを受けていると感じたときは、必ず指導教官あるいはDC セントラルキッチンのスタッフに申し出る事。DC セントラルキッチンは早急に問題の解決に乗り出すことを約束し、不適当な行動をしている者を見つけた場合事情によってはプログラムから即、解雇・除名される。

[違反、執行猶予、除名]

もし訓練生が以下の規則に従わなかった場合は、規則違反と見なされ減点や警告の対象となる。訓練生が3度あるいはそれ以上頻りに違反を起こした場合はその週の給与(50ドル)を受け取る事ができない。もし、その次の週に違反が行われなければ受け取る事ができなかった週の給与を違反が無かった週にまとめて受け取る事が出来る。3週連続の違反は違反が起きた3週目に執行猶予が出される。

規則1) 制服をきちんと着用していない。

- 規則 2) 授業の準備をきちんとしていない
- 規則 3) プロとしての意識が欠落している
- 規則 4) 無断で休憩を取った場合

[執行猶予]

以上に記した規則を続けて破った訓練生は執行猶予が与えられる。
4 度目あるいは 5 度目の欠席をした訓練生は執行猶予が与えられる。
執行猶予とは、訓練生が規則違反をもう一度繰り返した場合プログラムから除名されることになる状況を意味する。

[評価]

全ての訓練生はトレーニング期間中担当教官から評価を受ける。DC セントラルキッチンが定めた目標に訓練生が見合っていて、さらに成績が平均 70%以上の場合、この修業訓練プログラムから卒業をする事ができる。

週ごとの試験 (ServSafeSanitation : 安全衛生テストをふくむ) 50%

毎日の活動 50% (以下の内容を含む)

- | 活動内容 | |
|-----------|-----|
| 1) 出席 | 10% |
| 2) 態度 | 10% |
| 3) チームワーク | 10% |
| 4) 専門技術能力 | 10% |
| 5) 論理的理解 | 10% |

[駐車に関する規則]

駐車スペースが限られているため、DC セントラルキッチンの敷地内での駐車は禁止。違反注射の罰金や強制撤去された車等に関して DC セントラルキッチンはいっさい責任を負わない。

②カリキュラム (Culinary Curriculum)

[修業内容]

- 1) ナイフの使い方、野菜の調理の仕方、焼きもの、あぶり物、煮物、スープ・ソースの作り方などの基礎的調理技術とその理論の習得
- 2) 食品の栄養価を理解する。USDAの栄養ガイドラインにもとづいた量を認識し給仕することをまなぶ (注: USDA=アメリカ栄養協会の略)
- 3) レシピを注意して読みレシピにしたがって調理する技術を習得する。材料の計量の仕方を学ぶ。個人調理用にかかれたレシピを商業サービス用の調理内容に変える方法を学ぶ
- 4) このトレーニングをこなしたものは、全国レストラン業界が主催する衛生訓練コースに参加し、食品衛生に関する知識を学ぶ

[週ごとのカリキュラム]

週	課題	練習と教材
第1週目:	ナイフの使い方	ビデオ: ナイフスキルC I A 練習: 鶏肉の骨の掃除の仕方
第2週目:	味付け	ビデオ: P B S / N O V A シリーズ 練習: 個人の好みとは違った味付けの区別の仕方
第3週目:	ゆでもの	ビデオ: C I A シリーズ 練習: ポーチドエッグ(ゆで卵の作り方)
第4種目:	焼き物	ビデオ: C I A シリーズ 練習: 鶏胸肉のグリル
第5週目:	照り・あぶり焼き	ビデオ: C I A シリーズ 練習: ローストポーク
第6週目:	炒め物	ビデオ: C I A シリーズ 練習: 野菜炒め
第7週目:	揚げ物	ビデオ: C I A シリーズ 練習: パン粉のつけ方
第8週目:	ソテー	ビデオ: C I A シリーズ 練習: 魚のソテー
第9週目:	煮物、あんかけ	ビデオ: C I A シリーズ 練習: 牛肉の煮物
第10週目:	飾り付け	練習: 生クリームのお飾り付けの仕方
第11週目:	パン・お菓子の焼き方	

- 第12週目： レシピの変換 練習：計量の仕方
第13週目： 卒業試験

③もう一つのカリキュラム：「調理トレーニングを通して過去の自分を乗り越える」

以上のカリキュラムと規則の内容を見てもらって分かるように、規則は本当の職場同様あるいはそれ以上に厳格なものである。またトレーニングから学ぶ技術は初等レベルのもので、これを卒業したら一人前のシェフになれるというものでは決してない。むしろ、初等の調理技能の学習を通じ、ホームレスであった彼らが自立し、社会に還元していくための「基盤」となる能力、つまり生活基礎能力（時間をまもる、身だしなみをきちんとする、真面目に働く、上司の言うことに従う、規則にしたがうなど）を学んでいくことが、このプログラムに含まれている「もう一つのカリキュラム」である。

このプログラムでは、調理訓練を通して過去の自分（ホームレスであった事）を見つめなおすという機会を生徒に与えている。就労トレーニングに焦点をあてたプログラムであるため、カウンセリングと言うかたちではそのような機会を生徒には与えていないが、指導教官の中には以前自らもホームレス状態にあたり、麻薬やアルコール中毒だった人もおり、それらの担当教官は自分の経験から、「過去」と「これから」の自分に対して「今」の自分が何を出来るかということの間接的、時には直接、生徒に教え励ましている。

（例）調理を通して自分を見つめなおすー『失業中の鶏』

鶏肉調理の授業の課題はどのようにすれば美味しく栄養がある鶏肉料理を作る事が出来るかということ。その目的を訓練生にしっかり頭だけでなく体と心にも教え込むために、担当教官は生徒にある質問をした。「ここに、一匹の失業した鶏肉がいます。この鶏肉は一体何をしたいと思っているのでしょうか？」この一見奇怪な質問に、生徒たちは真剣に考えて答えなくてはならない。「仕事を見つけないと思っている。」「麻薬や酒を絶ちきりたいと思っている。」「家族と一緒に住みたいと思っている。」など様々な自分の問題や気持ちを、生徒は今から自分達が調理する食材を通して表現する。教官は彼らの人生を再建しようとしている気持ちを料理の比喻にたとえ、どうすればなまの鶏肉を料理して、お客さんに出せる形（見栄えだけでなく栄養価のある）にしていくかということを教えていく。このように調理と彼らの日常抱えている気持ちをダブルらせ、生徒たちの一つ一つの小さな努力が自立に結びついているのだと言う事を常に確認させていく努力をしている。

これは直接指導の例だが、殆どの場合精神的な指導は間接的に行われている。元訓練生で、現在DCセントラルキッチンでアシスタントマネージャーとして訓練生の指導・観察にあたっている

るカレンさんに「どのように訓練生と接しているのか？」聞いてみたところ次ぎのような返事がかえってきた。

「自分は別に先生とかえらい人だとは思っていない。訓練生の先輩ではあるが、だからと言って彼らの上司でもなんでもない。私も以前アルコール依存症になって全てを失った人間だと言う事を知ってもらい、そして目標に向かって頑張っている今の自分を見てもらう事が、あえて言うなら、私の指導スタイルだとおもう。」

この彼女の素朴なコメントから、口頭や文章では表せない大切な事を、この訓練現場で訓練生が学んでいるということが伺えるのではないだろうか。

また、訓練生がこのプログラムを続けられない最大の理由は依存症を乗り越えられないことで、これらの問題に対し、現在DCセントラルキッチンでは訓練時間が終わった後、訓練生が「他の事を考えてしまう時間」を無くすために様々な活動（パーティ、特別料理教室、映画館紹介など）を企画して、訓練生が他のことに関心を奪われないようにするための努力をしている。

④訓練生も指導教官：「料理を通じてつながる人の輪」

授業のカリキュラムのほか、訓練生たちがDCセントラルキッチンで行っている重要な活動の一つに、毎日地域の福祉関係団体（ホームレスシェルターや老人ホーム、子供会など）への無料配給用の食事の調理がある。毎日、寄付されてくる食材をリサイクルし、栄養価の高い美味しい食事にへと調理されていき、昼食と夕食をあわせて約3,000食の食事が訓練生とスタッフ、ボランティア達の力によって作られている。

この活動に参加するボランティアの人々は地元及び全国各地から来ており、老若男女、様々な人がほぼ毎日参加している。多くの人が、「ホームレスは自立出来ない怠けた人」というイメージを持っているが、この現場で自立に向けて頑張っている訓練生を目にし、そして彼らと共に食事を作っていくことで、其れまでのステレオタイプを捨てていく人は多いという。また、ホームレスに対して偏見を捨てた人々が其々の地元地域のホームレス問題に取り組み始め、DCセントラルキッチンを模倣したケースもある。DCセントラルキッチンはこうした一般ボランティアと訓練生とのふれあいの場を作る事によって、根深く存在するホームレスへの偏見を減らしていく努力をしている。私が見学をしているときはちょうど、春休みを利用したDCへの修学旅行に来ている北東部から中高生たちがボランティアに来ていた。ボランティア活動の国、アメリカらしい発想だと思うが、十分アメリカ以外の国でも模倣できるだろうと思った。

私が見学をしているとき、訓練生は配給用の食事の準備をはじめていた。授業をこなしながらかつ配給用の3,000食の食事を用意するというのは本当に大変な作業で、みんな作業場を忙しく動き回っていて、私は邪魔にならないように見学するのに苦労した。訓練生は各週それぞれ持ち場を与えられ、「皮むき」、「缶きり」、「掃除」、「洗い物」など仕事をこなさなければならない。私語はあるが、手を止めて無駄話をしているものはない。彼らが作った

食事を昼食として私もいただいたが、高級なグルメというものではないが、リサイクルした食品で作ったうえに無料とは思えない食事だった。正直言って私が通っている大学の学食や近所のレストランで出される食事より栄養バランスが整った食事で、この材料となっている食材が全て今まで「ごみ」捨てられていたと考えるとぞっとした。

常勤の指導教員以外に、地域の高級レストランのシェフがボランティアで訓練生に調理技術を教えに来る事もある。これらのシェフは、ディレクターのロバート・エガー氏やスーザン・キャラハンさんの個人的なネットワークを通じて呼ばれる事が多い。超一流シェフをゲスト指導者として呼ぶ事によって、訓練生たちに自分の目標を高く定めるよう刺激を与え、また自分達がやっている事にプライドを持たせるという努力が為されている。また、高級レストランのシェフを呼び、直に自立に向けて真面目に取り組む訓練生を見てもらい、指導してもらう事によって、このトレーニングの卒業生の新たな就職口の開発に結びつける努力もされている。

〔Ⅱ〕 就職斡旋とフォローアッププログラム (Employment & Follow-Up Program)

上記の12週間にわたる就労トレーニングのカリキュラムを終えた卒業生は、先にも触れたが全国レストラン協会が主催する食品衛生の授業に出席して、食品衛生に関する試験を受けなくてはならない。DCセントラルキッチン卒業生の合格率は94%と高い。これが終わると、卒業生はDCセントラルキッチンの就職課のスタッフと共に、就職活動の準備をはじめ。就職活動の準備の内容は、1) 履歴書の書き方、2) 面接での受け答えの仕方、3) 仕事の探し方、4) 仕事を継続していくためのコツ、5) 対人関係などで、DCセントラルキッチンのスタッフによって指導される。

様々なマスコミの報道とこれまでの卒業生の勤勉な就労態度のお陰で、多くの企業業者からの採用申込みが現在殺到しており、卒業生ひとりあたり数口以上の就職口が常にある状態であるため、卒業生の仕事先がまったく見つからないという状況は今のところ殆どない。ただ、卒業生達はあくまでも初等レベルの調理技術しか持っていないため、DCセントラルキッチンに持ってこられる仕事の中には、安定していて好条件だが卒業生の技術レベルに合わないというものもあり、せっかくきた申し出を断ることもよくあると言う。そこで現在DCセントラルキッチンでは口コミなどで寄せられた就職口を他の団体やあるいはこのプログラムの卒業生でより経験と技術があるものにまわすようにしている。そして知名度の高いDCセントラルキッチンに寄せられてくる仕事をここの卒業生だけでなく、他の失業者達の為にフルに活用するシステムを将来作っていく予定である。

卒業生の就職口は、地元のホテル、レストラン、病院や政府団体のカフェテリアなどが多い。ホテルでは、ヒルトンホテル、ハイアットリージェンシー、マリオットホテル・インターナショナル、ホリデーインなどがある。これらのホテルはDCセントラルキッチンに超過食材を提供している団体でもあり、DCセントラルキッチンとは密接な提携関係にある。これら大手会社の就

職口の利点は、他の就職口に比べ給料がいいことと、様々な手当（医療保険⁸、厚生年金手当、有給休暇、社宅、託児所）などがあることである。卒業後、1年目の卒業生の平均給料は時給7ドル50セントから8ドルぐらいで（月1,200ドル：12～14万円程度）で、DC市内の物価を考えると決して高収入とは言えない。この給与の良い低レベルの就職先が市内に不足しているのは、アメリカの経済構造と深く関連している。

DC市内は観光産業と行政事業はあるが一般産業が殆どなく、そのためホームレス達の就職に対し妨げになっている事は既に述べた通りである。市内で給与の良い低レベルの就職先を見つけるのが難しいのは、DCが行政事業中心の街であるというほかに、アメリカの殆どの一般私営産業は広くて安い土地のある郊外に集中しており、低レベルで給料のよい仕事も郊外に多い為でもある。実際、どちらかと言えば市内のほうが低賃金労働者は多いため、現在の企業の立地条件は企業と労働者の両方にとって不利なのである。しかし、低賃金労働者は車を持つ事も物価の高い郊外に引っ越す事も出来ないし、アメリカは市内から郊外までの公共交通機関が発達していないため、市内の低賃金労働者が郊外の仕事につくことは今まで不可能であった。

しかし近年、この問題に対しDCでは“リバーストランスポーション”というシステムが政府の援助と企業・行政・NPO団体の協力によって成立された。“リバーストランスポーション”とは、市外にある行政団体や企業に対し政府が資金援助をし、各企業・行政団体に市内から郊外の仕事場までバスやタクシーによる無料の交通サービスを市内の労働者のために設置させるというシステムで、このお陰で車がない市内の労働者たちが郊外の仕事場まで無料で行けるようになった。一例を挙げると、米国情報局（CIA）本部のカフェテリアは、時給が高く手当てもしっかりしており、DCセントラルキッチン⁹の卒業生達にとって理想的な就職先の一つだったが、CIAは郊外に立地しているためこれまで市内の労働者は働きに行く事ができなかった。しかし、このリバーストランスポーションのお陰で、市内の労働者も働きに行けるようになった。この考えはDCセントラルなどの就労トレーニングを支援するDCの各種NPOによって提案され、行政援助によって実現されたもので、卒業生の「質の良い」就職先の確保に役に立っている。

卒業生の卒業時の就職率は91%で、殆どのものが卒業後就職をしていくが、一方で就職6ヶ月後の定着率は74%とやや低い。これには様々な理由があるが、やはり依存症を克服できないことや周りからのプレッシャー、孤独を乗り越えられなかった事などが一般的な理由のようである。就職してからアルコール依存症が再発する典型的な原因は、「ピア・プレッシャー」といわれるもので、友人や仕事仲間からの誘いに断りきれずにお酒を一杯飲んだことがきっかけで、治りかけていた依存症が再発してしまうというケースが多い。アルコール依存症の治療は5年から10年続けられ、実際それ以上続けられる事も少なく無い。回復途中の飲酒はその量に限らず、依存症が再発する最も大きな危険性をはらんでいる。極端な例では、アルコール成分を含んだ風

⁸ アメリカは公的医療保険が無いため、会社が従業員に与える民間の保険が医療保険として使われている。これがない場合、メディケア(公的保険)に頼らないといけないが、メディケアでは十分な治療が受けられない。

邪薬を飲んだだけで再発する事もある。経済的自立をし、社会復帰したと言っても、ホームレス状態、依存症に陥る以前の状態に戻れると言うわけではない。しかし、自立を継続できない卒業生たちの多くは、この事実に関心対処する術を見つける前にまた以前と同じように躓いてしまう。これは今回インタビューを行ったどのプログラムの卒業生にも共通する問題である。

其れまで支援・援助されていたネットワークから離れ経済的に独立して、自立していくことがとても難しいのはアメリカのホームレスに限らずどの社会のどの人間にとっても同じことである。ただ、これらプログラムの卒業生の多くが、アルコール依存症や薬物依存症によってホームレスになり家族や友人を失ったり、あるいは薬物やアルコールからの依存症を乗り越えるためにアルコールや麻薬問題を未だに抱えている家族や友人と縁を切らなければならない。そのような人々は、信頼できるネットワークや相談相手が無いため、経済的に自立したからと言って必ずしもそのままさらに幸せになっていけるというわけではない。当たり前であるが、彼らにとって経済的自立が必ずしも人生のハッピーエンドではないのである。最も大きな試練は彼らが経済的に自立した時点から始まると言って良いだろう。自立をし続けられない多くの人々はそうした実社会での困難に乗りきるための精神的よりどころが無いため、再度失敗してしまう。

この問題を重視するDCセントラルキッチンでは、卒業してからの初めの6ヶ月間、就職課のスタッフで元牧師でもあるロン・スワンソン氏と連絡をとることを義務付けている。また、その後も卒業生をプログラムに呼び、訓練生たちに自分達の経験を話しをしたり、アドバイスをするためのボランティアとして招待する事になっている。また、感謝祭、クリスマス、正月といった一人では過ごすのはわびしい家族行事のためのパーティを開いたりして、卒業生が経済的に自立した後もDCセントラルキッチンを仲間つながりの場、心のよりどころ、心の故郷として活用できるようなサービスを提供するようにしている。また、転職をしたい時の就職相談にのったり履歴書の書き方、面接の練習も要望があれば卒業生のために行われることもある。

実際、卒業生で現在DCセントラルキッチンのスタッフとして働いている人々はそうしてDCセントラルキッチンを活用した人が多い。前述のカレン・ロビンソンさんや調理指導シェフのドロシー・ベルさんもそんな卒業生の一人である。カレンさんの場合は、将来自分で店を持ちたいという希望を卒業して就職した後に持つようになり、その夢に向けて経験をもっと積むためにアシスタントマネージャーとしてDCセントラルキッチンに帰ってきた。将来は子供や家族の向けの小さなレストランを開くのが彼女の夢だと私に語ってくれた。このように食品業界でさらにステップアップしていこうとしている卒業生たちの為にもDCセントラルキッチンのドアは常に開かれている。

フォローアップ・プログラムは雇用者側に大変好評で、このプログラムの卒業生の9割が就職できている事実にも深く関係している。このプログラムを通して雇われる者は仕事への姿勢、マナーなどをしっかり叩き込まれているため、一般応募でくる人よりも優秀で良い従業員になるケースが少なくない。また、たとえ前科やアルコールや薬物の依存症の過去があっても、それを乗り越えたという経歴と身元紹介者であるDCセントラルキッチンが保障しているため雇用者にとっては他の一般応募者より安心して雇えるし、たとえ雇用後トラブルが起きたとしても、

その問題解決のための調停役をDCセントラルキッチンが務めてくれるため、問題が解決しやすいなどのメリットがある。確かに前科者は雇いたくないとか、アルコールや薬物を使ったことのある人は雇いたくないと言った偏見はまだ根強くあるが、これに対してDCセントラルキッチンは卒業生の保証人、トラブルの仲介といった役割を果たす事を雇用者に約束する事によって乗り越えている。

[Ⅲ] ネットワークと支援

① “DCセントラルキッチンはコミュニティーのキッチン”

ここまでの報告でわかるように、DCセントラルキッチンは食料の救済・リサイクル・無料配給、及び調理就労トレーニングにもっとも力をいれている団体である。その反面、その他のニーズのプログラムを持たない団体でもある。しかし、それはこの団体がその他の問題を軽視していると言う訳ではない。

DCセントラルキッチンの就労トレーニングの参加条件として、薬物・アルコール依存症のリハビリを受けていて、それらを参加時点でいっさい用いていない事、また安定した住宅を持っている事などがあったことは既に述べた。つまり、DCセントラルキッチンの就労プログラムは最悪の状況から自立までの中間地点に位置しているため、このプログラムが効果的に機能するためには、住宅やリハビリテーションのプログラムがあることが前提条件になる。しかし、DCセントラルキッチンは住宅、教育、カウンセリング・リハビリテーションなどの自立支援の基礎プログラムを持たないため、これらの支援活動は必然的に他の団体に頼っている。つまり、住宅、カウンセリング、教育などの基礎支援活動を行っている団体やケースワーカー、ソーシャルワーカー、行政の福祉の窓口など、様々なエージェンシーとDCセントラルキッチンの就労トレーニングは提携関係を持ち、お互いのプログラムを支え合っているのである。

すなわち、DCセントラルキッチンのプログラムは他のニーズに対応する諸団体が地域にあってこそ成り立っている活動であり、「ホームレスの自立救済活動」という大きな運動の中の一部としてその機能を果たしている。創始者のロバート・エガー氏の言葉通り、まさにDCセントラルキッチンは「Community's Kitchen (町の台所)」なのである。

② “変化していくキッチンと変わらないシェルター”

しかし、「いろいろな問題が重なり合ってホームレス問題を生じさせ、深刻化させているのなら、多様な活動の一つにまとめたほうが効率は良いのではないのだろうか？」という疑問が私の頭によぎった。基礎自立支援プログラムである住宅、リハビリ、就労トレーニングの全てを行っている団体も他にはある。そこで、「なぜDCセントラルキッチンが独立した就労トレーニング組織と食料宅配組織としてのみ存在するのか？」という質問をエガーさんとカラハンさん質問し

てみたところ、その理由としていくつかの事実があげられた。

まず、DCセントラルキッチンが依存症のカウンセリングや住宅支援活動をしていないのは、これらの問題が重要だと考えていないからやっていないと言う事ではないし、DCセントラルキッチンの活動を一つだけに狭義するという事でもないというエガー氏は強調する。DCセントラルキッチンが食料救済・リサイクリング活動、ケータリング活動、調理就労トレーニング活動に特に力を入れているのは、もともとこの組織は食料救済とホームレスへの栄養価の高い無料食料の宅配を行うために作られた団体で、現在の就労トレーニングプログラムは、その基盤となった活動から進化していったもの、というそもそもの団体の成り立ちがあるというのがまず第1の理由である。当然、この団体の活動(公的、私的)資金となる寄付や援助はもともとの活動目的のためだけに支給されており、その他のプロジェクトをするとなるとまたそのための資金活動、スタッフの雇用などの為に時間を費やす事になる。しかし、現在は其れだけプロジェクトを拡大していく時間と人材、資源がDCセントラルにはないし、今は既存のプロジェクトを支えていくだけで精一杯というのが現実である。

先に述べたようにDCには全米で1番大きなシェルターを持つCCNV (Community for Creating Non-Violence) という団体組織があるが、CCNVはあくまでもホームレスのニーズは「無料のベットと食事」という考えをかたくなに守っており、就労トレーニングはあまり力を入れていない。DCセントラルキッチンは当初、CCNVと力を合わせてホームレスたちへ食料を配給していたが、DCセントラルキッチンが活動過程でホームレス問題の解決は食事配給だけではいけないと言う進歩的な考え方にいたった一方で、CCNVは以前のとおりの方針を護るという姿勢をとり、現在ではDCセントラルキッチンとCCNVは殆ど活動を共にしていない。この事実から分かるようにDCセントラルキッチンが今の活動に力を入れているのは、ホームレス問題の解決策をCCNVのように一つに狭義しているのではなく、むしろその逆だからだといえる。

一つの団体が様々なプログラムを中途半端に行うよりは、其々の団体が役目を分担したうえでお互いを支え合うという形のほうがより能率的で効果的であるということも大きな理由である。実際、成功している支援団体こそ他の団体と提携をし協力し合っているということも今回の調査を通じて発見した事実である。

[IV]ファースト・ヘルピング: First Helping

ファースト・ヘルピングは、1996年ワシントンを襲った寒波のために飢えと寒さに苦しむ路上野宿者や緊急シェルターにいるホームレスたちに、温かいスープとサンドイッチを届けたことがきっかけで生まれたストリートレベルのホームレス救済活動活動である。その後、公的および私的資金援助を受ける事ができたため、1996年の秋から無料の食料を配給する活動を続けておこなうことになった。それ以来、ファースト・ヘルピングはDC市内4区域の路上・シェルターに住むホームレスの人々に栄養価の高い朝食と夕食、計570食を毎日届けている。このサービス

を通じて、DCセントラルキッチンでは路上に住む人々が一人でも多くシェルターや支援住居に移る事が出来、そしてホームレス状態から抜け出していける環境を作る努力を行っている。

さらに、このファースト・ヘルピング活動は食料を配給するだけでなく、路上野宿者たちと話しをし、彼らが適当な団体の援助を受けられるようにするための支援もしている。このプログラムのスタッフであるローレンスさんの話によると、多くの路上野宿者たちは精神病を持っており⁹、精神病院や施設でひどい目に合って抜け出てきた人が殆どで、こう言った人々は施設に入る事をかたくなに拒む事が多い。また、殆どの人が麻薬やアルコールの依存症でもある。それらの人々と一対一で対話をする事で、彼らが安全で誠実な援助を受けられるよう、そして彼らがもう一度援助を受け入れられるよう心を開く手助けをすることも、このプログラムの目的の一つである。このプログラムを通し、DCセントラルキッチンでは1998年以来DC市内、メリーランド州、及び西バージニア州の100人以上の路上野宿者を支援活動プログラムに参加させる事が出来た。これらの成功のお陰で、DCセントラルキッチンは現在DCの様々な地域に援助の手を伸ばせるようになってきている。

[V] フードリサイクリング & 食事配給

この団体が超過食料の救済とリサイクリングを行っている事は先に既述したと思う。ここでは、具体的にどのようにDCセントラルキッチンが食料の救済とリサイクリングを行い、食事にかえていっているのかを報告しようと思う。

DCセントラルキッチンの調査によるとレストランや食品業界、及び課程で使われる食料の4分の1は使われずに捨てられていく。その一方で毎日何千人の人々が十分な食事を摂取できずに空腹に苦しんでいる。DCセントラルキッチンは、「食べ物を無駄にするのは良くない」、「あまった食料には生産的価値がある」と言う事を強く信じており、その信条をもとにフードリサイクリングと言うプログラムを運営している。フードリサイクリングは、まず地元の企業やレストラン業界、スーパーマーケットなどから寄付される食料回収から始まる。回収作業にあたるのはDCセントラルキッチンの「キッチンポリス」という食品衛生管理知識を持っているスタッフで、彼らによって厳選された食品衛生上安全な食材を大型の保冷トラックに積みDCセントラルキッチンの貯蔵庫に運んでいく。この活動によって、毎日1トンから2トンの食品が「救済」されている。DCセントラルキッチン敷地内にはこうして救出されてきた食材を保存する3048㎡以上の大きさの貯蔵庫、冷蔵庫、冷凍庫がある。毎日これらの食材を3000食の食事へと調理して、DC、メリーランド州、バージニア州の140以上の非営利団体に無料配給しているのだ。この配給により、活動が始まった1989年以来およそ800万ドル以上の節約の手助けをできた事になる。

⁹ アメリカでは1970年代に精神病院の悪質な医療サービスが問題になり、精神病患者が施設に閉じ込められるのではなく自由に施設から出て行ける事を保障する制度が出来た。しかし、施設から出された人々の多くが行く場所が無いため、そのまま路上野宿者となってしまった。このため、アメリカではホームレスの人々に精神薄弱者などがとても多いのである。

長期的な食料確保を安定されるため、ピザチェーン店やその他の食品企業との提携を現在結んでおり、今後も提携団体を増やしていく予定である。また、フードリサイクリングはアメリカ政府農林水産庁長のダン・ギルクマン氏によってもキャンペーンされており、彼と大統領直結の行政団体の努力によって、さらに多くの食料がDCセントラルキッチンに寄付されている。現在食料をDCセントラルキッチンに寄付してくれている公的団体は以下の通りである。

- 1) Department of Agriculture, Department of Commerce, Department of Labor, Department of Health and Human services, Department of State, Department of Transportation,
- 2) The Federal Reserve
- 3) Internal Revenue Service
- 4) Federal Deposit Insurance Corporation
- 5) Office of Personnel Management
- 6) Andrew Air Force Base, Fort Myers Army Base,
- 7) House of Representative

1996年夏、DCセントラルキッチンはアメリカ政府農林水産省と提携し、子供達のための夏休み昼食プログラムを実施した。学期中、割引あるいは無料の給食を受けた子供達が学校のない夏休みの間も無料で昼食をDCセントラルキッチンから受けられるように、地域の子供会に無料の昼食を配給。このプログラムはその後も農林水産省と提携し、続けられている。

また、DCセントラルキッチンと他の非営利団体の働きかけのお陰で、現在このフードリサイクリング活動を保護する法律(ビル・エマーソン食品慈善寄付条例)がアメリカにはある。ビル・エマーソン食品慈善寄付条例というこの法律は、様々な理由で市場に出せない食品を慈善事業の目的で使えるようにするリサイクリング活動を保護する目的で1996年、アメリカ議会で通された。この法律は国が制定する食品衛生管理法に違反しない限り、市場に出されず廃棄されていく食品を再利用する事を認めている。この法律によって保護される再利用可能な食品は、品質に関係の無い理由(箱や缶がへこんでいる、賞味期限が近づいている、グレードが低い、大量に買いすぎた等)で廃棄される食材とスーパーの商品(ペーパータオル、プラスチックの袋、洗剤)などである。さらにこの法律は、何か問題が起こっても寄付した側が慈善事業の目的で行っている限り責任を求められないように、寄付する側の保護をしている。この法律のお陰でフードリサイクリング活動は活発に、かつ安全に行われるようになった。

しかし、たとえ法律で保護されていると言えど、食品の安全管理はこのフードリサイクリング活動の中でもっとも重要である。現在、厳密な衛生管理と指導のお陰でDCセントラルキッチンにおいて食中毒などの問題が起こった事は一度も無い。しかし、食中毒は常に彼らの1番の敵であることには変わらないため、毎日食品衛生管理が厳しく行われており、訓練生やボランティアにも厳しく指導がされている。

[VI] フレッシュスタートケータリング

フレッシュスタートケータリングは、食料救済と就労トレーニング活動の中から生まれた比較

的新しいDCセントラルキッチンプログラムである。これは1996年にはじめられた非営利団体（行政、NGO/NPO、地域団体）のみを対象にしたプロのケータリングサービス業で、ここで作られる食事は無料配給の食事と違い、寄付されたものではなく購入した新鮮で新しい食材が使われる。また、メニューも顧客のニーズに合わせて各種、一般のホテルやレストランで出されるものと同程度の良質の料理が作られる。これは無料ではなく有料のサービスで、この調理にあたるのは訓練生ではなく、より経験と技術を持ったフルタイムの調理師たちである。しかし、このプログラムは卒業生により高度な調理技術を学べる機会を与えるために作られたため、従業員の中には卒業生も含まれている。フレッシュスタートケータリングの売上は活動資金に当てられ、またこの事業の拡大は卒業生の就職先の拡大にもつながり、生産的な相互依存サイクルを生んでいる。

【DC セントラルキッチン取材後の一言】

恐らくこの報告書で報告する中で、DCセントラルキッチンが最も内容の充実した就労トレーニングだと思う。というのも、他のトレーニングと違いこのトレーニングは生活能力だけでなく、現場で直ぐ働いていけるだけの基礎能力を付けるだけのカリキュラムがある。さらに、卒業生がより高度な技術を学ぶために帰って来る事ができる機会も準備しているプログラムは、これまで探した就労トレーニングのなかでもここだけである。

さらに、捨てられていく食べ物を再利用して飢餓をなくすという発想がとても斬新で、とてもスマートである。これまでDCセントラルキッチンは食材の再利用をしているのに関わらず、食中毒を出した事がないという。この事実を見ても分かるように、食材の再利用と言う食品衛生上のタブーを、綿密な衛生管理のもとに覆す事にDCセントラルキッチンは成功している。彼らの努力と成功の秘訣、なんと言っても現代人の贅沢が生んだ「新鮮な食材へのフェチズム＝グルメ」という価値観が産み落とした大きな「無駄」を、社会の矛盾である飢餓をなくすという建設的な目的のための通貨にした事にあると思う。

確かに無駄に頼って存在しているプログラムだが、現在の資本主義社会がつづく限り食材の無駄は出続けていくだろうし、食材の無駄が大量に出されているのはアメリカだけではないはずである。バブル時代が生んだ「グルメブーム」で、沢山の食材が日々日本社会でも無駄に捨てられていっているのではないだろうか？ それを栄養のある無料の食事に調理しなおしてお年寄りや、非営利団体に配給するというのは、けっして不可能ではないはずだと思った。ただし、それを行うにはその活動を保護する法律が必要となる。果たしてそれがアメリカのようにすんなり日本でも通るだろうかと言う不安は残る。ただ、日本がその気になってくれるのであればアメリカの元農林水産大臣の協力も貸すよというエガー氏の応援は心強かった。

ケース③ ドゥ・ファンド (マンハッタン, NYC)

次に紹介するのは、再びNYの団体でアメリカ国内外のマスコミから注目を浴びているドゥ・ファンドというホームレスのための非営利団体である。現在アメリカの低所得者の半数以上が女性である事から、男性を中心とした就労トレーニングの数は少ない。日本のホームレスの殆どが男性であると言う事から、この団体の就労トレーニング活動を報告する事にきめた。

【団体の歴史】

ドゥ・ファンドは、1985年、ジョージ・マクドナルド氏とその妻ハリエットさんによってホームレスの自立を支援する非営利団体として生まれた。マクドナルド氏は、この団体をはじめる前はNJの大手スポーツ用品会社 **Spring Lake** 社で広告担当の重役をしていた。当時、本業のビジネスマンとして働く傍ら、ホームレス問題に関心を寄せていたマクドナルド氏は、ホームレス問題をスローガンとして民主党から議会と市議会へ計4回出馬したことがあるという。1985年、ついにマクドナルド氏はビジネスマンと言う肩書きをすて、其れまでの住まいからマンハッタン的高级住宅街であるアッパーイーストサイドの小さなマンションに引っ越し、この報告書で紹介したNYで最も古いと言われるホームレスの非営利団体 **Coalition for the Homeless : C F T H** のボランティアとして働き始める。彼のC F T Hでの仕事は、サンドイッチをNYの地下鉄の駅(グランドセントラルステーション)でホームレスに渡すことだった。

C F T Hのボランティア活動を通してマクドナルド氏は、「ホームレスに衣食住を無料で与えるだけではこの問題の抜本的解決にはならない」と考えはじめる。そして妻のハリエットさんと共に、仕事をつくりその仕事をホームレス達に与える事で彼等を支援する非営利団体を自費で設立することを決める。団体の名称である「ドゥ」は、路上でなくなった一人のホームレスの名前から来ており、この団体はそうして路上で身よりもなく亡くなっていったホームレスたちに追悼の思いを込めて創立された。

「衣食住ではなく、仕事で人を助ける」をモットーに、ドゥ・ファンドはこれまで900人以上のホームレスの人々を路上から救済してきた。ドゥ・ファンドの「**Ready, Willing and Able** プログラム(以下RWAと省略)」はホームレスの人々を雇い、就労トレーニングとしてマンハッタン市内を清掃するというユニークな活動で、せつせと真面目に街を掃除するホームレス達の姿は「怠け者」、「きたない」、「社会のごみ」、などというホームレスに対する偏見をなくすうえで大きな役割を果たしている。

1999年、ドゥ・ファンドはNY市内の活動成功を弾みにワシントンDCへと活動範囲を広げるが、DCの地元支持を得られず、ドゥ・ファンドDC支部は昨年2000年に閉鎖される事になる。「最も実用・現実的なホームレス支援団体」という高い評価を受ける反面、そのプログラムの内容から「ホームレスの労働力を搾取しているだけの白人の人種差別的偽善活動」などという非難も受け、紆余曲折の活動を続けているドゥ・ファンドだが、NY市内での活動範囲は着実に拡大し

ているユニークな団体である。

【ドゥ・ファンドの団体宣言】

ドゥ・ファンドは、NYを拠点としてホームレス状態にあった人々の自立を支援する為活動する非営利団体である。ホームレス状態にあった人々がきちんと社会復帰し、自立するために必要な就労能力と社会適応能力の養成および就労経験を積むことを支援するのがドゥ・ファンドの目標である。

ドゥ・ファンドは衣食住を無料で提供する事だけで、ホームレス問題は解決できないと考える。ドゥ・ファンドは「Work Works: 仕事で支援する」ということをモットーに、ホームレス問題の解決を手がけている。我々は、給与が支払われる仕事には人間にやる気を与えるパワーがあると強く信じている。ドゥ・ファンドの Ready, Willing & Able (RWA) プログラムは、ホームレスの人々が自尊感情と自立するために必要なバイタリティを再構築できるスコープの広い環境とプログラムを提供している。

我々が提供するプログラムは現実的で実用的で、長期的な効果を生む事を目指している。卒業生のうち 62 パーセントが定職を持ち、フォローアップ期間中 3 年間安定した住居に住んでいる事実から分かるように、我々のモットー通り「仕事で人が働けるよう支援する」事は可能だということをドゥ・ファンドは証明している。

原文

The Doe Fund is a New York based non-profit organization whose mission is to help formerly homeless men and women achieve lives of independence and self-sufficiency. The Doe Fund's primary goal is to provide these individuals with the job skills training, social support services and the paid employment experience necessary to secure and maintain private sector employment and self-supporting housing.

Inspired by the notion that helping the homeless is more than just giving them a handout, The Doe Fund philosophy is based on the premise that "Work Works". We believe in the power of a paid job. The Doe Fund's *Ready, Willing & Able* program provides a holistic, structured environment in which homeless men and women can restore their self-esteem and regain power over their lives by becoming self-sufficient and productive members of society.

Clearly demonstrating the long-term positive effects of *Ready, Willing & Able* and our philosophy that work does indeed work, 62% of those who enter the program graduate to permanent jobs and remain housed for follow-up periods of up to 3 years. (ドゥ・ファンド提供資料より引用・翻訳)

インタビューから・・・

(エリザベス・リオン・エティエルさん、アルトン・ジョンソンさん、その他のスタッフとの会談を元に)

【自立へのハードル】

ドゥ・ファンドが指摘する元ホームレスが就職する上で困難な点

ドゥ・ファンドのRWAプログラムの参加者の多くは、市内に住むマイノリティの貧困層たちである。彼らは麻薬、特に値段の安い「クラック」という麻薬（コカインの一種）の依存症が最も多い人口層でもある。プログラムディレクターのジョンソンさんの話では、これらの就労トレーニングを行っている人々の多くが麻薬中毒のため仕事や家族、家を失い、ホームレスになっているため、彼らが就職するにあたって最も大きなハードルは「依存症を乗り越える」という事であるようだ。実際、その問題点を指摘するジョンソンさん自身も麻薬中毒で全てを失いかけた経験の持ち主で、彼がドゥ・ファンドを通じてどのように自立したかは後で紹介する。その他の点は精神病、慢性的な低価格の住宅不足など他の団体が指摘しているものと共通している。

NY市内の住宅事情の悪さは世界的にも有名である。それに加え、麻薬の浸透、特にスラム化したイーストハーレム地域では、日中でも麻薬が平然と取引されており、誰でも金さえ出せば簡単に麻薬が買えるという状況である。イーストハーレムは黒人やヒスパニック系が多く住んでいるところでもある。ドゥ・ファンドのプログラムの参加者のうち、殆どが黒人あるいはヒスパニック系の麻薬中毒者である事は、このハーレムの麻薬事情とホームレス問題が深く関わっていること示唆している。

しかし、住宅事情と麻薬の普及だけが多くの失業者とホームレスを生んだわけではないことはここで特記しておかなければならない。DCセントラルキッチンところで少し触れたが、アメリカの産業構造の変化は現在のホームレス問題に深く関係している。1950年代までアメリカの産業は重工業が中心で、アメリカの都市部には重工業の工場が広がり、市内には工場労働者として働く移民やマイノリティが数多く住んでいた。1960年代に入りアメリカ産業は重工業からサービス業、コンピューター開発などが中心となっていく、市内にあった工場はどんどん安くて広い土地のある郊外へと移っていった。しかし、工場で働く低賃金労働者は、市内に取り残されていった。

低賃金労働者達が働いていた工場の移動とともに郊外に移らなかった理由はいくつかある。まず、彼らの勤め先である工場がある郊外まで通勤するには時間とお金がかかるということ。日本のようにアメリカは公共交通機関が発達していないため、郊外まで通勤するには車が必要不可欠となる。しかし、低収入の彼らは車を買ってメンテナンスするだけの経済的余裕がなかった。実際車のローン、ガソリン代、修理代のほうが彼らの月給を上回ることが多く、郊外の工場までの車での通勤は不可能に等しかった。さらに郊外に住む上流および中産階級の住民は低所得者が近所に増える事を毛嫌いするため、公営住宅建設は低所得者の仕事が豊富にある郊外に立てられる事

は殆どなく、同じ理由で郊外の住宅の賃貸料や家の値段は高く設定された。これらの労働者の多くがマイノリティであり、郊外に住む人々の多くが白人であるという人種問題も、仕事が消えていく市内に低所得者であるマイノリティを閉じ込めてしまった原因の一つである。

結果、多くのマイノリティ下層階級が都市部に残され、慢性の失業状態が生まれていった。1980年代からの市内の麻薬の普及は、その慢性の失業状態に拍車をかけていき低所得地域のスラム化を進めた。工場であらしく肉体労働をする父親が失業し、麻薬や酒におぼれて、家庭を崩壊させていくのを見て育った多くの子供達が親と同じ道をたどる—という悪循環が全米の都市部で慢性的に生産され、再生産しつづけている。この根深い原因が現在のアメリカのホームレス問題解決を難しくしていると言える。(参考資料：P. Bourgois. “In Search of Respect”、J.W.Wilson. “The Truly Disadvantaged” & “When Work Disappears”)。

また、最近の社会学者の研究では、都市部のマイノリティ低所得者層の男性の多くは、サービス業よりも肉体労働を好む傾向があると報告されている。これは彼らの前世代が肉体労働をして家庭を支えていたという古き良き時代だった過去への憧憬と、サービス業は「女々しい」が、肉体労働は「男らしい」というジェンダー的価値観を彼らが持っているためだと言われている。安定して給料の良い肉体労働の就職口の数、市内ではとても限られているため、いかなる理由であれ彼らの持つ就職に対する好みは、彼らが市内で就職口を見つけていくうえで大きなハードルになっていることは確かである。

【ドゥ・ファンドのプログラム】

【I】 就労トレーニングプログラム：Ready, Willing & Able プログラム (RWAプログラム)

【活動内容と目的の主旨】

RWAプログラムとは、ドゥ・ファンドのシェルター内での清掃管理作業と就労作業を通して行われる就労トレーニングのことで、このプログラムはホームレスの人々に仕事を与え、彼らに自主的に努力させることによって自立能力を高める手助けをしている。「衣食住を与えるだけで他人の自立は支援できない。自立の支援は、ホームレス達が自分で働き給与を得て自活する事の大切さを知るチャンスを与える事だ。」という創立者のマクドナルド氏の信条から、このプログラムは彼らに麻薬やアルコールを自分の意志で断ち切り、自分で自分の生活を築き上げる能力を養う支援をしている。

RWAはホームレスのなかでも、最も自立が困難だと言われているアルコールや麻薬の依存症を持っているが、肉体的には健康な独身男性を対象とした支援プログラムである。RWAはこれらの人々に人生をやり直すよう激励し、過ちを正すチャンスを待ち望んでいる人々にチャンスを与え、自立した社会の一員になるために必要なトレーニングを提供することを目標にしている。

【参加資格】

RWAの参加資格は基本的には、i)麻薬やアルコールの依存症を絶ち切り、そのライフスタイルを継続する意志がある、ii)精神・身体的に健康である、iii)仕事をする意志がある、ということだけで性別、年齢、人種、宗教などは関係ないことになっている。しかし、就労トレーニングの内容が肉体的にハードなため、女性や高齢者は向いていない。現在、ドゥ・ファンドでは女性のホームレスのニーズに合った就労トレーニングも開発中である。ディレクターのジョンソンさんの話では、トレーニング参加者が60歳以上の高齢者の場合は、室内の作業にふりあて、なるべく屋外の肉体労働はさせないようにしているらしい。これは高齢者を屋外の作業に当てると「老人をこき使っているという」マイナスのイメージを作りかねない懸念のためだという。

プログラムの内容上、性別や年齢の若干の制限はあるが、とにかく自分で薬物を絶ちきると約束ができ、精神・身体的に健康であり、プログラムの内容である肉体労働をこなせるのであれば誰でも参加できることになっている。薬物やアルコールの専門のリハビリを受けたりする必要も、紹介状をもってくる必要も一切ない。ただし、他の団体の就労トレーニング参加規約と大きく異なる点は、ドゥ・ファンドのRWAプログラムに参加したと同時に公的医療補助であるメディケア以外の福祉手当の受給を一切切やめなくてはならないことになっている。公的手当てを受けず、どのように参加者が生活しているかについては給与手当のところで詳しく述べることにする。

参加者の構成は殆どがアフリカン・アメリカンで、年齢は22歳から60歳までの幅があり、参加者の平均年齢は40代前後である。学歴は参加者の40%が高校中退・中卒、38%が高卒あるいは其れに匹敵する資格を持っている。22%の参加者が大学に入学した経験があるが、そのうちの2%だけが大学卒業資格を持っている。就労トレーニング活動の内容が肉体労働である為、参加者の殆どが男性である。全員が麻薬を用いた経験があり、それが原因でホームレスになった人達である。ホームレスであった期間は其々異なるが(最低1ヶ月～最高20年)、平均はおよそ8ヶ月ぐらいである。過去の調査によると参加者の3分の2が1年から其れ以下の間ホームレス状態にあったと報告されており、現在も殆ど変わらないと思われる。ホームレスの期間に関わらず、半分以上の参加者が12ヶ月以上失業・不就労状態にあり、参加者の失業・不就労状態の平均期間は18ヶ月(1年半)である(ドゥ・ファンド提供資料より引用)。

薬物・アルコール依存症専門のリハビリテーションの特別施設をドゥ・ファンドは運営していないので、このプログラムに参加しても心療医療的なリハビリ¹⁰は受けられない。しかし、ディレクターのジョンソンさんいわく、心療医療用のリハビリだけが依存症の克服方法ではないし、依存症があってもここに来てすぐ働き出して依存症を克服し自立していった人は沢山いるため、特にドゥ・ファンドでは心療医療リハビリテーションが絶対に必要だとは考えていない。

¹⁰ 専門的な心療医療的依存症のリハビリテーションは公的な施設で行われる事が多い。その内容はまず6ヶ月間グループカウンセリングによって依存症に陥った自分自身の中の弱さに直視しそれを自認する精神的トレーニングが行われる。その後は初めの6ヶ月間で崩れた自尊心を新しい健全な自尊心にくみ直すためのカウンセリングと就労プログラムなどへの参加していく、というのが一般的な心療医療的依存症リハビリテーションである。ドゥ・ファンドはこの初め

参加者の大半は、ドゥ・ファンドの運営するシェルターと市が運営するシェルターから来ている。ドゥ・ファンドのシェルターも市から認定されているシェルターだが、その中での運営の仕方はドゥ・ファンドに任されているため、参加者は行政の手続きなどなしに、直ぐ就労トレーニングに参加できるようになっている。他の団体から紹介されて来ると言うパターンもあるし、卒業生から紹介されてくるパターンもあり様々である。

【給与手当と貯金】

ドゥ・ファンドの就労プログラムに参加すると医療援助以外すべての公的福祉手当の受給を止めなくてはならない事は既に述べた。しかし、このプログラムに参加すると同時に参加者は月々60ドル(6-7,000円)の給与が払われることになっている。他の就労トレーニングと違い、ドゥ・ファンドの就労トレーニングは福祉受給期間中に受ける就労トレーニングと見なされない。いきなり本当の賃金労働がトレーニングとしてはじまるのである。就労トレーニング参加者に給与を支払うプログラムは他にもあるが、福祉手当受給を禁止させるプログラムは他にあまり例がない。福祉の受給をやめさせるのは、働く事で自立していくと言う方法をドゥ・ファンドは強調しているためである。また必要以上のお金を与える事でお酒や麻薬を買わせないようにするためでもある。手当を受けず月々60ドルだけの給与でどうやって参加者は生活するのかと言うと、参加者はすべてドゥ・ファンドが運営するシェルターあるいは市内のシェルターや支援住宅で寝泊りしているため家賃をまず払う必要がない上に、シェルターでは無料の食事や衣服も提供されるため、参加者は福祉手当が無くてもやっていけるようになっているのだ。

プログラムは3つの期間に分かれており、第1期間が終了するとRWAの参加者は次のステップである「ワークアサインメント」というプログラムが始まる。この2期目のプログラム期間中は、1時間につき5ドル50セント(最低賃金より若干上回る)という時給で給与が支払われるようになる。給料は週ごとに支払われるが、その給料のうち50ドルは家賃、15ドルは食事代としてドゥ・ファンドに払わなくてはいけない。さらに給料のうち30ドルは貯金しなくてはならず、その貯金は訓練生が卒業するまでドゥ・ファンドによって保管され、卒業後の自立への資金として卒業後渡されることになっている。プログラムを卒業するには最低1000ドルの貯金をしなくてはならないことになっている。このシステムは働いて稼いだお金を計画的に使うという能力を伸ばすために行われている。

【カリキュラムと規則】

①規則

とにかく、麻薬に手を出さない事、これはドゥ・ファンドのプログラムに参加し、それをつづけるにあたっての鉄則である。その他は、ケースワーカーの指導に従う、指導された活動はきち

の6ヶ月間を飛ばしていきなり就労トレーニングをはじめてリハビリをおこなっている。

んとこなす、シェルター内で問題(喧嘩など)を起こさない、チームワークを乱す事をしないこと、遅刻しないなど、ごく一般的な規則である。たいていの場合きちんと守られるが、違反者は時折出てくる。規則の違反者は警告を受け、再度違反をするとプログラム継続が出来なくなる。麻薬の使用に関しては、見つかると即プログラムを去らなくてはならない。

②カリキュラム

プログラムは平均 12 ヶ月から 18 ヶ月(1年から1年半)続き、3つの期間に分かれている。第1期間は30日間で、まずオリエンテーションからプログラムが始まる。オリエンテーションではまずプログラムを参加・継続するために従わなくてはならないルールが、ケースワーカーマネージャーのクレグさんから説明される。クレグさんはこのプログラムの卒業生である。このオリエンテーションの後、参加者はドゥ・ファンドのトレードマークでもあるブルーのユニフォームを着て清掃活動のフィールドワークにすぐ参加していく。

屋内の清掃活動は、シェルター内の掃除管理、屋外の清掃活動はマンハッタン市内各地ならびにブルックリン、クイーンズの一角で行われる。清掃活動の内容はとにかく街中とシェルター内を綺麗に掃除するという事である。ごみを拾って、道を掃く、雪の日は歩行者が歩きやすくなるために道路の雪かきをするなどが主な作業の内容である。この作業は班ごとに行われ、一つの班につき5人の作業訓練生と一人のケースワーカーがふりあてられる。ケースワーカーたちは訓練生に作業の指示を与え、また彼らの作業中の態度をチェックし、やる気があるかどうかなどを判断をする。怠惰な態度はいっさい許されない。参加者は毎日4時間、この清掃活動に参加しその他の時間は「ライフ・スキル」すなわち生活基礎能力のクラスに出席しなければならない。この授業はソーシャルワーカー、カウンセラーによって、ホームレス状態で生活していたときに身につけた自己中心的な志向や生活態度の改善のグループカウンセリングや社会で自立していくために必要な常識、価値観、マナーなどが指導される。

清掃作業の時間はシフト制で、朝6時から朝10時、朝10時から昼の2時、昼3時から夕方7時、夕方7時から夜11時など朝、昼、晩のシフトがある。どのシフトを選ぶかはケースワーカーと訓練生が相談して決められる。作業のシフトが朝の者は午後の時間を使って生活能力の授業を受け、夜のシフトの者は朝の授業に出なければならない。その他の時間は、シェルター内で仲間やケースワーカーと一緒に時間を過ごすというのが一般的な彼らの日課である。シェルター内では、朝から夜までケースワーカーが常勤しており、いつでも訓練生の相談に乗ったり話し相手になれるようになっている。

手当てのところで触れたが、プログラムの第1期間中、参加者は実習に対して週15ドルの給与が支払われる。しかし、食事代やシェルターに寝泊りする家賃は払わなくて良い。給料日は毎週水曜日で現金で支払われる。給料日の前に抜き打ちで麻薬・アルコール検査が行われる。薬物やアルコールの使用をしている事が分かれば、警告あるいは麻薬使用の場合はプログラムから即除名される。

30 日間の第 1 期間が終わると、プログラムの内容は若干変わる。フィールドワークである街中の清掃活動はそのまま続けられるが、プログラムの第 2 期中訓練生は各自一定の仕事を割り当てられ、社会に復活し働いていける就労技術を徐々に伸ばす作業活動トレーニングが始まる。就労トレーニングの内容は様々で、どの技術トレーニングを学ぶかはケースワーカーと参加者が相談をして決めらる。

参加者に関心があればコンピューターのレッスンもこの期間から受け始める事が出来る。コンピューターのクラスは毎日あるわけではないが、コンピュータールームは朝 9 時から午後 10 時まで開いており、自由に入出りできるようになっている。ケースワーカーの一人であるクレグさんもこのドゥ・ファンドでコンピューターの使い方を学んだ一人である。その他、高校卒業資格のための勉強にもこの時期に取り組む事ができる。クレグさんもここで勉強して高校卒業資格（GED）を取得した。

DC セントラルキッチンのように調理就労トレーニングもあり、それはシェルター内のキッチンで行われる。ドゥ・ファンドのジョージ・マクドナルド氏と DC セントラルキッチンのロバート・エガー氏はお互い意見を交わした事があるらしく、恐らくこのアイデアは DC セントラルキッチンから来ていると思われる。このプログラムでは訓練生の調理就労トレーニングと同時にドゥ・ファンドが運営するシェルターの人々のために 900 食の食事も作っている。しかし、このプログラムの規模は DC セントラルキッチンに比べ小さく、食料の救済活動などは一切しておらず、参加者も他の就労トレーニングにくらべ少ないが、レストランや食品関係の仕事につきたいと考える人の為に用意された就労トレーニングであることは確かである。このように様々な就労トレーニングが用意されているが、殆どの参加者が選ぶ就労トレーニングは肉体労働、つまりビル整備、メンテナンス、ビルの建設現場での仕事などである。

第 2 期は第 1 期同様に、ライフスキル(生活能力)の授業や薬物依存症を乗り越えるためのクラスやミーティング、そしてどうしたらホームレス状態に再び戻らずに自立を継続させていけるかということを知る授業が続けられ、参加者は第 2 期も第 1 期同様出席していかなければならない。第 2 期間は第 1 期間で養成され試された生活能力とやる気をさらに伸ばすために、実際の社会での生活と近い生活をするシミュレーション(自分の給料から家賃と食事代を負担する)が始まる。給与手当てのところで既に言及したが、プログラム参加者は第 2 期が始まると時給 5 ドル 50 セントあるいはそれ以上(作業の内容による)を受け取り、そのうち毎週 50 ドルをシェルターの宿泊代として収め、15 ドルは食事代、そして 30 ドルは卒業後の生活のために貯金として差し引かれる。つまり、家賃を月 200 ドル、食事代月 60 ドル支払い、さらに貯金を月 120 ドルしなければならないのである。この貯金制度によって訓練生は卒業までに大体 1000 ドル(10~12 万円)を貯める事が出来、貯金は卒業後の生活のために使うようプログラムを卒業してから少しづつケースワーカーによって卒業生に渡されていく。

プログラム第 2 期間中もケースワーカーとスーパーバイザーは参加者の活動内容を観察し、2 週間ごと彼らがきちんと就労トレーニングやライフスキルトレーニングを受けているかどうかチェックする。そして各生徒ごとに報告書を作成し、彼らが次ぎのステップへの準備が出来ている

かどうかが評価される。第2期から第3期の就職活動プログラム開始までの期間は個人の活動内容とやる気や努力によって差があるが、大体10ヶ月程度が一般的にかかる期間だという。また18ヶ月以上プログラムに参加する事はできないため、18ヶ月たっても第3期である就職活動に参加する準備が出来無い者はプログラムをやめなくてはならない。

第3期は、訓練生が社会に出て安定し、自立した生活を送ることができるような仕事を見つける準備がはじめられる。参加者はこの期間中、6週間にわたるコンピューターの授業と職業準備トレーニングの授業を必修しなくてはならない。其れまでは個人の意思によってコンピューターの授業は受ける事が出来たが、この期間は全員が6週間コンピューターの基本的な使い方を学ばなければならない事になっている。この期間、訓練生は安定・自立した生活を築く事が出来るフルタイムの仕事や住宅の探し方も学ばなくてはならない。また、雇用者側に印象の良い履歴書の書き方、面接時に聞かれる質問に誠実に前向きに対応する練習、どうすれば仕事を続けていけるか、仕事場での対人関係、仕事に対する姿勢、困難な状況に立たされたときの対処の仕方、そして仕事や生活からくるストレスの対応の仕方などもこの期間にケースワーカーや職業カウンセラーから指導される。

この就職活動プログラムは、ドゥ・ファンドの就職開発チームによって指導され、このチームは現在様々な大手の企業と提携を組み、卒業生の安定した就職先の拡大に力を入れている。就職開発チームのメンバーは、訓練生一人一人に適した仕事を見つけ、面接を取りつける手助けをおこない、できるかぎり訓練生が手当てのついた安定した給料の職場で働けるよう就職指導している。また訓練生がきちんと就職活動を続けているかどうか、このプログラムのスタッフ（カウンセラー）によってチェックされる。現在RWAプログラムの卒業生の卒業後1年目の平均収入は時給8ドル50セントから9ドルで、プログラム卒業生の主な就職先は、建設業、ビル整備・メンテナンス、ホテルや高級マンションのガードマンやドアマン、レストラン、ダイレクトメール製作業などである。

およそ4割程度の者がプログラム参加から1年以内で仕事を見つけていっている。毎年、プログラム参加者の全員のうち約60%以上が（卒業までにかかる時間は個人差がある）就職してプログラムを無事に卒業していっている。就職先の内訳をみると、ドゥ・ファンド以外のところへ就職をする卒業生は45%、ドゥ・ファンドへ就職していく卒業生の割合はおよそ17%程度で、この数字を見ると卒業生の殆どがドゥ・ファンド以外のところへ就職しているが、ドゥ・ファンド自身も彼らの大きな就職先であることが分かる。過去の調査結果によると就職をした卒業生のうち約8割が卒業してから少なくとも3ヶ月間は就労状態を保っている。つまり当初参加した内の約半分以上は仕事を見つけ、少なくとも3ヶ月以上は就労状態を続けている。しかし、言い換えればプログラムに参加したうちのおよそ半分しか自立を継続できていないとも解釈でき、いかに依存症を絶ちきって自立し、そしてそれを継続するのが難しいかがうかがえる。

しかし、過去の調査結果を見てみると、ドゥ・ファンドに参加した人々のうち60%以上のひとが参加してから1年半～3年半までの間に最終的にプログラムを終え自立しその状態を続けている。これは、初めの参加で上手く行かなかった人がもう一度プログラムに戻ってきてから卒業で

きた事を示唆している。またRWAに参加してから3年半後の追跡調査で就職状態にないと答えた元参加者/卒業生のうち、7%がRWAプログラムに再度参加中、10%が依存症の専門の治療を施設で受けており、20%は参加して3年半たった後の行方が分からないとなっている。これらのデータを見た限りで言えることは、ドゥ・ファンドのRWAプログラムは一夜でホームレスを一掃したとはいえないものの少なくともこの活動を通しドゥ・ファンドは徐々にホームレス人々を路上よりもましな環境へと導いていっているといつて良いのではないだろうか。(ドゥ・ファンド提供資料参照)

【プログラム卒業とRWAアフターケアプログラム】

ードゥ・ファンドは第2の故郷

ドゥ・ファンドのプログラムを卒業するには訓練生は以下の規定を満たさなければいけない。

- i) 麻薬・アルコールを絶ちきっていること
- ii) 時給8ドル50セント以上および手当のついた就職先が内定していること
- iii) 公的支援住宅ではなく一般住宅への入居が決まっている事

他のプログラムでは、就職先が決まっており、依存症の克服ができれば卒業とみなされているが、ドゥ・ファンドではきちんと一般の住宅に移り住んで生活を保てるようになってはじめて卒業と見なされる。これらの条件が満たされればいよいよ卒業式である。卒業式は毎年3月の下旬、ドゥ・ファンドの事務所の近くにある教会で行われる。私も招待を受けたがあいにくその日私は大学で講義をしなくてはならなかったため出席できなかった。しかし今年は日本からTBSがこの卒業式の取材に来る予定になっていた。

卒業後は、RWAアフターケアサービスプログラムが五年間ケースワーカーによって行われる。初めの半年間はアフターケアプログラムのケースワーカーが卒業生の家と仕事場に月2回訪ね、彼らが問題なく仕事を続けられているか、薬物・アルコールを絶ちつづけているか、家賃をきちんと払っているかどうかなどがチェックされる。この期間中、ケースワーカーは卒業生の雇用者とも連絡をとり、卒業生がきちんと働いているかどうかチェックをする。もし問題がある場合は卒業生または場合によっては雇用者とケースワーカーは話をし、問題が解決のため仲介役をつとめることになっている。

プログラム参加期間中に貯めた1000ドルはこのアフターケアプログラムを通して月々200ドルずつ5ヶ月間かけて卒業生に返されていく。しかし、この貯金を受け取るには卒業生は麻薬や酒を絶ちつづけ、自立を継続していなくてはならず、またケースワーカーとの定期的な面会をきちんとしていなくてはならない。さらに、卒業生は月に一回の他の卒業生達と一緒にドゥ・ファンドで行われるピア・カウンセリングに参加しなくてはならないことにもなっている。ピアカウンセリングではドゥ・ファンドから卒業した人達が互いに問題を持ちより、どうやってそれを

乗り越えていくべきかが話し合われる。このカウンセリングは卒業生が自立してから問題に直面したとき、孤独に悩むのではなく、他の卒業生と話し合い、お互いを励ます機会として大変役に立っているという。

ケースワーカーのボニー・ホルツマンさんの話によると、卒業生の多くが就職後直面する共通の問題は、仕事仲間にお酒を飲みに誘われたときの対応の仕方である。雇用者は彼らが薬物・アルコール依存症で元ホームレスであった事を知っているが、他の従業員には告げられていないことが多い。このような問題に対しドゥ・ファンドのケースワーカーは、お酒を飲みに誘われ断りつづけて仕事仲間との関係をギクシャクさせたり、依存症である事を隠すために無理に誘いにのり酒の誘惑に負けてしまうより、自分が依存症のリハビリを受けている事を正々堂々と相手に告げ、クラブやバーに飲みには行けないが一緒にご飯を食べるのなら付き合えるなど、正直に誠実に接する事をピアカウンセリングの際に勧めていると言う。また、カウンセラーは雇用者側にも理解を求め、社内でパーティをする場合はなるべくノンアルコールでもOKな昼食会にしたりするよう頼んだりするようにしている。

ホームレス、依存症を持つ人々の自立の道のりは厳しくて長い。このプログラムに参加してからの期間は「自立」までの道のりというより、「自立」と言う長い道のりが続いていくドアの前までの距離でしかない。彼らの多くがホームレス、依存症、犯罪という人生のわき道に逸れ、その過程で友人、家族を失っていった。ドゥ・ファンドに入って、支援してくれるネットワークを見つけ、そして経済的に自立していったとしても、復帰した社会に必ずしも彼らの居場所があるとは限らない。彼らの本当の試練はその時点からはじまるのだ。ドゥ・ファンドでは、こうして5年にわたる長期のアフターケアをする事によって、せつかく自立できた彼らが再び社会の孤独の陰に飲み込まれないよう、ここで築いたネットワークを将来も保つていけるように様々なサービスを提供している。ドゥ・ファンドは、この団体が彼らの第2の故郷となるように努めており、実際にそうなっている。

【Ⅲ】 コミュニティー改善プロジェクト

コミュニティー改善プロジェクトはRWAの清掃活動の正式名称で、この活動は先に報告した就労トレーニングの目的のほかに、ホームレスへの偏見を無くしていく目的をもって行われている。ドゥ・ファンドの訓練生が着るユニフォームは明るいブルーの作業服で、ユニフォームの背中にはドゥ・ファンドのロゴである **Ready, Willing & Able** がはいつている。袖にはアメリカの国旗とRWAのロゴが入っていて、とにかく目立ってかっこいいデザインになっており、街を行く人々の目にとまるようになっている。これは創立者のマクドナルド氏の提案で、「ホームレスだって社会貢献している社会の一員なんだ」と言う事を一般市民にアピールするために作られた。一流企業の広告課の元重役らしい発想だが、実際このユニフォームのお陰でこの活動は地域の温かい関心をよんでいる。

元ホームレスによる地域の清掃プログラムである、このコミュニティー改善プロジェクトは、アッパーイーストサイド(マンハッタンの超高級住宅地)ではじめられた。活動開始直後、地域の人々の間で「町を綺麗にしてくれるブルーのユニフォームを着た人々は一体誰?、何処からきているのだ?」と話題になり、彼らは自立を目指して訓練中のホームレスだということがわかってからは地元の新聞に取り上げられるようになり、お陰でアッパーイーストサイドに住む資産家からドゥ・ファンドへの寄付も増えたという。

アッパーイーストでの成功と経験をもとに、現在ではウエストサイド、ブルックリン、クィーンズと活動範囲を伸ばしている。作業の内容は先に述べたが、通りと公園の清掃から、花壇の整理など街の景観を美しくすることで、ごみだらけになりがちなマンハッタンの住民からからともありがたがられている。

[V] 改装・修理プロジェクト

このプログラムは、ドゥ・ファンドとニューヨーク市が提携して行っているもので、市が所有する老朽化したアパートの改装や修理をドゥ・ファンドの訓練生によって行うというプログラムである。このプログラムのプロジェクトはドゥ・ファンドの活動資金の収入源になっているだけでなく、RWAプログラムの訓練生が建設現場で働く技術を身につける就労トレーニングの機会にもなっている。

[VI] ニュージャージーRWA & コンピューター教室センター

ニュージャージー州ジャージーシティに、1998年ドゥ・ファンド・ニュージャージー支部がつけられた。この支部は元YMCA会館を改造して作られたもので、NYでの経験をもとに現在28人の元ホームレスだった人々への自立支援活動が行われている。ここでもコミュニティー改善活動(清掃活動)が行われており、ドゥ・ファンドのプログラムの卒業生4名がケースワーカーとして働いている。

ニュージャージー支部では、行政の都市開発・建設課からの資金援助によって、コンピューター教室センターが開設した。このセンターができたことによって、コンピューターに関心のある訓練生に、より充実した内容のコンピューター技術を教授する事が出来るようになったという。

[VII] NYバックオフィス

これは大手企業のダイレクトメールの処理を行うプログラムで、このプログラムを通じ訓練生は就職するときに役に立つ基礎的なコンピューター技能およびデータ処理技術を学ぶ事ができるようになっている。プログラムオフィスはブルックスにあり、このプログラムに参加している企業はトヨタ、シティバンク、キャノン、フィルギア&ソング、NY私立美術館、ハーバー&ソング、ならびに地域の大学や非営利団体である。NYバックオフィスは、トヨタとキャノンと契約を結び、これら企業の重役の為にインターネットサーベイを行っており、バックオフィスの従業員は、インターネットのウェブサイトを探し、ニュースやデータを集めレポートにし、毎日こ

これらの企業の重役達に送っている。こうして就労トレーニングもできるうえに、活動資金の確保もでき一石二鳥のプログラムであると言える。

[Ⅷ] 支援住宅

ドゥ・ファンドは3種類の住宅を持っている。一つはシェルターで、RWAのプログラムの参加者が寝泊りをしているところ、もう一つはベタープレイスというエイズ患者達のための永久型支援住宅、そして最後は卒業生及び低所得者達が短期間利用できるピーター・ジェイ・シャープ通勤寮である。

① ベタープレイス

ベタープレイスは、ドゥ・ファンドが運営する支援住宅の一つで、これは次に紹介するピーター・ジェイ・シャープ通勤寮と違い、自立する事が出来ないエイズ患者の人々の為の住宅である。ベタープレイスは、エイズに感染した事によって(あるいはエイズに感染していることが分かった事によって)仕事を失い自立しつづけれなくなり、ホームレス状態に逆戻り寸前となってドゥ・ファンドに再び戻ってきた多くの卒業生達のために、ドゥ・ファンドによって1996年アップパーイーストサイドに建設された。事情によって自立できない人の為に、バスの停留所や地下鉄の通路、そして街の路上より「もっといい場所」(ベタープレイス)が無くてはならないという考えからこの住宅は生まれた。

この住宅は長期住居用に作られており、永久的に住みつづける事が出来る。この住宅の中には24時間常に住居者のためのサービスが用意されており、彼らの精神的自立を応援する一方で、彼らが安全に心身ともに平穏に暮らしていけるよう様々な支援サービスがなされている。ここでは、栄養価が高い食事が提供され、スタッフによって住居者が孤立してしまわないよう心と体のケアがなされている。現在入居者は28名で、アップパーイーストサイドでは唯一のエイズ患者のための支援住宅として存在している。入居条件は、エイズ感染者である事、そして歩行が出来、精神・肉体的にある程度安定していること、さらに麻薬依存症でないあるいはその治療を受けていなければならない。入居者は公的福祉援助を受けてもよいことになっている。

② ピーター・ジェイ・シャープ住宅 (PJS住宅)

ピーター・ジェイ・シャープ住宅は、NY市の住宅保存・建設課とリッチマングループという団体によって組織されている低税金住宅支援の援助によって作られた通勤寮である。PJS住宅は1999年に開設され、RWAの卒業生たちが卒業から生活が安定する初めの1年から2年までの間通勤寮として利用できるようにと、生まれた住宅であるが、入居者はRWAの卒業生に限らず低所得であれば入居できる事になっている。

マンハッタンの住宅状況の悪さを考慮して建てられたこの住宅は、独身寮で全部屋すべてワンルームマンションとしてデザインされている。PJS住宅はインテリアデザイナーのハリー・シュナッパー氏によってデザインされた綺麗な住宅で、6階建てで中には大型スクリーンのテレビ

があるリクリエーションルーム、ジム（ジムの運動器具はNYスポーツクラブから寄付されたものだが新品同様）、食堂、ランドリールーム、メールボックス、24時間のガードマン、そしてとても美しい中庭などが設置されている。

家賃は入居者の収入によって違うが、大体平均350ドルから400ドルで、現在支払われている家賃の最低は200ドル強、最高は400ドル強と、マンハッタンの同レベルのワンルームマンションの平均が1,500ドルから2,000ドルである事を考えると、格安であることは間違いない。入居者の条件は、まず仕事を持っており、麻薬・アルコールの依存症がない（あるいはそのリハビリを受けている事）、収入が9,000ドル以上か23,000ドル未満でなくてはならない。この住宅は先に紹介したベタープレイス住宅とは違い、あくまでも通勤寮で永久住宅用では無いため、住居者は二年以上住みつづける事は原則として出来ない事になっている。しかし、身体障害などの特別な理由があって他の一般住宅への入居が難しい人は2年以上住みつづける事ができる場合もある。性別は入居条件の規定にはないが、現在殆どが男性で女性は7名と少ない。

住宅内での規則は、麻薬を使わない事はもちろんのこと、他の住人の迷惑になる行為をしない事など、一般的な住宅のそれと殆ど変わりはない。2週間以内であれば、友達や家族が泊まりにきてもよい事になっている。

寮にはケースワーカーが常勤しており、住人の相談相手となっている。今後は、高校卒業資格取得のための授業や住人同士の集いなどが定期的に行われることになっている。

【サクセスストーリー】

ドゥ・ファンドのウェブサイトに行くと卒業生たちのサクセスストーリーを読む事が出来る。その全てをここで紹介するのは紙面と時間の都合でできないが、ドゥ・ファンドのディレクターであるアルトン・ジョンソンのサクセスストーリーをここで紹介しようと思う。

アルトン・ジョンソンさん

1996年、ドゥ・ファンドは大きなステップを踏んだ。イーストハーレムのNY市営のホームレスシェルターをドゥ・ファンドが引き取り運営する事になったのだ。このシェルターはヤンキースタジアムを対岸に望むハーレム川沿いにあり、ドゥ・ファンドが引き取ったときは、犯罪と麻薬の巣窟であった。ドゥ・ファンドはそのシェルターを改善し、生産的な就労トレーニングプログラムを支える拠点にすることを計画していた。そして、そのシェルターの改善プロジェクトのディレクターに、アルトン・ジョンソンを抜擢した。

アルと言うニックネームで親しまれているアルトン・ジョンソンは、正確にはこのプログラムの卒業生ではない。しかし、このプログラムによって人生を立て直したという点では、このプログラムの訓練生にとっては立派な先輩である。

アルは現在RWAプログラムの地域プログラムディレクターを務めている。中産階級の子供たちがマリファナで遊んでいるとき、彼はヘロインを使って遊んでいたと言う。マンハッタンのなかでも有名なエリート公立高校に通う一方で、彼はドラッグにおぼれていた。小学校4年生の頃からアルは、そのずば抜けて高い知能のため学校では「神童」と呼ばれ、彼の住む低所得者地域では非凡な存在だった。彼の子供の頃のあだ名は「教授（プロフェッサー）」。アルの父親は教育熱心な信心深いクリスチャンで、一時も「アメリカンドリーム」を疑う事のない働き者だった。アル自身も父親同様に信心深く勉学に励むブルックリンDJジャズが大好きな頭の良い少年だった。少なくとも麻薬の手が彼を襲うまでは。

1960年代から1970年代前半は、都市部に住むマイノリティにとっては地獄のはじまりだった。産業の構造が変わり仕事なくなり、街には麻薬がはびこる。アルも厳しい時代にのみこまれていったマイノリティの子供の一人だった。14歳から40歳まで、アルは正気と狂気をさ迷って生きていた。1968年、アルはNY市ではまだ目新しい依存症患者専用の心療医療セラピーに入り、ヘロイン中毒を絶つことに成功。この施設の中でも、彼は持ち前の頭脳で優秀な卒業生と認められ、セラピー施設の重要なスタッフメンバーとして採用された。其れから彼は結婚し大学を出て子供も授かった。しかし彼の結婚に徐々に陰がさしかかりはじめ、1990年についてアルは離婚をする事になる。離婚を機に彼は自分の娘と連絡が取れなくなる。せつかつかんだ結婚の崩壊のショックと混乱から、当時全米に浸透していたコカインに手を出してしまう。1989年、彼はクラックと呼ばれるヘロインの一種で、安くて他の麻薬より致命的なドラッグに走り、仕事及び住まいまで失い、そして2番目の子供の父親になる機会さえも失い、せつかつかんだ全ての幸せをその手からすべり落としてしまった。すべては麻薬中毒の為に。

全てを失った彼は、その後絶望し地下鉄のF路線に住みつ়くホームレスとなった。毎朝彼は目

を覚ますたび、線路に飛びこみ自殺をしようと考えたという。ホームレス時代を振りかえり、アルはこう述べる。「今の自分に行きつくために、自分は全ての苦しみを通ってきたのだと思う。」そう述べる今の彼の目には深い落ちつきがある。

アルは、いつもはドゥ・ファンドのシェルターハーレム1にいるが、ハーレム1にいないときは、ゲイツアベニューかその他の施設を点検に行っている。アルはゲイツアベニューを通して、現在の位置にやってきた。といっても、彼はRWAの訓練生としてではない。

ホームレスとして地下鉄の電車で暮らしているとき、ある朝彼は「線路になんて飛びこむもんか。」と考え直し、麻薬依存症のリハビリセンターに足を運んだ。其れ以来彼は薬を絶っている。リハビリから復帰した彼は、自分が1番良く知っている仕事につくことにきめた。その仕事とは「自分と同じような人々が自立できるように助ける」ことだった。その仕事探をしているとき、ドゥ・ファンドで仕事口があることを耳にする。

初めてマクドナルド氏に会い、ドゥ・ファンドが行おうとしているプログラムの内容を聞いて耳を彼は疑った。「中毒患者を雇って金を支払い、彼らに中毒を絶ちきらせる?、そんな事が出来るのもんか!」と彼は思った。しかし結果はアルの予想を反したものだ。本当に、仕事を与える事で多くのホームレス達は麻薬を絶ちきっていったのだ。アルはゲイツアベニューのケースマネージャーとして働き、仕事を与えられることで中毒を乗り越えていった多くの人々をその目で見て、RWAプログラムの威力を信じるようになった。彼が経験したリハビリ（自分の弱さを直視させてから、仕事を与える）とは違うリハビリのあり方に出会い、彼は目からうろこが落ちたという。

私がインタビューをしたとき、彼はドゥ・ファンドについてこう語った。

「ドゥ・ファンドは、中毒患者たちがやる気を出せば麻薬や酒を絶ってチャンと自立していけるんだって言うことを理解している。だから、ここでは他みたいに自尊心をめちゃくちゃに壊して、新しい自尊心を作り上げていくっていう、型にはまったリハビリはしてない。我々はトレーニングにやってくる人達を一人前の人間として初めから扱うようにしている。其れがこのドゥ・ファンドの成功の秘訣なんだ。日本のホームレス問題解決にたいして、うちが教えられるのは『薬中であろうが、アル中であろうが、ホームレスであろうが、なんであろうが、初めから一人前の人間として扱わなくてはいけない』ということ。結局、だれだって人間だったら弱いときがある。だからと言って弱っている人間を別物あつかいする必要なんて何処にもないんだ。」

ハーレム1のシェルター内のあり方を根本的に変えるのには時間がかかった。其れまでのハーレム1シェルターは経済的にも薬物にも依存したかたちで成り立っていた。しかし、其れをアルその他のドゥ・ファンドの力で、人々の自立と尊厳を保つために働く現場へと変えていった。今日のシェルターは昔の面影は殆どなく、ここにいる全ての人が自立に向かってそしてその支援に向けて希望をもって働いている。

現在ハーレム1シェルターでは198個のベットがあり、新しく改築された部屋にRWAの参加者が住み、そこから仕事に出かけている。館内はとても綺麗に清掃され、ホームレスシェルター

とは思えない清潔さである。館内での喧嘩や窃盗は殆どないし、アットランダムに行われる薬物テストの結果も全員陰性であることもめずらしくない。

この施設を築いたアルトン・ジョンソンは言うまでもなく高い評価と賛美を受けるに値する人物である。しかし、名声や賛美が彼の求めるものではないということは、彼をよく理解する仲間は知っている。50歳のアルが今心から望むものとは麻薬におかされていない正気、彼の二人の子供(21歳の娘と13歳の息子)、彼の1番愛する仕事、そして有能で幸せな仕事仲間と中毒をのりこえ自立に向けて頑張るRWAの訓練生たちである。その全てをもう一度依存症を克服し自立した事で彼は手に入れることができた。

【ドゥ・ファンド取材後の一言】

この団体の活動をレポートしていく前に他の団体の関係者から「ドゥ・ファンドの就労活動は就労活動じゃない。道端の掃除や建設作業をさせることで、一体何を学べると言うんだ」という批判の声をちらほら耳にした。確かに、ここの就労訓練活動の内容は他の就労活動に比べ原始的な肉体労働が多い。其れゆえに、卒業して就く仕事も決してずっと安定していて高収入で、先がある仕事ばかりだというわけでもない。しかし、いくつかの就労プログラムを見学しておもったのは、ホームレスになった人々が全て高レベルの就労トレーニングに就けるわけではないということ、つまり我々がつい忘れてしまいがちなシンプルな事実、ホームレスだって十人十色なのだということだった。

アメリカの社会学者は、そのホームレス研究から、ホームレス・不就労者の男性の多くがかつて自分達の父親がやっていたような肉体労働について真面目にやっていきたいと思っている言う事実が報告されている。そんな彼らの思いとは裏腹に今日のアメリカ産業は、肉体労働を低賃金、不安定、少ない就職先にしてしまった。そんなかみ合わない二つの現実を前に、ドゥ・ファンドはそんな彼らが出来る仕事として、この就労トレーニングをはじめたことは、決して批判だけではなく一定の評価を与えるべきものだと思った。

「アッパーイーストサイドを頼まれもしないのに、ホームレスに勝手に掃除させて人の目を引く。」という、一見労働力の搾取のようなこの発想も、「ホームレスは社会のごみ」という偏見を打ち砕くには役に立っていることは確かだし、なかなか日ごろ金では買えない名誉を欲しがっているお金持ちの心をくすぐって、ちゃっかり資金を手に入れるところは策略としては成功している。ただ、これが偏見と立ち向かうベストのやり方であるかと言えばそうではない気もするが、生き生きと自分の将来の夢をかたってくれた私が見学で出会った一人一人の訓練生たちの目をみると、果たして本当にこの団体が他の団体の言うような「人種差別の団体」と呼べる自信が私はない。

しかし、あえてこのプログラムの弱点を指摘するなら、ここの卒業生が本当に長期的に自立を継続しつづけてけるのだろうか、ということである。アメリカ産業はこれからもっと実体のない製品の売買に頼った経済となっていくだろうし、グローバリゼーションと呼ばれる現象はアメリカ国内の工場をどんどん海外に移し、低所得者のマイノリティたちが手の届く仕事はどんどん国内から消えていく。そんな現状の中で今のドゥ・ファンドの就労活動はやや長期的なビジョンに欠けているような気がした。

しかし、彼らのスタート地点を考えると長期的プランだけが彼を路上から救出する道ではないということもれっきとした事実である。恐らく、この弱点を乗り越えるにはDCセントラルキッチンのように卒業生がもう一度より高度な就労トレーニングを受けるプログラムをつくることが不可欠なのではないかと思った。

ケース④ コモングラウンド (マンハッタン、NYC)

コモングラウンドはおそらくNYで1番大きな規模の長期型支援住宅を確保し運営しているホームレスの支援団体である。その活動内容は住宅支援から就労トレーニングと幅広く、おそらくこれまで報告した団体の中で最もバランスの取れた活動をしている団体であり、日本のマスコミでも紹介された事がある。

【団体の歴史】

コモングラウンドは1990年に、長年経営が上手くされていなかったタイムズスクエアガーデンの市営の福祉受給者用ホテル¹¹が閉鎖する事が決まった事に対して、取り壊しの反対を要求するために立ち上がった活動家ロザンヌ・ハガットリーさんとその仲間によってはじめられた。このタイムズスクエア市営福祉ホテルをホームレス達のための支援住宅へと改造したのをきっかけに、その後コモングラウンドは市や他の団体から他の老朽建築物(ホテルなど)を引き取り、ホームレスや低収入の人々の為の支援住宅へと改造し、ホームレス問題とマンハッタンの住宅問題に対しに斬新な支援活動をつづけている。

彼らの支援・補助住宅は元ホームレスの人々だけに対象を絞らず、低所得者で住宅問題を抱えている人々も支援対象に含まれており、NYの住宅不足のために困っている人々すべてが清潔で安心して住める住宅施設と環境を作る事を活動目標としている。コモングラウンドは、ホームレスの人々が自立していくため、また将来のホームレスの増加を食い止めるには、住宅サービスのほかに、就労トレーニング・就職紹介サービス、精神・身体の医療サービスといったその他のサービスがなくてはならないという事を運動の基本理念としている。つまり、「部屋を与えるだけが、ホームレスの問題への解決策ではない」と彼らは訴えているのだ。コモングラウンドのホームレス支援サービスはその基本理念に忠実に、住宅・就労・心身のための医療サービスという多様なサービス全てが一つのパッケージになっており、これまでに多くのホームレス及び明日のホームレスである低所得者達を救済してきている。

【コモングラウンドの団体宣言】

我々は安全かつ清潔で安価な住宅のあるコミュニティーを作ることで生まれた非営利団体である。我々は安価で安定した住宅を提供するだけでなく、医療・就労トレーニングといった支援サービスも導入している。我々は住宅や仕事を得るだけで人間がホームレス状態から脱して人生を再建していけると考えていない。彼らがホームレス状態から自立し、社会復帰していくため

¹¹ 福祉受給者用ホテルとは、通常 Welfare Hotel とよばれている施設で、福祉援助を受けている人が安価な料金で短期間(1週間から1ヶ月程度)宿泊できるようになっている。しかしその他の支援サービスは皆無で、殆どの福祉受給者用ホテルは犯罪と麻薬の増殖となってしまっている。

に必要なのは、仕事を見つけるために必要な就労トレーニングのサービス、そして心や身体ケアサービスなどが一つにまとめられた支援サービスプログラムなのである。様々なサービスが一体化した包括的な支援活動こそ、我々、コモングラウンドがホームレスの人々に提供せんとする支援プログラムなのである。

ーなぜ我々の活動はユニークなのか？

① 我々の活動は実用的である。

コモングラウンドでは、社会に存在する貧困のサイクルを止めるように努力がなされている。我々の究極の目的とは、元ホームレスであった人が再び路上に放り出される事無く、ずっと家に住みつづけることが出来るようになる事である。我々はいかにホームレス問題が深刻で複雑な問題であるかを理解しており、常に多様で柔軟な対応をするように目指している。

② 我々の活動は協力の元になりたっている。

我々は同じホームレスのための活動をしている人々、とくにアーバンコミュニティーサービスセンター（CUCS）と協力し合って活動している。CUCSのスタッフは、我々のビルの中にオフィスを構え、コモングラウンドとともにソーシャルサービスをはじめ様々な支援サービスを支援住宅住居者に提供するよう努めている。CUCSのケースワーカーや就労トレーニングのカウンセラーは、我々の支援住宅住居者たちのニーズに耳を傾け、彼ら一人一人に合った支援を提供している。

③ 我々の活動は効果的である

我々は短期ではなく長期の結果を求めてホームレス支援活動を行っている。我々の運営する支援住宅は通勤寮などの通過的住宅ではなく、永久・半永久的に住み続ける事が出来るようになっており、住宅状況がひどいNYの街にでて彼らがまたホームレスに逆戻りをしないように努力をしている。我々の支援住宅は住居者の所得に見合った家賃で運営されている。その運営費は入居者一人につき1年間で10,000ドルという効率の良さで、これは刑務所が入獄者一人に使う運営費の2分の1であり、精神病院が入院患者一人に使う運営費の10分の1にしか過ぎない。

ーなぜ、我々の支援は機能するのか？

①安定

コモングラウンドの3つの支援住宅は、住居者の収入に見合った安価な家賃を設定している。そして、これらの住宅はただ単なる住宅として運営されているのではなく、一つの小さなコミュニティーとして運営されている。住宅に設置されているサービス施設は図書館、医療サービス、コンピュータールーム、美術用アトリエ、音楽スタジオ、そして住居者同士が談話できる広々としたロビーなどがあり、リクリエーション施設は住居人同士が互いに交流し合える場としても活躍している。住居者とスタッフ

はお互い名前呼び合い、「ここに来て自尊心が高まった」という人は少なくない。

②進歩

安定した住宅こそが新しい人生と生活の基盤となる。そして、そこから仕事を見つけて働いてこそ、自立が可能となる。我々の住宅では、就労トレーニング、就職支援活動サービスが提供されており、心身ともに健康な住居者がきちんと働いて自立していけるようサポートするシステムを用意している。一般企業との提携を通し、入居者が先のある安定した仕事につけるようにも常に努力をしている。

③結果に焦点を当てる

コモングラウンドは様々な支援サービスを提供する一方で、サービスを受ける人々に対して彼らが人生に目標を持って、さらに責任と近所づきあいがきちんとできるように指導している。1,850人以上の人々が1991年以来我々の支援住宅に住んでいる。そのうち300人以上が我々の元で就労トレーニングをうけ、就職をしていった。

一新新たなコモングラウンドの活動分野とは

コモングラウンドは、以下の目的をもって活動をしているからである。

- ①より多くの永久支援住宅を作っていけるよう、それにあつた住宅を探しつづける。
- ②ホームレス予備軍の人々とホームレスとなつてしまつた人々との輪をつなげるプログラムを作る。
- ③企業のスポンサーの数を増やす。

原文

We start by creating communities where housing is safe, attractive and affordable. We then add support services, like access to medical and mental health care, job training and job placement. We believe that transitioning out of homelessness requires more than just a home, more than just good health, more than just a job and more than just a supportive community - the entire package is necessary. And that's exactly what Common Ground provides: a comprehensive support system designed to help people regain lives of stability and independence.

Why We're Different

Our work is practical.

At Common Ground, we do not try to reinvent the wheel. Our bottom line is to help the formerly homeless stay housed. Whenever possible, we draw on the knowledge and expertise of others to help us do our work effectively. We

recognize the complexity of homelessness and the need for holistic responses.

Our work is collaborative.

We rely on a network of partners, in particular, the Center for Urban Community Services (CUCS). Their staff, located within our buildings, provides a full range of support services to tenants. By building one-on-one relationships with tenants, CUCS case workers and vocational counselors anticipate tenant needs, and deliver the individualized assistance each individual requires.

Our work is effective.

We offer long term results at a fraction of the cost of alternative responses to homelessness. Our permanent housing programs cost between \$10,000 and \$12,000 per person each year--compared with prison cells at \$22,000, shelters at \$60,000 and mental health institutions at \$113,000 per year.

Why it Works

Stability

Common Ground's three Manhattan buildings offer affordable rents, which are set at approximately thirty percent of a tenant's income. They operate and feel more like small towns than apartment complexes. They are safe and well-maintained. Services and amenities such as a library, clinic, computer center, and art studio as well as gracious building lobbies foster regular interaction with fellow tenants. Tenants say that their self-confidence is increased by the network of contacts that they have with staff and neighbors. They are known by name.

Progress

Stable housing is the foundation on which a new life can be built. Those able to work must learn to compete in a changing workplace. Employment assistance is an integral part of what we provide through the Common Ground Jobs Training Corporation. Working with corporate partners such as Marriott International and Home Depot, we focus on training our tenants for living wage positions with career potential.

Focus On Results

Common Ground challenges individuals to realize their goals and meet high standards of personal responsibility and neighborly behavior, while offering the

support and services needed to succeed. Over 1,850 tenants have been housed since 1991. Over 300 residents of supportive housing in New York City have been trained and placed in jobs through the Common Ground Jobs Training Corporation.

Where We're Headed

Common Ground is focused on these goals:

Identifying sites for additional permanent supportive housing

Developing new programs to link subgroups of the homeless population to stable housing

Expanding the number and involvement of employer sponsors

【自立へのハードル】

—コモングラウンドが指摘する元ホームレスが就職する上で困難な点

ここまでの報告で既に言及したように、アメリカのホームレス達が自立する上で共通した問題は、①住宅、②低学歴・希薄な就労意欲、③麻薬、④精神病、という4点である。その問題のうちどれに重点を当てるかは各団体の基本理念や団体の成り立ちによって少しずつ異なるが、共通しているのは、この4点を押さえないことにはホームレス問題の解決は不可能だと認識していることである。

これまで報告をしてきた団体の中で、コモングラウンドは特に住宅面において斬新な活動をしている団体である。コモングラウンドが指摘する「ホームレスが職に就き、自立するために最も困難な問題」とは、「安定した住宅の確保」である。後で詳しく述べるが、NYの住宅問題は、ホームレスに限らず一般市民にとっても深刻な問題である。6畳程度の大きさのワンルームマンションがマンハッタン市内では1,500ドル～2,000ドル（15万円～20万円）が平均と言うのだから、低所得者の手の出る住宅は殆どないに等しい。ホームレス達の自立支援活動をしていくうえで直面する問題は、まず「住宅の慢性的な不足」、つまりホームレスや低所得者たちを収容するだけの住宅スペースがNYには存在しないという事実である。

「存在しない住宅スペースをどうやって確保するのか？」この難解な問題に対して、コモングラウンドは老朽化した市内の建造物に目をつけた。経営不振のため倒産したホテルやその他のビルを市やオーナーから引き取り、それらの建造物を寄付と公的支援によって改造し、支援住宅にしていくことにしたのである。しかし、それでもスペースには限りがあり、今彼らが持っている支援住宅だけで市内のホームレス全体を収容できるわけではない。また、彼らの住宅はホームレスシェルターと違い無料ではないため、ある程度の自立をしていないことには¹²入居できない。一

¹²ここでいうある程度の自立とは、仕事をもっており自活ができるということである。彼らの支援住宅の入居者規定は

般社会に復帰して、家賃を払い自活していけない人々（精神障害者、長期路上生活者、老人）が住める場所は、コモングラウンドでもまだ十分に確保できていないのである。

また、ドゥ・ファンドの報告で既に述べたように、市内には元ホームレスの人々が就職していく低レベル技術で高賃金といった仕事を見つけることが大変難しい。たとえ依存症を絶ったとしても、大都市NYで仕事を見つけ、住宅を確保していくことは簡単なことではないのである。

【コモングラウンドのプログラム】

【I】 就労トレーニングプログラム

【活動の概要と目的】

「ホームレス問題の解決に必要なのは、無料の衣食住配給だけではない」という考えの元にコモングラウンドの就労トレーニングプログラムは運営されている。コモングラウンドが運営する支援住宅及びその他彼らと提携をしている60以上に及ぶNY市内ホームレスシェルターや他団体の支援住宅に住む元ホームレスの人々を対象に、このプログラムはこれらの人々が安定した仕事に就職して自立していける手助けをしている。この点はドゥ・ファンドのプログラムと類似しているが、ドゥ・ファンドの住宅施設はシェルターと通勤寮であるのに対し、コモングラウンドの住宅施設は(半)永久的に住めることになっており、また就労トレーニングの内容もドゥ・ファンドと微妙に違っている。

コモングラウンドの就労トレーニングセンターは、“コモングラウンド・ジョブトレーニング・コーポレーション（CGJTC）”と呼ばれ、彼らが所有・運営するザ・タイムズスクエア支援住宅内に設置されている。CGJTCはコモングラウンドのパートナーであるアーバンコミュニティーセンター（CUCS）と共同で、給与が支払われる就労トレーニングであるJET（Job Experience Training）や短期集中就労トレーニング、および職業カウンセリング、就職説明会、専門技術講習、そして個別就職案内といった就職に関連した多様なプログラムを参加者に提供している。この就労トレーニングの目的は、参加者の多様なニーズに見合ったプログラムを提供し、一人でも多くの参加者が競争率の高い就職市場で積極的に仕事を見つけ、自立していくことを支援する事である。

【参加資格】

このトレーニングは、コモングラウンドが運営する支援住宅の住人達の為に基本的には設置されているので、参加者の殆どは支援住宅の住人である。しかし、ここに住人でなくてもコモングラウンドが提携関係を結んでいる他のホームレス支援団体やホームレスシェルターからの紹介があれば、誰でも参加することができるようになっている。

詳しく後述する。

基本的な参加資格は、まず i) 麻薬やアルコールを最低 6 ヶ月以上服用しておらず、依存症を絶ちきるライフスタイルを継続する意志があり、その努力をおこなっていること、さらに ii) プログラムを継続して参加していける状況にあること(衣食住が福祉かその他の援助によってある程度生活が安定している事) の二つだけで、その他年齢や性別の制限などは一切ない。

ただ、依存症のリハビリ施設や精神病の特別施設などはないため、重度の依存症や心身の障害を持つ人は基本的に参加するのは難しい。既に述べたように、参加者は原則としてコモングラウンドの支援住宅の入居者ということになっており、その他にはコモングラウンドと提携している他のホームレス救済活動団体及びエージェンシーからの紹介が無ければ参加できない。

参加者の殆どがマイノリティで、年齢は 40~50 代前後で、何らかの身体障害(殆どは薬物やアルコールの依存症、あるいは精神病)を持っている人が多い。また、参加者の大半が公的な福祉援助を受けている人々で、元ホームレスであった人たちである。中には、不就労のためホームレス状態になりかけている人もいる。参加者は女性が多いが、トレーニングの内容は男女両方を対象にしているため、女性が圧倒的に多いと言うわけではない。

[給与手当]

短期間の就労トレーニング(2~7週間)は給与が支払われないが、就労トレーニングのうち長期間のもの(4~5ヶ月間)に関しては、実務トレーニング参加時間に対して5ドル60セントの時給が支払われる。トレーニングの参加時間は週25時間なので、月々560ドルの給与が支払われる事になる。長期間のトレーニングの参加者はこの給与のほか福祉援助(メディケア、食料配給券)を受ける事ができるので、福祉援助とトレーニングからの給与とで参加者は生活を支える事になる。参加者の中には身体障害者手当の中に家賃の免除が含まれている人もおり、家賃を支払わなくてもよい場合があり、これだけの収入でも贅沢は出来ないが十分生活を送る事は可能である。

また、コモングラウンドの就労トレーニングは行政が福祉受給者に義務付けている就労トレーニングと同様のものと見なされるため、コモングラウンドのトレーニングに参加して給与を受け取っても彼らの福祉受給に支障をきたさないことになっている。

[規則とカリキュラム]

①規則

麻薬に手を出さないことが参加の鉄則である。そして指導員の指導に必ず従う事。その他は参加時間を必ず守ること(遅刻・無断欠席・長期欠席しない)など。3回以上の規則の違反者はプログラムから除名される事になる。

②カリキュラム

コモングラウンドの就労トレーニングは4種類あり、内容は其々異なる。i) ~ ii) のトレー

ニングは短期のため給与手当ではないが、iii)～iv)は長期間にわたる訓練のため給与手当がつく。トレーニング期間の長さに関わらず、就労トレーニング参加者全員が10回にわたって行われるオリエンテーションならびにトレーニング中ずっと続けられるコアトレーニングというライフスキル(生活基礎能力)の授業に出席しなくてはならない。オリエンテーションは月曜から金曜日まで毎日あり、2週間続く。オリエンテーションでは、就労トレーニングの内容・規則などが、こと細かく説明される。コアトレーニングプログラムは、社会で通常生活していくために必要な常識、マナー、対人関係のこつ、それから仕事場で必要な価値観、マナー、エチケット、勤務態度、仕事を続けていくための努力の仕方、ストレスの対処の仕方などが指導される。また、訓練生は職業カウンセリングを受けなくてはならず、これについては後で説明する。

i) カスタマーサービス就労トレーニング (2週間)

これは、コモングラウンドと提携を結んでいるホームディポーターという材木や造園・園芸用品専門の大型スーパー、そしてその他の大型スーパー(日本でいうダイエーやコーナン)のカスタマーサービスのポジションに就くため、お客さんのクレームの対応や接客の仕方を学ぶプログラムである。プログラム提携会社のホームディポーター社は、このプログラムの卒業生を優先に採用することを約束しており、この会社のカスタマーサービスの仕事は時給が良い上に(9ドルから10ドル以上)、諸手当がついており、会社の株を買うチャンスも与えられている。

ii) ホテル接客業プログラム“Marriot International’s Pathways to Independence”(7週間)

これは、将来一流ホテルで就職できるよう、ホテルでの接客指導が行われるプログラムで、マリオットインターナショナルがスポンサーをしており、「マリオットインターナショナルズ・パスウェイトゥインディペンデンス」という名前がついている。このプログラムでは参加者はホテルのドアマン、受付、ルームサービス、といった仕事をきちんとこなせるよう接客マナーなどを学習することになっており、このプログラムの提携パートナーであり、スポンサーのマリオットホテルインターナショナルは、卒業生の就職口でもある。このプログラムの卒業生はマリオットをはじめ、その他NY市内の様々な一流ホテルの仕事に就いている。これらの仕事は高給のうえ手当がしっかりついており、昇進のチャンスもあるため(海外勤務も可能)、就労トレーニングを受ける人々の間でとても人気が高い。毎回、トレーニング参加定員11人という限られた窓口に、80人以上の応募者が殺到するという。

iii) 調理就労トレーニング“Neighborhood Kitchen”(5ヶ月)

DCセントラルキッチン ロバートエガー氏が「コモングラウンドにうちと同じシステムを導入するよう奨めている」と言っていたので、おそらくこのトレーニングのアイデアはDCセントラルキッチンから来ているのだと思う。実際、プログラム内容は、規模は小さいがDCセントラルキッチンのそれと類似している。ただ、食材の救済活動などはされておらず、このプログラムではタイムズスクエア支援住宅内のカフェテリアのシェフにより基礎的な調理技術のほかにサー

ビスの仕方の指導などが行われている。このプログラムの卒業生の多くがタイムズスクエア周辺企業のカフェテリアなどへ就職している。このプログラムに参加する訓練生が作った食事は、N Y市内の非営利団体やホームレスのシェルターなどに配給されているが、D Cセントラルキッチンのような大規模な配給活動は行っていない。またケータリングサービスなどおらず、あくまでも調理とサービスの指導のみが行われている。

iv) オフィスワークトレーニング&ビル管理整備就労トレーニング（6ヶ月）

このプログラムでは、オフィスでの一般事務の仕方やビルの整備作業の仕方などが教えられる。このプログラムは先に紹介した短期間の就労プログラムと違い給与手当が出るので、タイムカードをきちんと作って実際の職場と同様スーパーバイザーに提出しなくてはならず、それをしていないものは給与をもらえない。また残業は一切してはいけない事になっている。

プログラムの基本的なスケジュールは、午前中はコアトレーニングに出席し、生活能力・一般常識などの授業を受け、昼からは実務をふくむ就労トレーニングをするというもので、就労トレーニングの内容は、オフィスワークかビルの整備・清掃のどちらかとなっている。どちらを選ぶかは個人とケースワーカーが相談して決められる。

オフィスワークの場合はコンピューターの使い方、ファイリングの仕方、電話の対応の仕方などが教えられ、毎日一般企業や各種団体のオフィスで一般事務をしていくために必要な能力と知識が教授される。このトレーニングは若い、あるいは中年の女性・男性に人気がある。ビルの整備・清掃に関するトレーニングは、コモングラウンドのビル整備士が指導にあたり、基礎的なビルの整備技術を指導する。技術者として免許を取れるほどの専門技術や知識をこのトレーニングを通して得るわけではないが、一般的なビルの管理・整備のための従業員としての仕事は処理できるようになる。また、もしここで指導する以上の技術を学びたい人がいる場合は、他の団体へ紹介する事もここではできる。このトレーニングを受ける人の多くは男性である。ビルの清掃や管理は、人とのコミュニケーションをあまり要しないので、特にホームレス歴が長かったり、長期の投獄生活を送った人で対人関係がうまくできない人がこのトレーニングを受ける事が多いという。

[職業カウンセリング]

職業カウンセリングは、就労トレーニングの中で最も大切なプログラムで、既に述べたように就労トレーニング参加者全員が受けなければならないことになっている。参加者は職業カウンセラーと定期的に面会し、訓練で何か問題がないかどうか話し合われる。さらに、カウンセラーは参加者が受けているトレーニングの指導講師とも面談し、訓練生が問題無くトレーニングを受けているかどうかチェックをする。もし何か問題があった場合、カウンセラーは参加者や指導教官と話し合い、問題の解決のための仲介役を務める。よく起こる問題はホームレス状態の間に身につけてしまった自己中心的な考え方のせいで、他の訓練生と上手くやっっていけない、指導教官の指導を聞けないなどである。このような問題があった場合、職業カウンセラーは訓練生と面会し、

それらの性格上の問題を訓練生が乗り越えていけるよう根気良くカウンセリングにあたることになっている。

さらに、カウンセラーは訓練生が受けているトレーニングが彼らに本当に合っているかどうかを綿密にチェックし、訓練生達がそれぞれのニーズと関心に見合った職業訓練を受けられるようにコーディネートをする。たとえば、訓練生が求めている職に対し、彼らの学歴が見合っていない場合はきちんと彼らがそれなりの教育を受けられるよう、専門の団体に紹介したりすることもある。

職業カウンセラーはコアトレーニングの講師として、彼らがどうすれば仕事を失うことなく自立しつづけていけるかなどの生活・就労姿勢や仕事への価値観に関する指導にもあたることになっている。これらの職業カウンセリングはグループで行われる事もあれば、訓練生と一対一で行われる事もある。

また、カウンセラーは、訓練生の就労・自立能力がきちんとついているかを定期的に査定し、就職活動を開始出来る準備が出来ているかどうかを判断しなくてはならない。就職していけると判断された訓練生は、2ヶ月から3ヶ月間にわたる就職活動を職業カウンセラーと共にはじめる。この間、履歴書の書き方、面接の受け方、難しい質問（依存症や前科についての質問）の対応の仕方などが職業カウンセラーやケースワーカーによって指導される。

プログラム卒業基準は、①職業カウンセラーときちんと定期的に面接をしていること、②週20～25時間、5日間の就労トレーニングを規則違反なく修了していること、そしてこの期間内に少なくとも4ヶ月間の実務トレーニングを修了して、トレーニングの成績が優秀であること、③ライフスキルトレーニングの授業にきちんと出席していて、その成績が優秀である事、④職業カウンセラーと共にきちんと就職活動をし、仕事を見つける努力をしていること、などである。

これらの基準を満たした訓練生はプログラムを卒業し、就職していく。訓練生がプログラムを卒業した後、カウンセラーは6ヶ月間卒業生と彼らの就職先の雇用者と連絡を取り合い、きちんと卒業生が仕事を続けられているかどうかチェックする。もし問題があった場合は、カウンセラーは仲介役となり問題解決に向けて双方と話し合いをすることになっている。また、卒業生がさらにステップアップするため他の仕事を探したい、あるいは転職をしたいと言う場合の相談に乗ったりするのもカウンセラーの仕事である。卒業生には卒業後もライフスキルトレーニングの授業に出るように奨励し、彼らが問題無く社会に順応し、自立をし続けていけるようにする支援するようにカウンセラーは補助している。

職業カウンセラーは、コモングラウンドとアーバンサービスセンターのスタッフが勤めている。

[II] 支援住宅プログラム

[プログラムの概要と目的]

アメリカの都市部の住宅問題は二種類ある。一つは市内のスラム化、そしてもう一つは異常な

までに高い私営住宅賃貸料である。これらの問題に対応するために設置されたコモングラウンドの支援住宅プログラムの目的と内容を理解するには、まずこの両極端なアメリカ都市部の住宅問題とホームレス問題との関係を理解する必要がある。

1937年、アメリカ政府は新しい公営住宅法を制定した。この新しい法律は下層階級の人々の住宅状況を改善するために公共住宅の数を増やす目的で制定されるはずだった。しかし、公営住宅が増える事によって私営住宅の値段が下がる事をおそれた都市の不動産の実業家や政治家たちは、政府にプレッシャーをかけこの法律の当初の目的をゆがめてしまった。その結果、制定された法律は「新しい公営住宅を一件作るたびに、古い老朽公営住宅をつぶすことによって公営住宅の質を向上させる」という内容となってしまう。

この法律の制定後、老朽化の進んだ公共住宅は新しく改善されることになり、建設現場が増え市内の低賃金の仕事を増やす事が出来た利点もあったが、その一方で公営住宅の数は増加しなかったため私営住宅の競争相手になれず、私営住宅の賃貸料は頭をうつことなく上がっていった。最終的に、この法律は公営住宅と私営住宅の賃貸料の格差を大きく広げてしまい、低所得者を公営住宅あるいは悪質な市営住宅へと閉じ込めてしまった。

1949年、公営住宅法は再度改善されるが、またしても低所得者の住宅不足を解消するという内容のものではなく、都市で増加するホームレスとスラムを一掃することを目的に制定される。この新しい公営住宅法により、公営住宅の入居資格である所得設定は厳格化され、超低レベル所得者のみが公営住宅の入居を認められる事になり、公営住宅に入れなかった他の低所得者たちは値段の跳ね上がってしまった私営住宅に入居できるわけも無く、スラムや市内周辺の条件の非常に悪い住宅や荒廃したスラムに移り住むことを余儀なくされる。(参考資料：J・ウィルソン“*When work disappears*”)

1950年代と60年代、アメリカの都市部の産業は殆ど郊外に移動したとホームレス問題との関係はこの報告書のほかのところで既にのべた。この産業構造の変化は、すでに住宅状況が悪化して経済的に苦しんでいる低所得者達を襲ったのである。こうした公営住宅状況の悪化と産業構造の変化は、アメリカの都市部における貧富の差を大幅に拡大させてゆき、1970・1980年代の麻薬・エイズの浸透は社会的に弱りきっている都市部の貧困層を半死半生状態においやった。すでに荒廃状態にあった市内の低所得者地帯を一挙にスラム化させ、都市部のホームレスの数をどんどん増やしていったのである。

この複雑な歴史背景と現状をふまえ、コモングラウンドはホームレスの住宅問題を解決するには通勤寮などの通過的住宅ではなく、彼らが安心してずっと住みつづけることが出来る支援住宅が確保されなくてはならないと主張をした。特に、コモングラウンドの活動拠点であるNYマンハッタンの住宅市場は需要の方がつねに大幅に上回っている上に、私営住宅の賃貸料はべらぼうに高い。低所得者達が賃貸できる安全で清潔な私営住宅など皆無に等しいと言っても過言ではない。ホームレスを通過的住宅に入れて経済的な自立を援助しても、彼らがその先引越していける安定した住宅が慢性的に不足しては、彼らはまたホームレスになりかねず悪循環を繰り返してしまうことになる。この問題意識のもとに、コモングラウンドは、他にはあまり例のない終

身制、つまり(半)永久住居型の支援住宅の運営と建設に取り組んでいる。

また、住宅だけがホームレスの問題の原因ではないと言う事をよく理解している彼らは、住宅の中に就職支援活動サービスをはじめ、その他医療・カウンセリング・ソーシャルワークなどのサービスを設置し、支援住宅を単なる建物としてではなく一つの小さな町として発展させ、社会的に孤立しがちな低所得者・元ホームレスの人々が必要とする情報、サービスが常に彼らの身近にある環境を作り出していった。この点において、コモングランドの住宅サービスは斬新かつ効果的であるといえる。以下にこれらの多様なサービスと住宅ニーズを統合して作られたかれらの支援住宅の詳細を報告する。

①ザ・タイムズスクエア

タイムズスクエアは、コモングランドが手がけた最初の住宅である。タイムズスクエア支援住宅は、元々1923年に長期滞在型のホテルとして建設されたが、その後経営者が何度も変わり経営は不振におちいり1980年代にはホテルとしての機能はまったく果たさなくなった。その後ホテルは経営の悪化のため、ついに市に引き渡されることになる。市が引き取ってから市営の福祉受給者用の短期ホテルとして使われるがその管理は殆どなされなかったため、一度は華やかな観光客用のホテルとして繁栄したホテルはホームレスで溢れ、麻薬と犯罪の巣と化してしまった。

1990年、ついに市はこのホテルを取り壊す事を決めるが、それに反対した地元の住宅問題の活動家達の努力によって、取り壊し事業は取り消されることになる。このホテルをホームレスと低所得者の支援住宅へと改造するためにコモングランドは生まれた。

その後公的資金援助と私的な寄付を元に、ついに1994年ホームレスと低所得者達が様々な支援サービスを受けながら(半)永久的に住むことが出来る支援住宅へと生まれ変わった。総開発費は3千2百万ドル(約35億円)で、公的資金と寄付から成り立っている。

【住宅内の諸サービス】

ーコミュニティとしての支援住宅を目指して

ザ・タイムズスクエア支援住宅は、現在、全部屋独身者向けの部屋が652部屋あり、各部屋に小さな台所、お風呂、トイレ、冷暖房がついている。全部屋、ベッド、引出、キッチンコンロ、冷蔵庫など必要な家具は全てそろっており、部屋の大きさは日本で言う大体7畳～8畳ぐらいの大きさで、正直言って私が以前住んでいた学校の寮などに比べるとはるかに広くて綺麗だった。

住宅の中にあるサービスは以下の通りである。

i) 就労トレーニングサービスセンター

就労・就職に関する全てのサービス機関であるCGJTC(Common Ground Job Training

Center) のオフィスがタイムズスクエア住宅の中に設置されており、住人あるいは他の諸団体から紹介されてきた人々が、明日の自立を目指し就労トレーニングをここで受けている。もちろんここは通過住宅ではないので、仕事を見つけた後も収入が入居規定を超えない限りここに住み続ける事が出来る。(入居規定後述)

ii) 医療サービス

医師は常勤していないが正看護婦が朝 8 時から夜 8 時までおり、住人の健康に関する相談にのっている。

iii) ソーシャルワークサービス

コモングラウンドのパートナーであるアーバンコミュニティサービスセンター (CUCS) は福祉、公的補助手当などの受給などに関する相談サービスを中心に行っている団体で、CUCS とコモングラウンドのソーシャルワーカー達が月曜から土曜、朝 8 時から夜 8 時半まで常勤しており、住人が持つ問題の管理、精神病治療サービス、患者が危機的な状態になったときの介入、他の施設への紹介、情報提供など、それから建物全体のコミュニティづくりなどのサービスが提供されている。

iv) リクリエーションサービス

タイムズスクエア住宅の各階には様々なリクリエーションルームがあり、その内容は図書館、コンピュータールーム、家庭科室 (ミシンが置いてあり編物や縫い物が出来る)、音楽室、美術用アトリエなど実に多種多様である。最上階にはカフェテリアがあり、パーティなどもここで行えるようになっている。カフェテリアでは住人やオフィスで働くスタッフ達が安い値段で栄養のバランスの取れた朝食と昼食を食べることができる。

さらに、CUCS との協力を得ながら、コモングラウンドのテナント・サービス部門は、これらのリクリエーションルームを使い、教育、芸術、健康、フィットネスの分野で様々なプログラムを行っている。住人たちの生活の質を向上させ、独立・自立するための必要な技能を身に付けさせるために、授業・レクチャーを開いたり、映画上映会・アウトドアイベントを行ったりと、様々なイベントが定期的に行われている。月ごとの行事予定の載った月間スケジュールや、ニュースレターなども作成され、建物内のコミュニティの活性化を図り、また、住人に建物外のニューヨークの市内で行われている様々な行事へも目を向けさせる努力も為されている。

v) その他

住人への直接のサービスではないが、タイムズスクエア住宅のロビーとメザニン・レベル (中 2 階) は元のルネッサンス調の輝きを保ちたいへん美しく、建物は歴史的遺産として登録されている。中二階には地元や住人の芸術家たちの作品を展示したりしており、現在は写真家の個

展を開く予定がある。また、最上階の 15 階のリクリエーションルームはイベントスペースとして結婚式や企業・団体のパーティー会場などとしても活用されており、その売上はコモングラウンドの活動運営資金にあてられている。

ザ・タイムズスクエア支援住宅は、その目的通り単なる住宅施設というより一つのコミュニティーとして機能していると言って良いだろう。

【入居者規定と規則】

- ① 単身者であること
- ② 収入：申し込み者の年収は最低 12,000 ドル（130～140 万円）以上あり最高 28,500 ドル（約 300 万円以下）でなくてはならない。タイムズスクエアの支援住宅は政府の低所得税のガイドラインに沿って入居資格の収入規定を定めている。ただし、市や州の役所からの紹介があったものは年収が 12,000 ドル以下であっても入居が可能な場合がある。
- ③ 個人資産（土地等の財産、貯金などで衣服や車などは含まれない）が 5,000 ドル以上ないこと。
- ④ セクション 8（賃貸料補助）を行政から受けている場合は申し込みの際にそれをコモングラウンドに申告しなければならない。
- ⑤ フルタイムの学生は入居できない。
- ⑥ ペットは一人の住人に対し一匹だけで、きちんと予防接種を受けさせ他の住人に迷惑をかけるないようにしなければならない。
- ⑦ 他の住人のプライバシーを守ることができなくてはならない。
- ⑧ 精神病、身体障害、エイズ、犯罪前科、および元ホームレスの人々が住人の中にはおり、その多様性を尊重しなくてはならない。

【入居審査とプロセス】

全ての申込書は厳密にチェックされ、規定を満たした申し込み者は 3 回にわたるインタビューを受けなくてはならない。最後のインタビューは申込者が現在住んでいるところで行われる。現在、空室はないため今申し込みをしても直ぐに入居はできないが、いつ入居できるかどうかは電話や手紙でチェックできるようになっている。

【住人構成】

ー住宅はニューヨーカーのコモングラウンド

住人の構成は大変ユニークである。まず住人の半分は元ホームレス、高齢者、元麻薬中毒患者、精神病患者、エイズ患者、H I V感染者などで構成されている。そしてその他の半分は、元ホームレスでない低所得の人々で、その中にはブロードウェイの近くに住むことを希望する多くの（まだ）無名のダンサーや役者、芸術・音楽家、あるいはそうなることを目指して活動している

人たちもたくさんいる。

他の支援住宅では見られないこのユニークな住人構成は、ホームレスの支援住宅が一般社会とのつながりを失い隔離されないようにするという目的意識と、「住宅問題はホームレスに限らず、全ての低所得者達の問題である」という考えから来ている。先に述べたようにNYの住宅問題は深刻で、仕事があっても働いていても常に安定した住居を確保できるわけではない。そんな明日のホームレス予備軍でもある低所得者たちに支援サービスを提供する事によって、将来のホームレスを予防すると同時に、社会から逸脱したホームレスの人々と自分の夢に向かって生活する低所得者の人々たちの間に「住宅=家」というつながり(コモングラウンド)を生むことができるとコモングラウンドは考える。実際、コモングラウンドの支援住宅では住人の為に様々なイベントが企画されており、バックグラウンドの違う住人達の交流が生まれる機会を作っている。これらの交流活動を通じて、今まで互いの人生が交差する事が無かったバックグラウンドのまったく違う人同士の出会いが芽生え、それらの出会いを通じて元ホームレスの人々は社会とのつながり、ホームレスではない人々は「ホームレス」という社会問題に対する認識を深めていっている。

②ザ・プリンスジョージ

ザ・プリンスジョージもザ・タイムズスクエア同様、コモングラウンドが所有・運営する支援住宅である。ザ・プリンスジョージは、高級ホテルとして1904年建設されるが、1970年の観光不況の波にのまれ経営は悪化し、1980年にはニューヨーク市からの基金により、ホームレスの家族を受け入れる施設となった。ピーク時には、合計で1600人もの女性・子供を受け入れるが、あまりの混雑と運営の不備から、ザ・プリンスジョージはザ・タイムズスクエアと同様に次第に混沌と犯罪の巣窟となってしまった。1990年に入り建物は、誰も手を施すことができなくなり、そのまま見捨てられた状態になってしまった。

1994年後半になって、ザ・タイムズ・スクエアでのビル再建の経験を基に、コモン・グラウンドがザ・プリンス・ジョージの終身制の(半)永久型支援住宅への再建を提案し、権利獲得のための長いプロセスを経て、ついに1998年コモングラウンドは所有権を獲得、復興工事を始めることになった。現在、殆どの内装は修理され、今年あるいは来年までには再建は完成する事になっている。

ザ・タイムズスクエア同様にプリンス・ジョージは低所得者、特別な助けを必要としている人、そして元ホームレスだった人々のために416部屋を提供している。プリンスジョージ住宅でもタイムズスクエア住宅のように、コモングラウンドはアーバンコミュニティセンター(CUCS)と提携関係を結び、現場でのサポートサービス、コミュニティづくりのためのサービス・プログラムを提供している。プログラムの内容はザ・タイムズスクエア住宅とまったく同じで、唯一違う点は、就労トレーニングのサービスセンターがないと言う事だけである。しかし、プリンスジョージ住宅の住人もタイムズスクエア住宅の住人同様にタイムズスクエアの就労センターで就労トレーニングを受けることができる。(プリンスジョージ住宅からタイムズスクエア住宅までの距離は歩いて25分、地下鉄で8分程度で、そんなに離れてはいない)

プリンスジョージ支援住宅の入居資格規定はタイムズスクエアのものと大体同じであるが、収入の規定がややタイムズスクエア住宅より高くなっている。プリンスジョージ住宅の入居者の最高年収額規定は 30,000 ドル（310 万円前後）、最低年収額は 15,000 ドル（160 万円前後）で、タイムズスクエア住宅と比べ約 1～2 割ほど高い。これは、プリンスジョージ住宅の部屋の大きさがタイムズスクエア住宅のそれよりも若干大きく、新しい為だと思われる（プリンスジョージの部屋の大きさは 9 畳から 10 畳程度）。それ以外は部屋の内装・設備はタイムズスクエア住宅のものと殆ど同じである。

タイムズスクエア住宅同様に、コモングランドのサービス部門は CUCS との協力を得ながら、ここでもリクリエーションルームを活用し教育、芸術、健康、フィットネスなどの様々なプログラムを行っている。住人たちの生活の質を向上させ、独立・自立するための必要な能力を身につけるための授業・レクチャー、映画上映会・アウトドアイベントもここでも活発に行われている。また月ごとの行事予定の載った月間スケジュールや、ニュースレターなども作成され、建物内のコミュニティの活性化を図っている。また、住人に建物外のニューヨークの市内で行われている様々な行事へも目を向けさせる努力も為されている。タイムズスクエア住宅同様、住人同士の交流の機会が持てるようなイベントなども企画され、タイムズスクエア住宅と同様多様な人々の「つながりの場(コモングラウンド)」として機能するよう様々な努力がプリンスジョージでもなされている。

プリンスジョージ住宅の最上階(ペントハウス)は、コモングラウンドのセントラルオフィスとコモングラウンドのパートナー、アーバンコミュニティセンターのオフィスがあり、住人達のケースワークやソーシャルワークのサービスがここで行われている。その他、最上階には広々としたイベントスペースがあり、イベントスペースの壁は住人達が芸術工作の授業で作ったタイルを用いてデザインされておりとても綺麗な場所である。ここは結婚式の披露宴など各種のパーティ・スペースとしてニューヨーカーたちに提供され、その売上は活動資金に当てられている。

プリンスジョージ住宅の 1 階ロビーは再建活動によって高級ホテルだった当時の美しさを取り戻し、超一流ホテルと引けを取らない美観を保っている。ロビーの奥には住人のためのカフェテリアがあり、見学させてもらったがその美しさには思わずため息をついてしまうほどである。さらに、ロビーの横のボールルームは貸店舗として運営されレストランが入る予定である。そのレストランはコモングラウンドの職業訓練プログラム卒業生の新たな就職口になることも決まっている。

現在この建物は歴史的建造物としての国の認可を受け、歴史的な建造物（特にロビー、ボールルームなど）復興のための特別な税金の適用を受け、民間からの資金を取り付けることもでき、それらの資金援助によって再建がなされた。総開発費は \$40,000,000（約 44 億円）である。

③ファーストステップハウジング

ホームレスの支援活動を通じて、コモングラウンドはホームレスの中には様々な理由によって、

彼らが提供する就労支援プロジェクトやカウンセリングを受け入れられない人々がいるということに気が始めた。ホームレスと一口にいってもそれぞれ様々な理由でホームレスになり、多様なかたちでホームレス状態をすごしており、一人一人違ったニーズをもっている。そのため全てのホームレスが同じ方法で救済されるわけではないのである。その事実気付いたコモングラウンドは、「サービスレジスタント（支援サービス拒否）」のホームレス達が宿泊できるシェルターや路上よりもサービスの整った安価な宿泊施設を開発する事にした。ファーストステップ住宅はそんなホームレスの人々を支援するための短期宿泊施設で、現在開発途中にある。

これはタイムズスクエア住宅やプリンスジョージ住宅と違って（半）永住型の住宅ではなく、短期滞在型の宿泊施設をめざしており、清潔で安い値段で提供することになっている。この施設は、「サービスレジスタント（支援サービス拒否）」のホームレス達、あるいは他のプログラムで拒否された、あるいは努力をしたが上手く自立できなかったホームレスの人々を対象としている。

現在コモングラウンドでは、路上やシェルターで寝泊りしているホームレス達とのインタビュー調査に基づいて彼らのニーズが満たされるサービスを提供できるよう細心の注意を払ってこの施設の開発をつづけている。将来、ファーストステップハウジングは清潔で安全で、かつ安く（一泊 10 ドル）小規模でプライバシーのある短期の宿泊施設として、（半）永久住宅に入れない、入る事を拒否している人々の為に運営されていく予定である。この宿泊施設のなかに他の住宅・職業案内などのサービスの他、医療・依存症のリハビリ治療のサービスも設置していくことを計画している。

【Ⅲ】 産業の開発

タイムズスクエアといえば、マンハッタンで最も人気のある観光スポットで、人通りがとても多い繁華街である。その土地柄を利用したビジネス活動もコモングラウンドは行っている。

①貸店舗

プリンスジョージ住宅の1階がレストランとなり、就労トレーニング訓練生達の就職先になることや住宅の最上階のイベントスペースが一般に提供されその売上は運営資金とされていることは既に述べた。その他に、コモングラウンドの支援住宅では住宅の建物の一角（1階や地下）を一般企業に貸し店舗として提供し、その賃貸料はコモングラウンドの活動資金となっている。また、ただスペースをテナントに貸すだけではなく、そのテナントとなった店がコモングラウンドの就労トレーニングに参加している人々の就職先になるように、テナント企業に卒業生の雇用を義務付けている。ザ・タイムズスクエアに入っているテナントは、コピーショップのスターボックス、アイスクリーム店のベン&ジェリーズ、ホットドッグ店、ジュースとホットドッグを売っているパイヤキングなどがある。スターボックスとパイヤキングは彼らの店のスタッフの25%のポジションを、コモングラウンドの卒業生を採用してうめていくことを約束している。

②ベン&ジェリーズパートナーショップ

コモングラウンドは、人気アイスクリーム会社ベン&ジェリーズの小売店「ベン&ジェリーズ

スコープショップ」をタイムズスクエア、ロックフェラーセンター、ブライアントパークのキオスクで運営している。これらの店舗はベン&ジェリーズ社との提携のもと、コモングラウンドが直接運営しているため、売上は活動資金となり、コモングラウンドの卒業生が店舗のスタッフとなって働けることになっており、卒業生の就職口の拡大にもつながっている。

【コモングラウンド取材後の一言】

コモングラウンドは今まで紹介してきた活動の中で、最もアメリカのホームレス問題のことを理解している団体だと思った。全米には星の数ほど大小沢山のホームレス支援団体があり、その多くが包括的な活動内容を目指している。しかし、本当にそれを行っている団体はとても少ない。コモングラウンドはそれをきちんと行っている団体の一つだと言える。

代表者で創始者でもあるロザンヌ・ハゲットリーさんは日本にもきて釜が崎の活動家とも交流をしたこともあるという勉強熱心な活動家である。恐らくこの団体の活動は、既に日本の皆さんも知っておられるのかもしれないと思ったが、その活動の質の良さからあえて紹介する事にした。

この団体の魅力はなんといってもホームレスの多様なニーズを理解し、それに見合ったサービスを生んでいこう常に努力している点と、ホームレスとそうではない人々とのつながりを大切にしている点である。ただ、あえて弱点を指摘するなら彼らの支援活動はホームレスの中でももっと弱い立場の人々たちに支援の手が届きにくいと言う事である。ホームレスの人が皆、コモングラウンドの支援住宅に入居できるほど自立への準備が出来ているわけではない。しかし、このコモングラウンドのすごいところは、この弱点にすばやく気付いてファーストステップハウジングを開発しているところで、「お見事」と言うしかない気がした。

事例調査を終えて・・・

これらの団体の取材をしてみて、一口にホームレス問題といっても、その問題に対する支援運動の仕方は多種多様で、沢山のクリエイティブな運動が繰り広げられているというが良く分かった。私は日本やアメリカのホームレスの専門家でもなく未熟な一大学院生でしかいないため、「アメリカのホームレス団体の経験から日本が学ぶべきものは何か」というような大それた事を言える立場ではない。しかし、これらの団体の活動を調べてみて私自身気がついた事柄や関心をもった事などのなかに、もしかしたら日本のホームレス問題の識者である読者のみなさんの役に立つことがあるかもしれないと思ったので、それをまとめてこの報告書の結語にかえようと思う。

これら4つの団体に実際足を運び、自分の目と耳で彼らの活動を見聞してみて、一見資料の上ではおなじような自立支援活動が行われているように思えるが、実はそれぞれ違ったコンセプトの基で運営されているという事がよくわかった。また、全ての団体に共通した点も少しずつ見えてきた。まず共通している点からいうと、全ての団体が「衣食住の無料配給ではホームレス問題は解決できない」と考えている事が挙げられる。衣食住の無料配給は今日のホームレスのニーズを満たすが明日のニーズは満たさないと各団体が声をそろえて主張している。そしてこれら4団体はみな医療・心療・職業カウンセリング、就労トレーニング、住宅、リハビリなどのサービスが一つにまとまった包括的な支援プログラムがホームレス問題の解決には必要であるとも提唱している。社会学的な見地からも、彼らの主張はもともと私も思う。しかし興味深いのは、これら共通する問題意識の表しかたは其々の団体によって大きく異なっていると言う事である。

まず、就労トレーニングについていえば、ドゥ・ファンドとCFTHの活動は対照的であると思った。「自立とはホームレスだった人が社会に帰還し社会生活を一般の人と同じようにおこなっていくようになる事である」とCFTHは主張する。そしてCFTHは就労活動はあくまでも手当てや給与がしっかりついているオフィスワークが好ましく、不安定なサービス業や肉体労働への就職や特別な産業の開発はかえって自立の妨げになると考え取り組んでいない。一方ドゥ・ファンドも「自立とは社会に一般の人と同じように自分の力で生活していく事である」と考えているが、彼らのプログラムでは手当てなどがあまりしっかりついていない肉体労働の就労トレーニングが主に行われており、卒業生の多くはビルのメンテナンスといった低賃金労働についていっている。これはこれらの団体が対象としている者の性別が違うということもあるが、CFTHの就労トレーニングの観点から見れば、ドゥ・ファンドの就労トレーニングは「就労トレーニング」ではないと言う事になるだろう。たしかにビルの掃除や建設現場での肉体労働などは、人に毎日1年もかけて教えられなくても出来る技術であり、決して安定した生活を導くために必要な技能ではないように思える。DCセントラルキッチンでロバート・エガー氏もこの点を指摘しており、これは恐らくドゥ・ファンドの最大の弱点でもあると私も思う。

いくら男性を対象にしているといっても、他の団体の就労トレーニングの内容にくらべてドゥ・ファンドのそれはとても原始的である事は否めないと思う。彼らの就労トレーニングの軸で

ある地域の清掃活動は、確かにホームレスに対する偏見をなくす為に役に立っているかもしれない。しかし偏見をなくすのが目的であれば、コモングラウンドのホームレスと非ホームレスの混合住宅や、DC セントラルキッチンボランティア交流でも十分出来るし、決してドゥ・ファンドの清掃活動がベストな方法であるとはいえないだろう。それを指摘して、ドゥ・ファンドを「白人が黒人の労働力を搾取しているだけの偽善団体」と辛辣な批判をする人も中にはいる。

しかし、ドゥ・ファンドが肉体労働を中心に行っているのは創立者のマクドナルド氏の人種差別的な搾取の論理というより、マイノリティ達の仕事に対する価値観が深く関連しているように思われる。ドゥ・ファンドの報告のところで少し触れたが、様々な研究結果から、ドゥ・ファンドが対象としているマイノリティの男性の多くがオフィスワークより肉体労働を好む傾向があると言う事実が報告されている。これは、オフィス内の文化が白人中心的で彼らにはなじみにくいということや、アメリカ産業構造が変わる前の彼らの父親世代は一生懸命真面目に働く肉体労働者達で、そんな古き良き時代への憧憬を彼らが持っているせいでもある。こうした価値観を短期間の就労トレーニングで変えていく事は果たして可能なのだろうか？依存症を乗り越えるだけでも大変なホームレスの人々にとって、それはあまりにも高いハードルだと思う。もし、マイノリティの男性の価値観に関する研究結果が正しいとしたら、CFTH が行うような就労トレーニングは、依存症をもつマイノリティの男性には非現実的で非実用的なプログラムだと言える。

それに、依存症を持っている人達にとって清掃活動といった単純作業は薬や酒のことを考えずにすむし、比較的簡単に充実感が味わえ、仕事に対する関心や意欲の向上にも役に立っていると私は思う。朝早く授業にでてカウンセリングを受け、その後は街のハードな清掃作業にいて汗を流す—この単純で規則正しい生活は、仕事をしていく上で最も大切な健全な肉体と精神を養ってくれると思った。そういう意味ではドゥ・ファンドの RWA プログラムは良い仕事を見つける手助けにはなっていないかもしれないが、依存症を乗り越えて労働意欲を伸ばす手助けにはなっていると思う。

DC セントラルキッチンの就労トレーニングはドゥ・ファンドと同様一応肉体をつかう労働ではあるが、専門技術もきちんと教えているのでドゥ・ファンドのような批判は受けていない。確かにビルの清掃などに比べれば調理の仕事のほうが安定しているかもしれないが、ホームレスの人々が皆、調理に向いているわけではない。そういった点を考慮すると、コモングラウンドやドゥ・ファンドの就労トレーニングの中にビルの清掃や整備が含まれているのは人種差別的な発想というより、彼らが支援している人口の現実に反映しているためだと言えるのではないだろうか。

このように同じ問題に対し支援活動のアプローチの仕方が、団体によって違う事実は、ホームレスの就労と言う問題が多面的である事を示唆している。一口にホームレスと言っても、それまで送ってきた人生も、ホームレスになった理由も一人一人違うと思うし、どのような形でその状態を過ごしてきたかも人によって異なると思う。そのため、たった一つの就労トレーニングのあり方がホームレス全員に機能するという事はない。其の事をアメリカの団体は過去の経験から学んでいる。日本のホームレスはアメリカのそれと相違する点は沢山あると思うが、この点は日本にとっても参考になる点であると思った。どのような状況に陥っても存在しつづける人間の多

様性を支援は把握し、コモングラウンドのように様々なニーズに対応する就労トレーニングのコースを設置する必要があると思う。また CFTH がその他の団体が行っていたようにプログラムの参加者にしっかり職業カウンセリングをして、其々のニーズにあった職種の訓練に割り当てる事も重要であると言う事も、彼らの活動経験をみて分かった。

さらに、これらのトレーニングの活動内容を見てきて、短期的および長期的なビジョンの就労トレーニングの両方をもつことも大切だと思った。1年程度の就労トレーニングでは、依存症を克服して就労意欲をわかすことが精一杯である。しかし、これも大切なファーストステップなので、それはそれでいいのだと思う。ただ、就労トレーニングがそこで終わると考えず、そこからさらにステップアップできるトレーニングの機会をもうける事も長期的なサイクルを崩すために必要となるとおもう。

ただ、日本のように高齢のホームレスの場合、ステップアップをするという意識が本人に芽生えるかどうかという疑問は残る。そこで考えられるのは新しい産業の開発と言う事になるのだが、これら 4 団体が行っている産業開発のどれも日本のホームレスの人口にぴったりと合ったものはあまりなかった気がした。しかし、それらの活動内容を応用したかたちでなら日本でも通用していくのではないかという点がいくつかあるので、それをここで言及させてもらうことにする。ただし私は日本の産業やホームレスの事についてはよく知らないのであくまでも素人の意見として捉えていただきたいと思う。

新しい産業の開発を考えたとき、日本がこれから必要となっている産業の一つに老人介護があると思った。その老人介護の中で必要となっていくサービスの中には、栄養バランスの整った老人の口に合う食事の配給サービスなどがあるのではないだろうか。たとえば一人暮らしの寝たきりの老人宅への食事の配給や老人ホームへのケータリングサービスなども将来はニーズが高まるかもしれない。もしそうなれば、DCセントラルキッチンのような活動を応用した活動を日本でもやって行けるのではないだろうか。その他には、日本に来た事のあるコモングラウンドのロザンヌさんのアドバイスで、後継者のいない伝統工芸の継承と言うのが考えられる。日本の伝統工芸の継承をする事で日本の文化に貢献していければホームレス達の自尊心や一般社会のホームレス支援意識が高まるのではないかという彼女の意見に、私も同感である。

住宅の支援活動に関して各団体が共通していた点は、「支援住宅は住宅としての機能以外にも様々なサービスを提供していかなくてはならない」ということである。しかし、どのようなサービスを行うかは既に読まれたように団体によってすこしづつ異なる。CFTH やコモングラウンドは支援住宅の住人と外界の社会との交流についての活動に力をいれているが、ドゥ・ファンドはそれをしていない。芸術や音楽といったバリアフリーの活動を通して、ホームレスとそうでない人々の交流をしていくのは、ホームレスの人々に社会とのつながりを持たせる上で大変重要な事だと思う。また、一般市民のホームレス問題に対する関心と理解を高めるのにも役に立つと思う。

さらに住宅の支援活動に対して強調しておきたいもう一つの点は、様々な種類の住宅を持つことの重要性である。ドゥ・ファンドはシェルターと通過制の短期住居型住宅を提供し、コモング

ラウンドは終身制の(半)永久住居型住宅を提供という具合に、それぞれ力を入れている住宅は異なる。しかし、現在コモングラウンドは通過型住宅を開発しはじめており、またドゥ・ファンドもベタープレイスというような終身型住宅の必要性を感じ建設した事などを考慮すると、就労トレーニング同様、一つの住宅の形が全てのホームレス達の住宅ニーズに対応出来るわけではないということを、アメリカの団体は過去の経験からしっかり学んでいることが良く分かる。

また、アメリカの住宅支援活動取材して日本のホームレスの住宅事情を考えたとき、ある面白い事実気がついた。日本ではシェルターと呼ばれるところが殆どないが、ドヤといわれる安価な宿泊施設があり、日本のホームレス達はお金があるときはそこで寝泊りをし、お金が無いときは路上や公園で野宿をしている。アメリカのホームレスの場合、無料で泊まれるシェルターは沢山あるがドヤのような簡易宿泊施設は殆どない。しかし10年20年ほど前はアメリカにもドヤのような施設があった。福祉受給者用の福祉ホテルがそれである。しかしこれらのホテルは日本のドヤと同じように老朽化進んでいて、所有者の後継者が減少しどんどん廃れていったため、ついに1980年から1990年かけて殆どの福祉ホテルは取り壊されていった。結果これらのホテルを利用していた人達は、福祉ホテルより環境の悪いシェルターや路上に行くことになってしまった。NYのように慢性的に住宅が不足しているところでは、新しい住宅の確保ができないため、現在多くの活動家達は福祉ホテルが取り壊されて無くなっていったことを大変後悔している。これらのホテルをコモングラウンドのように支援住宅にしていっていたなら、新しい住宅を確保する必要がなかったからである。また、ホームレスの人達全てが支援住宅に入りたいと望んでいるわけではなく、事情によっては支援住宅やシェルターより簡易宿泊施設のほうがいいと言う人も中にはいる。福祉施設の解体はこれらの人達を路上に追いやってしまったのだった。そのため、コモングラウンドのようにもう一度、簡易宿泊施設をつくり直す努力をしなくてはならなくなった。

これらの活動内容を取材していくうちに、ホームレスの自立には何段階かに渡るステージがあるということが分かってきた。自立支援を受ける気持ちがないひと、少しある人、とてもある人というように、様々な心理的ステージによって彼らの住宅ニーズも異なるため、そのステージに合わせた住宅が必要であると言う事をアメリカの活動家達は気づき始めている。そのため、シェルター、簡易宿泊施設、通過型通勤寮、終身型支援住宅というように様々な住宅施設を開発が徐々に行われている。

このアメリカの経験から日本の住宅支援活動が参考に出来る点は、これから建設する支援住宅を通過型通勤寮や終身型支援住宅のどちらか一つに絞るのではなく、自立の段階に合わせて対応出来る機能を持つ事が大切であると言う事だと思う。そして全ての種類の住宅に、医療、心療、職業のカウンセリングサービス、就労トレーニングのサービスの設備させ、住宅としてだけの機能ではなく、一つのコミュニティーとして発展させていくことも、社会で居場所を無くしたホームレスの人々が社会で自立をし、そしてその状態を保っていく上で大切な事だと思う。

アメリカと日本のホームレス問題は構造や文化的な違いが沢山あり、調査し始めたとき本当にこの事例報告が役に立つどうかと不安だった。報告書を書き終えた今もまだその不安は多少残っ

ているが、活動家の人々と会って話をし、彼らの活動内容や基本理念を理解していくうちに、問題の構造上や文化の上で様々な違いはあるけれど、ホームレスと言う特殊な社会グループを助けていく上で必要とされる発想は日本もアメリカも同じで、互いの経験から学ぶ点が大いにあると考えるようになった。この報告書ではこれら4団体の多様で創造的な発想と観点を出来るだけバランス良く詳しく伝える事に心がけたつもりであるが、本業である研究活動や講義の合間をぬっておこなった仕事であったため、どうしても不十分な個所が残ってしまったことをお詫びしておきたい。また末筆となってしまったが、今回の報告書の作成にあたりアドバイスをいただいた西成の松繁様、富田様、部落開放同盟の谷川様、ならびに大阪市庁と府庁の方々にお礼を申し上げたいと思う。さらに、今回の多忙なスケジュールに関わらずインタビューを受けてくれたアメリカの活動家の皆さんと元ホームレスの方々、そしてアシスタントとして手を貸してくれた大学院の友人たちにも謝辞を述べたい。

以上、なんとも頼りない結語となってしまったが、この報告書が今後日本で行われるホームレスの自立支援活動と日米の活動家同士の交流活性化に少しでも役に立ってくれることを祈り、筆を擱くことにする。

ニューヨーク

慎 和枝

参考文献

(日本語)

野宿者・人権資料センター 1999～2000 No. 1～No. 5 “路上から現代社会を問う－ Shelter-less” 東京 野宿者・人権資料センター

大阪市立大学 1999 「1999年度野宿生活者(ホームレス)聞き取り調査」大阪 大阪市立大学

(英語)

Bourgois, Phillippe. 1995 “In Search of Respect: Selling Crack in El Barrio”, Cambridge University Press

Duneier, Mitchelle. 2000 “Side Walk” NY: Farrar, Straus, and Giroux.

Jenks, Christopher 1994 “The Homeless” Cambridge, MA: Harvard University Press.

Wilson, William Julius. 1978 “Declining Significance of Race: Blacks and Changing American Institutions” Chicago: University of Chicago Press.

_____. 1987 “The Truly Disadvantaged: The Inner City, the Underclass, and Public

Policy” Chicago: University of Chicago Press.

_____. 1996 “When Work Disappears: The World of the New Urban Poor” New York: Knopf.